

首都圏中央連絡自動車道 埋蔵文化財調査報告書33

— 東金市鉢ヶ谷遺跡（1）・（2）、大網白里市若司谷遺跡 —

平成 28 年 12 月

国土交通省関東地方整備局

公益財団法人 千葉県教育振興財団

首都圏中央連絡自動車道 埋蔵文化財調査報告書33

— とうがね はらが や 東金市鉢ヶ谷遺跡 (1)・(2), おおみしらさと わかし やつ 大網白里市若司谷遺跡 —



序 文

公益財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを目的として、昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第760集として、国土交通省関東地方整備局の首都圏中央連絡自動車道建設事業関連に伴って実施した東金市鉢ヶ谷遺跡（1）・（2）と大網白里市若司谷遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、鉢ヶ谷遺跡（2）から奈良・平安時代の遺構・遺物が数多く検出され、この地域に暮らした人びとの歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が、学術資料として、また地域の歴史解明の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成28年12月

公益財団法人 千葉県教育振興財団
理 事 長 平 林 秀 介

凡 例

- 1 本書は、国土交通省関東地方整備局による首都圏中央連絡自動車道建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は下記のとおりである。

東金市小野字岡ノ谷1195-1ほか	鉢ヶ谷遺跡（1）（遺跡コード 213-027（1））
東金市小野1182-1ほか	鉢ヶ谷遺跡（2）（遺跡コード 213-027（2））
大網白里市金谷郷字殿谷962-1ほか	若司谷遺跡（遺跡コード 402-010）

※大網白里市分の遺跡コードについては、市制施行前の市町村コードをそのまま使用している。
- 3 発掘から報告書刊行に至る業務は、国土交通省関東地方整備局の委託を受け、公益財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆は第5章と第6章第2節を、主任上席文化財主事麻生正信が担当し、第4章を西野雅人氏（事業担当当時上席研究員、現千葉市埋蔵文化財センター嘱託調査員）に依頼した。そのほかの執筆・編集は、上席文化財主事小林清隆が担当した。
- 6 発掘調査から報告書刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、国土交通省関東地方整備局及び東金市教育委員会、大網白里市教育委員会（平成25年1月1日市制施行）の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地図は、下記のとおりである。また、一部を改図して使用した。

第1図	柏書房発行	[明治前期関東平野地誌図集成 東金1/25,000]
第2図	国土地理院発行	1/25,000 地形図「東金」
第3図	東金市発行	1/2,500 地形図
第57図	大網白里市発行	1/2,500 都市計画図
第59図	国土地理院発行	1/25,000 地形図「東金」
- 8 周辺地形の航空写真は、京葉測量株式会社による昭和45年撮影のものを図版1に、昭和47年撮影のものを図版21にそれぞれ使用した。
- 9 本書で使用した図面の方位はすべて座標北である。座標値は世界測地系による。

本文目次

第1章 鉢ヶ谷遺跡（1）・（2）	1
第1節 調査の概要	1
1 調査に至る経緯	1
2 発掘調査と整理作業の組織と担当	1
第2節 遺跡の周辺環境	2
1 遺跡の立地	2
2 周辺の遺跡	3
第3節 発掘調査と整理作業の方法	7
第2章 鉢ヶ谷遺跡（1）の調査	11
第1節 概要	11
第2節 遺構と遺物	12
第3章 鉢ヶ谷遺跡（2）の遺構と遺物	15
第1節 概要	15
第2節 旧石器時代	15
第3節 縄文時代	17
1 竪穴住居	17
2 陥穴・小竪穴・土坑	20
3 遺構外出土遺物	27
第4節 奈良・平安時代以降	31
1 竪穴住居	31
2 掘立柱建物	62
3 土坑	63
4 溝	69
5 遺構外出土遺物	69
第4章 鉢ヶ谷遺跡（2）の動物遺体	77
1 概要	77
2 貝種の分析結果	77
第5章 若司谷遺跡	79
第1節 調査の概要	79
1 調査の経緯と経過	79
2 調査の方法	79
第2節 遺跡の位置と環境	82
1 地理的環境	82
2 歴史的環境	83
第3節 遺構と遺物	83

1 遺構	83
2 遺物	83
第6章 まとめ	87
第1節 鉢ヶ谷遺跡	87
第2節 若司谷遺跡	88
報告書抄録	巻末

挿 図 目 次

〈鉢ヶ谷遺跡（1）・（2）〉	第26図 SI006	38
第1図 周辺地形	第27図 SI007	39
第2図 周辺遺跡分布	第28図 SI008（1）	41
第3図 調査区の位置	第29図 SI008（2）	42
第4図 遺跡遺構分布	第30図 SI009	43
〈鉢ヶ谷遺跡（1）〉	第31図 SI012	44
第5図 調査区周辺地形	第32図 SI013（1）	46
第6図 調査区詳細地形	第33図 SI013（2）	47
第7図 トレンチ設定状況・出土遺物	第34図 SI013（3）	48
〈鉢ヶ谷遺跡（2）〉	第35図 SI014	49
第8図 遺構分布状況	第36図 SI015	50
第9図 旧石器時代の遺物	第37図 SI016	51
第10図 縄文時代の遺構分布	第38図 SI017	53
第11図 SI003	第39図 SI018	54
第12図 SI010	第40図 SI019	55
第13図 SI011	第41図 SI020	56
第14図 SK041 b・010	第42図 SI021（1）	58
第15図 SK013・050	第43図 SI021（2）	59
第16図 SK019・022・045	第44図 SI022	60
第17図 SK046・049	第45図 SI023	61
第18図 遺構外出土石器	第46図 SI024	62
第19図 遺構外出土石器	第47図 SB001	63
第20図 奈良・平安時代以降遺構分布	第48図 土坑（1）	64
第21図 SI001	第49図 土坑（2）	65
第22図 SI002（1）	第50図 土坑（3）	66
第23図 SI002（2）	第51図 土坑（4）	67
第24図 SI004	第52図 溝状遺構分布	68
第25図 SI005	第53図 溝状遺構（1）	70

第54図	溝状遺構 (2)	71	第58図	調査区とトレンチ設定状況.....	81
第55図	溝状遺構 (3)	72	第59図	周辺遺跡分布.....	82
第56図	遺構外出土遺物.....	73	第60図	平坦部・塚トレンチ設定状況.....	84
〈若司谷遺跡〉			第61図	塚調査状況.....	85
第57図	遺跡周辺地形.....	80	第62図	出土遺物.....	86

表 目 次

第1表	奈良・平安時代以降土坑一覧.....	67	第5表	貝類同定結果.....	77
第2表	溝一覧.....	72	第6表	貝種組成.....	77
第3表	石器・石製品属性表.....	74	第7表	貝類計測値分布.....	78
第4表	掲載土器観察表.....	74	第8表	「標準貝類相」.....	78

図 版 目 次

図版1	鉢ヶ谷遺跡周辺空中写真 〈鉢ヶ谷遺跡 (2)〉	8. SI007 (2)
図版2	1. (2) 地区完了全景 北側 2. (2) 地区完了全景 中央部	図版6
図版3	1. 調査前風景 2. 調査前風景 3. 調査完了状況	1. SI008 (1) 2. SI008 (2) 3. SI009 4. SI010 5. SI011 6. SI012 7. SI013 (1) 8. SI013 (2)
図版4	1. SI001 2. SI002 3. SI002遺物出土状況 4. SI002クルル鉤出土状況 5. SI002カマド 6. SI003 7. SI003埋壺炉 8. SI003断面	図版7
図版5	1. SI004 2. SI004遺物出土状況 3. SI005 4. SI006 (1) 5. SI006 (2) 6. SI006鎌出土状況 7. SI007 (1)	1. SI013遺物出土状況 2. SI014 3. SI015 (1) 4. SI015 (2) 5. SI015遺物出土状況 6. SI015カマド 7. SI017 8. SI018 図版8
		1. SI019 2. SI020 3. SI021 4. SI023 5. SI021・022・024

- 6. SK010
- 7. SK013
- 8. SK022
- 図版9 1. SK041 b
- 2. SK045
- 3. SK045土層断面
- 4. SK045貝層検出状況
- 5. SD002
- 6. SD003
- 7. SD006・007
- 8. SD009
- 図版10 出土土器 (1)
- 図版11 出土土器 (2)
- 図版12 出土土器 (3)
- 図版13 出土土器 (4)
- 図版14 1. (1) 区旧石器
- 2. (2) 区旧石器
- 3. 縄文土器 (1)
- 図版15 縄文土器 (2)
- 図版16 遺構外出土縄文土器
- 図版17 1. 石器 (1)
- 2. 石器 (2)

- 図版18 石製品
- 図版19 金属製品・銭貨
- 図版20 SK045「標準貝類相」
(若司谷遺跡)
- 図版21 若司谷遺跡周辺空中写真
- 図版22 1. 遺跡遠景
- 2. 確認トレンチ①
- 3. 確認トレンチ②
- 図版23 1. 調査区近景①
- 2. 調査区近景②
- 3. 調査状況①
- 4. 調査状況②
- 5. 第1トレンチ
- 6. 第3トレンチ
- 7. 第4トレンチ
- 8. 第5トレンチ
- 図版24 1. 第5トレンチ東壁
- 2. 塚調査前全景①
- 3. 塚調査前全景②
- 4. 塚調査状況
- 5. 出土遺物

第1章 鉢ヶ谷遺跡（1）・（2）

第1節 調査の概要

1 調査に至る経緯

首都圏中央連絡自動車道(圏央道)は、都心を中心にして円を描くように計画された、総延長約300kmの環状道路である。千葉県内では、平成25年4月に東金JCTから木更津東ICが開通している。道路建設予定地内に所在する埋蔵文化財については、千葉県教育委員会との協議によって、逐次発掘調査による記録保存の措置が講じられてきた。今回報告する鉢ヶ谷遺跡は東金JCTから茂原北IC間に所在し、東金JCTからわずかに南下した台地上に立地する。事業主体である国土交通省関東地方整備局は、この遺跡の取り扱いについて千葉県教育委員会と協議を重ねてきた。その結果、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなり、公益財団法人千葉県教育振興財団に発掘調査が委託された。

発掘調査地区は、鉢ヶ谷遺跡（1）と（2）の2地区であり、鉢ヶ谷遺跡の北東端部付近に当たる。発掘調査と整理作業内容は次のとおりである。

2 発掘調査と整理作業の組織と担当

発掘調査と整理作業に関わる各年度の作業内容及び担当職員は以下のとおりである。

（1）発掘調査

平成20年度 鉢ヶ谷遺跡（1）

期間 平成20年11月17日～平成20年11月28日

組織 調査部長 大原正義 中央調査事務所長 折原 繁
主席研究員兼副所長 池田大助

内容 確認調査 上層90㎡/870㎡ 下層26㎡/870㎡

本調査 上層-㎡ 下層-㎡

平成21年度 鉢ヶ谷遺跡（2）

期間 平成22年3月1日～平成22年3月30日

組織 調査部長 及川淳一 主席研究員兼中央調査事務所長 折原 繁
上席研究員 鶴沢正則

内容 確認調査 上層789㎡/6,606.4㎡ 下層112㎡/6,606.4㎡

本調査 上層127㎡ 下層-㎡

平成22年度 鉢ヶ谷遺跡（2）

期間 平成22年4月7日～平成22年7月29日

組織 調査部長 及川淳一 主席研究員兼中央調査事務所長 白井 久美子
主席研究員 加藤正信 上席研究員 鶴沢正則

内容 本調査 上層5,181.4㎡ 下層-㎡

（2）整理作業

平成25年度 鉢ヶ谷遺跡（1）・（2）

期間 平成25年10月1日～平成25年10月31日

組織 調査研究部長 伊藤智樹 整理課長 今泉 潔

内容 水洗～注記

平成26年度

期間 平成26年12月1日～平成27年3月31日

組織 調査研究部長 伊藤智樹 整理課長 今泉 潔

主任上席文化財主事 井上哲朗 上席文化財主事 小林清隆

内容 記録整理、分類・選別、接合・復元、実測・拓本、写真撮影、トレース、挿図・図版作成の一部

平成27年度 鉢ヶ谷遺跡（1）・（2）

期間 平成27年4月1日～平成27年6月30日・8月1日～8月15日

組織 整理課長 岸本雅人

上席文化財主事 小林清隆

内容 挿図・図版作成の一部から原稿執筆・編集の一部

平成28年度

期間 平成28年4月1日～平成28年12月22日

組織 整理課長 山口典子

上席文化財主事 小林清隆

内容 原稿執筆・編集の一部から報告書印刷・刊行

第2節 遺跡の周辺環境

1 遺跡の立地

本報告書において報告を行う鉢ヶ谷遺跡は、千葉県の中東部東金市小野に所在する。千葉市から東金市付近は房総半島の東西方向が最も狭まり、東側の九十九里浜と西側の東京湾との距離が狭まる地域である。また、遺跡の立地する西側に接する千葉市緑区土気地区は、東京湾と古鬼怒湾と太平洋水系の分水嶺が交錯する場所である。鉢ヶ谷遺跡の標高は72mを測り、太平洋へと注ぐ河川に関わる支谷が入り込んでおり、水系は太平洋水系に属する。九十九里浜までは直線距離で約12kmである。

水系の1つである真亀川は、太平洋から西に上り、東金市街地周辺に広がる南白亀川^{ひらびら}低地からさらに西側の上流域に至ると、台地を刻んで田中谷^{たなかや}（北幸谷川谷）という開析谷を形成する。そこからさらに多くの支谷が南北に延びている。遺跡の東側から南側にかけては、田中谷から南に形成された小野支谷によって画され、同じように田中谷から分かれた楠支谷が北側を画している。遺跡全体は、南北に約650m、東西に最大部分で250mの広い範囲に展開するが、南に向かって東西の幅が狭まっていく。それは遺跡の西側の菱田支谷と、東側から大きく入り込む小野支谷が遺跡の南側の台地を狭めているからである。今回の調査区は、遺跡全体から見ると北東の端部ともいえる場所で、楠支谷に張り出した台地上が対象となっている。

田中谷の南には鉢ヶ谷遺跡ほか多くの遺跡が立地し、谷の北側についても遺跡が近接して展開している。次に周辺の遺跡を紹介しておくことにしたい。

2 周辺の遺跡

今回の圏央道建設事業に伴う発掘調査に先行して、鉢ヶ谷遺跡は小野山田地区土地区画整理事業に伴いすでに別地点調査が行われている。この成果についてはすでに報告書が刊行されているので、簡単にその成果についてふれたい。

土地区画整理事業に伴う調査地区は、今回の南西側に隣接した、遺跡の中心部とも呼べる地区で、平成5年から平成9年にかけて、(財)山武郡市文化財センターによる約84,000㎡の発掘が行われている。対象範囲は、遺跡の東西幅が最も大きくなる区域から、南側の狭まる場所に至る広範囲である。発掘による主な検出遺構としては、縄文時代の竪穴住居10軒、古墳時代後期から平安時代にかけての竪穴住居345軒、掘立柱建物235棟等である。また、旧石器時代の調査では、4か所の遺物集中地点が発見され、縄文時代の陥穴や土坑が数多く検出されている。遺跡の時代幅は広く、特に奈良平安時代の遺構や遺物に注目される成果が上がっている。本書で報告する場所と隣接するが、境界部分では微妙に空白地が存在する。

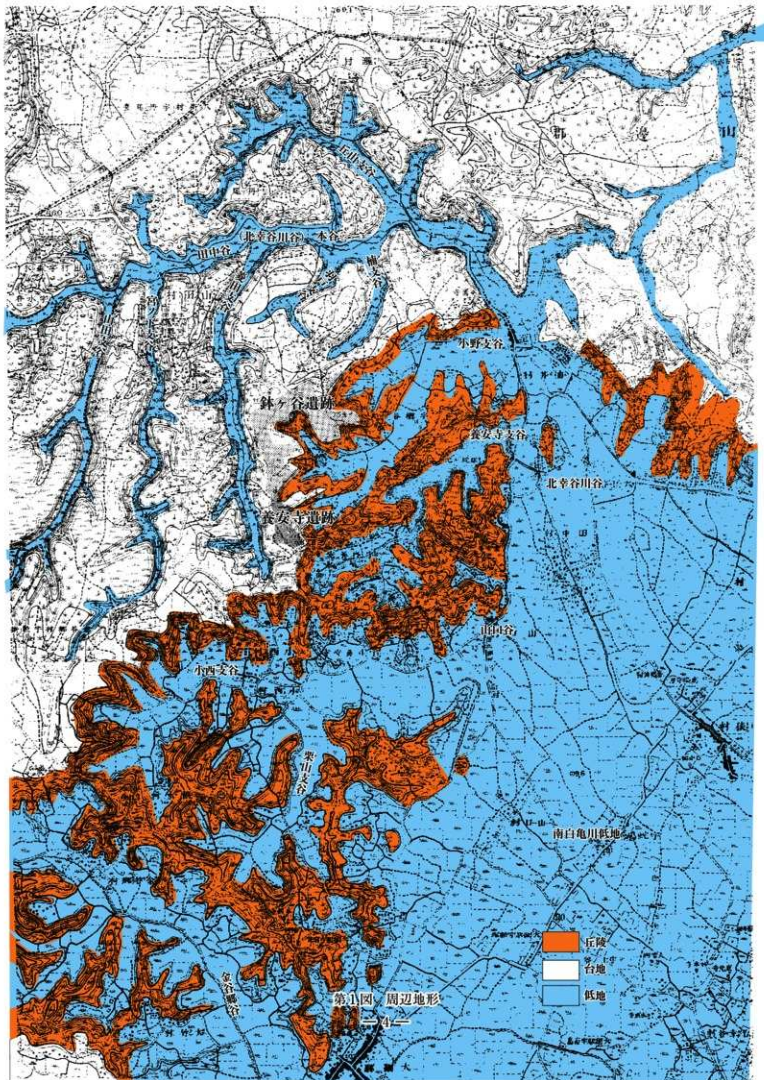
次に周辺に所在する遺跡について、時代ごとに概観しておこう。

旧石器時代 周辺の調査では、大綱山大遺跡群中の升形遺跡の成果が注目される。ここでは5枚の文化層から礫も含め9,000点が出土し、文化層Ⅰとした立川ローム層Ⅲ層の中位からは、10か所の遺物集中地点が検出され、出土した細石核は乳滑型に、搔器は角二山型に、彫刻刀形石器は荒屋型にそれぞれ比定されている。石材のほとんどがいわゆるチョコレート頁岩であり、石器組成から北方系の細石器石器群とみられている。さらに文化層Ⅱからは槍先形尖頭器が出土している。鹿島川本流の最上流域に所在する上引切遺跡では、Ⅲ層中に2か所の遺物集中地点が検出されている。出土遺物の点数は少ないが、1点の凝灰岩の扁平な礫の節理面に線刻が刻まれていた。線刻は鋸歯状と波状の線であるが、意味については判然としないものの、この時期の貴重な資料となっている。当遺跡からみると南側である大綱白里市字砂田に所在する砂田台遺跡は、東京湾へと注ぐ村田川と、太平洋に注ぐ南白亀川と同じく一宮川の分水嶺にあたる地域に立地している。この遺跡では2枚の文化層が確認され、文化層Ⅰは始良Tn火山灰(AT)を含有するⅥ層に検出され、ナイフ形石器や搔器を含む300点の遺物が出土している。文化層ⅡはⅣ層～Ⅴ層にかけて700点弱の遺物が出土し、白滝頁岩を用いたナイフ形石器や尖頭器が含まれていた。

縄文時代 調査例は旧石器時代と比較すると、件数が飛躍的に増加している。鉢ヶ谷遺跡の(財)山武郡市文化財センターによる調査では、早期末の竪穴住居が1軒検出されているほか、溝型の陥穴が多数検出されている。大綱山田台遺跡群の南前野・道門坊西遺跡では、野島式期の大型住居1軒と炉穴50基が検出され、その炉穴が長軸長100m、短軸長40mの楕円形に分布していた状況が明らかになり注目された。遺物による時期決定が難しいが、早期の可能性の高い陥穴は、平面形態が細長い溝型が主体になる。ほかに大綱山田台遺跡群の一本松遺跡で114基、升形遺跡で153基検出されている。陥穴の濃密な分布は、分水嶺地域における特徴になるのであろうか。養安寺遺跡を挟んだ南に立地する小西城跡からは、鴉臼台式期の炉穴群が城跡構築に破壊されず、良好な保存状態で検出されている。

前期では、鉢ヶ谷遺跡から花積下層式、黒浜式、諸磯式、浮島式が出土し、小西城跡からは、諸磯式と浮島式がややまとまって出土し、土坑が1基検出されている。また、石製の秩状耳飾の完形品や装身具も発見されている。

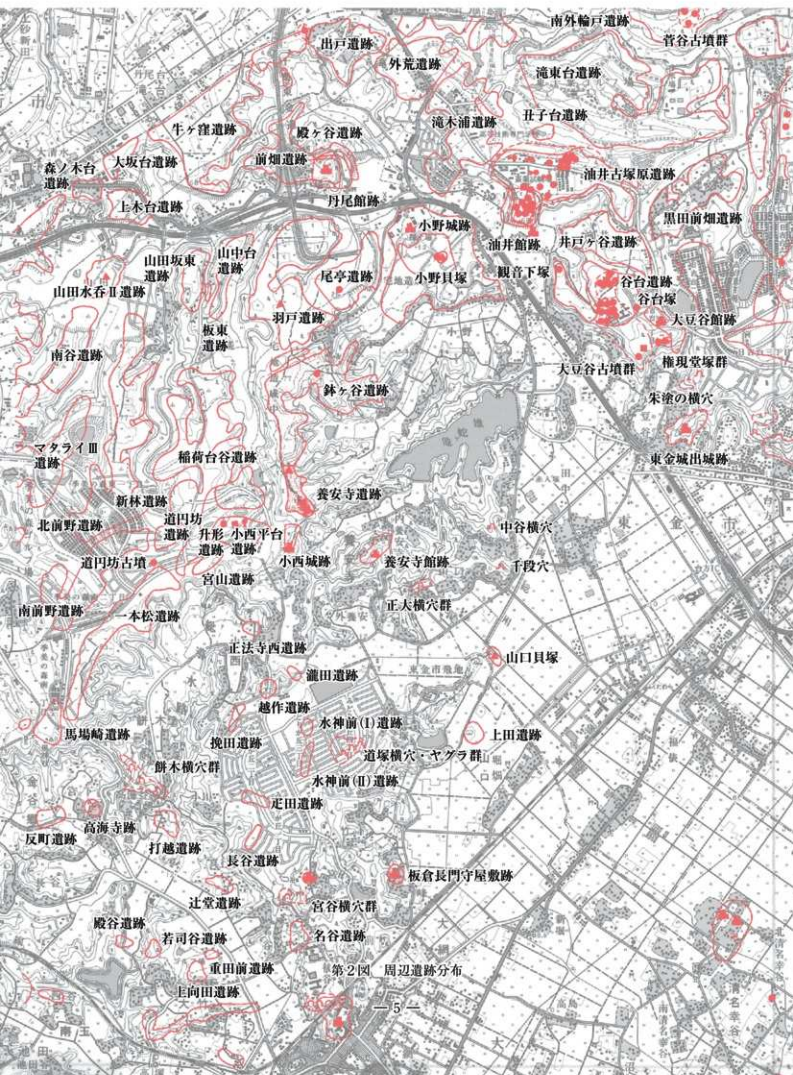
中期では鉢ヶ谷遺跡の五領ヶ台式期の土坑と、そこから出土した遺物が注目されている。土坑は長径140cm、深さ55cmで墓坑と考えられている。底面付近から中空土偶、小形の深鉢、舟形土器、椀形土器が



第14圖 周辺地形

二九一

- 丘陵
- 谷地
- 低地



まとまって出土し、意図的に墓坑内に納められたとみられる。土偶は河童形土偶と呼ばれる中部地方で多く見られるものである。なお、土偶を含む墓坑内の一括出土品は平成14年3月に県指定有形文化財（考古資料）に指定されている。鉢ヶ谷遺跡で検出された五領ヶ台式期以降は、明瞭な集落形成が途絶えた様相を呈していたが、阿玉台式期の後半以降になると羽戸遺跡や養安寺遺跡で集落の形成が始まる。羽戸遺跡は鉢ヶ谷遺跡の北側で、北幸谷川谷から分かれている楠支谷が両遺跡を分けている。羽戸遺跡は広範囲に展開する遺跡であるが、阿玉台式期からの竪穴住居や土坑の存在が認められるのは、鉢ヶ谷遺跡と谷を挟んで対峙する台地上になる。ここでは中時式期になると遺構の数が増加し、加曾利EⅢ式期まで集落が継続する。このような展開は東京湾側に立地する環状集落と同じような経過をたどる状況が捉えられている。また、集落の継続期に斜面貝層や遺構内貝層が形成されている。貝類はチョウセンハマグリが中心で、それにダンベイキサゴの2種がほとんどを占めている。養安寺遺跡においても中時式期以降の竪穴住居や土坑が検出され、北側には大規模な斜面貝層が残されていた。養安寺遺跡の詳細は別の報告書に示したので併読していただきたい。この両遺跡からやや遅れて集落が営まれたのは一本松遺跡で、加曾利EⅡ式期から小規模な環状集落が形成される。また、詳細は明らかにされていないが小野遺跡にも同じような時期に集落が存在する。

羽戸遺跡で中時式期から営まれた集落が加曾利EⅢ式期前後で姿を消した後、羽戸遺跡第1地点では称名寺式期の竪穴住居や土坑が検出されている。称名寺式期の竪穴住居は柄鏡式とみられ、屋内での石棒祭祀が行われていた痕跡が発見されている。

弥生時代 初期の遺跡は、周辺地域に顕著ではなく、小西城跡の調査で荒海式から弥生時代の土器片がわずかに検出されている程度にとどまる。集落は、新林・北前野遺跡で後期後葉の竪穴住居が発見されている。大変数少ない例であり、同時期の東京湾側の草刈遺跡等と対照的な在り方を呈している。

古墳時代 前期から中期にかけては小規模な集落が散在し、この時期の目立った遺跡は存在しない。規模の大きな集落の形成は、後期段階に明瞭となる。周辺各所に集落の形成が認められ、鉢ヶ谷遺跡では7世紀に入ると竪穴住居が構築されるようになる。先行する大規模な集落は、北幸谷川谷の北側に展開する油井古塚原遺跡や滝東台遺跡にみられ、後期後葉まで継続する。前者では後期の竪穴住居76軒が調査され、後者でも69軒が検出されている。北幸谷川谷の南側に立地する尾亭遺跡においてもまとまった竪穴住居が検出され、鉢ヶ谷遺跡の西側に谷を挟んで所在する稲荷谷遺跡でも、多くの竪穴住居を中心に多くの遺構が検出されている。また、南前野・道円坊西遺跡にも比較的大規模な集落が営まれる。

古墳については養安寺古墳群が知られている。鉢ヶ谷遺跡から南に向かうと台地の幅が狭まり尾根状となり、そこを境界にして養安寺遺跡へと続いていく。その境界付近に造営された養安寺3号墳は墳径24mの円墳で、その南側から埋葬施設1か所が検出されている。副葬品は直刀2振りと鉄鎌55点以上である。造営時期は7世紀と考えられている。升形遺跡では周溝のみであるが円墳3基が近接して検出されている。一方で油井古塚原遺跡一帯では、集落と同様に大規模な古墳群の造営が認められる。油井古塚原古墳群は、前方後円墳7基、円墳38基から構成され、これまでに3回以上の調査が実施されている。なかでも、埋葬施設から環頭大刀、鉄鎌、馬具、金環、琥珀玉等が出土した直径40mの円墳や、銅鏡、大刀、鉄鎌50点等が出土した直径27mの円墳の調査が注目される。

奈良・平安時代 鉢ヶ谷遺跡を含む小野山田遺跡群、大綱山田台遺跡群、金谷郷遺跡群という近接した遺跡群において急速な集落形成が展開する。鉢ヶ谷遺跡の既調査では300軒近い竪穴住居と掘立柱建物230

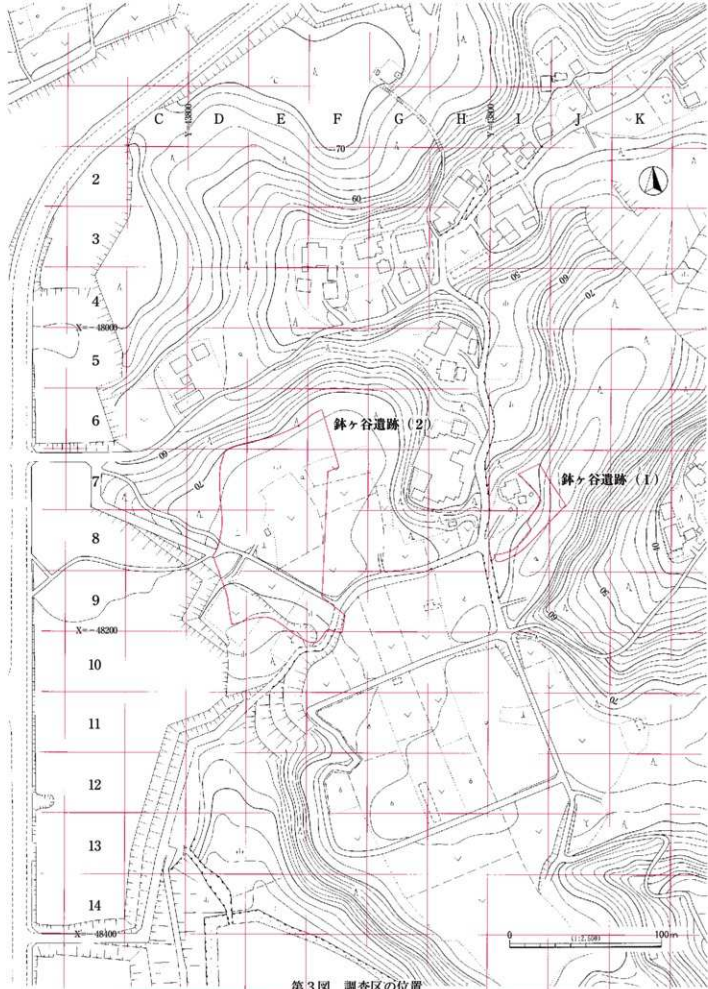
棟以上が検出されている。遺構には鉄生産に関連した可能性が指摘されるものもあり、墨書土器の出土数の多さも目を引いている。墨書では「大立」が9世紀後半に出現している。小野山田遺跡群中の尾亭遺跡は、竪穴住居200軒以上、掘立柱建物40棟が検出されている。成果としては、瓦塔が出土した四面廂の建物や、青銅製帯金具8点が出土した竪穴住居ほかを挙げることができる。尾亭遺跡の南側に続いている羽戸遺跡からは、竪穴住居100軒や掘立柱建物15棟が検出されている。稲荷谷遺跡では竪穴住居と200棟を越す掘立柱建物の存在が明らかになり、廂付掘立柱建物や総柱掘立柱建物が9世紀に構築されている。新林遺跡は4か所に分かれてこの時期の遺構の集中がみられ、台地の南側の地区から四面廂建物とその前面と西側・南側・東側に配置された掘立柱建物群が検出され、正堂、礼堂、僧坊、倉が配置された村落内院として知られている。同じく猪ヶ崎遺跡では竪穴住居147軒と、その数を圧倒的に上回る241棟の掘立柱建物が出土されている。ここからは「田本」、「北曹司」、「山邊」等の墨書土器が出土している。金谷郷遺跡群の山荒久遺跡からは、瓦塔、磁鉢のような仏教関連の遺物に加え、唐式鏡である「麒麟鳳凰八花鏡」や鐘鈴鏡という特殊な遺物が出土している。一般集落とはやや異なる趣から、山邊郡の郡衙としての可能性も高いとの指摘がある。山邊郡に関連しては、油井の台地上に所在する八街市流台遺跡から出土した「山邊郡印」の存在があるが、郡衙の候補地を金谷郷遺跡群あるいは大綱山田台遺跡群近辺とする妥当性は、遺跡の在り方や遺物から考えると強いといえよう。このような周辺地域の遺跡の最盛期は9世紀代にあり、その後は竪穴住居や掘立柱建物軒数が減少していく傾向が顕著となる。

中近世 鉢ヶ谷遺跡の北西地区では塚32基が確認されている。遺物を出土した塚は1基にとどまり、確かな年代比定は難しいが、近接して発見されている90基近い火葬跡と密接な関連を有して構築されたと推定されている。火葬跡からは銭貨が出土しており、宋銭～新寛永までが認められる。ほかに欄列や溝が検出されているが、年代幅を中世～近世としているものの、多くは近世以降の所産と考えられる。羽戸遺跡では台地整形を行った地区が存在する。南側斜面部を最大3m掘り下げて平場を造り出している。その平場に掘立柱建物や柱穴と考えられる小ピットが多数検出され、出土した陶磁器類から14世紀後半～15世紀後半に営まれたことが明らかになっている。後続する戦国時代の城跡の調査では、圏央道建設に伴い調査を行った大綱白里市小西城跡がある。城郭は本城、中城、外城、古城の4ブロックに分かれることが明らかになり、本城・中城の周囲は土塁と空堀が巡らされていた。遺物は少なく、瀬戸・美濃、常滑の製品が出土している。同時期の屋敷地が稲荷谷遺跡に確認されており、中世の城郭と集落の関係を考えるうえで注目されている。

第3節 発掘調査と整理作業の方法

今回の発掘調査は、2地区に分かれて調査区が設けられることとなった。鉢ヶ谷遺跡(1)は、圏央道建設に関連して調査を行った地区で、鉢ヶ谷遺跡(2)は路線にかかる地区である。両者の関係は(1)が東側、(2)が西側になる。調査に先立ち、公共座標(世界測地系)に沿って、2地区の調査区全域を覆う方眼網を設定した。方眼は40m×40mを大グリッドとした。大グリッドは、西から東に向かってA・B・C…、北から南に0・1・2・3…と付けた。さらに大グリッド内を4m×4mの小グリッド100個に分けた。(2)側のD5-00が、公共座標値ではX=-48,000、Y=43,800となる。

調査区(1)の位置は、第3図に示したように日蓮宗の寺院である長栄寺の東側に鉤の手状に設けられたが、ほかにこの調査区に隣接する南東側に土塁状の盛土部分が対象となった。この土塁状の盛土の調査



第3図 調査区的位置



第4図 遺跡遺構分布

は、排土の流出や隣接する墓地の祭祀継承者並びに寺院管理者の意向を配慮し、断面切断による調査は実施不可能と判断され、地形測量のみを行うこととなった。鉤の手状の調査区は、平成20年11月17日～同20年11月28日にかけて行った。まず、調査区内に任意の方向にトレンチを設定して上層の確認調査を行い、さらに下層の確認調査を対象面積の3%について実施した。その結果、上層では遺構は検出されず、下層では1か所から石器が検出され、その周辺を拡張して調査したが、集中地点としての拡がりは認められなかった。この調査区については、確認調査で調査を終了した。

鉢ヶ谷遺跡(2)の調査区については、平成22年3月1日～同22年3月30日まで上層と下層について確認調査を実施した。上層については、縄文時代の土坑、奈良・平安時代の竪穴住居が発見され、下層は石器の出土が認められず、上層については翌年本調査を実施することとなり、下層については確認調査のみとなった。

上層の本調査は平成22年4月7日から開始した。表土を重機で除去した後、遺構の検出作業を行い、竪穴住居や土坑、溝状遺構のプラン確認を行った。遺構の精査は種別ごとに略号を付して、調査順に001から順次付けて行い、竪穴住居にはS I、土坑の部類にはSK、溝状遺構にはSDという先頭記号を使用した。精査は基本的に土層断面観察用のベルトを設定し、床面まで掘り下げ、遺物は器種が分かる程度の遺存のあるものについて、その出土地点を記録して取り上げることとした。竪穴住居は、縄文時代に帰属する時期と、カマドを設けた奈良時代以降との大きく2時期が検出された。縄文時代については、3軒の竪穴住居が検出されたが、遺存状態はいずれも不良であった。同時期の数基の小竪穴は比較的掘込みが深く、その中の1基から貝層が検出され、これについては全量採取した。奈良時代以降の竪穴住居は、カマドの調査を個別に行う方針をとったが、多くは遺存状態が不良であった。ほかに個々の写真撮影等を行い、平成22年7月29日に現地における発掘調査を完了した。

整理作業は、年度計画に基づき平成25年度から開始した。平成25年は、遺物の水洗・注記を行った。ただ、縄文時代の小竪穴出土の貝層については、先行して水洗・分類・選別を実施している。

平成26年度の作業は、記録整理、分類・選別、接合・復元、実測・拓本を行い、図面のトレースを進め、遺物の写真撮影や挿図作成、図版作成の一部を行った。

平成27年度は前年に引き続き挿図・図版作成の一部から原稿執筆・編集の一部まで実施した。

平成28年度は編集の一部から報告書の印刷・刊行に伴う作業を行う。

引用・参考文献

- 青木幸一 2010「上総国山邊郡山口郷と稲荷谷遺跡」『房総の考古学』 史館同人編
- 小高春雄 2015「発掘調査で出土する銭貨 ―千葉県内の諸例から―」『研究連絡誌』第76号(公財)千葉県教育振興財団(公財)千葉県教育振興財団 2014「首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書23 -大網白里市小西城跡-」
- (財)千葉県教育振興財団 2012「首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書16 -東金市羽戸遺跡第1地点・第2地点-」
- (財)千葉県文化財センター 1998「千葉県埋蔵文化財分布地図(2) -香取・海上・匝瑳・山武地区(改訂版)-」
- (財)山武郡市文化財センター 1994「大網山田台遺跡群 I -概要篇・旧石器時代篇・縄文時代篇-」
- (財)山武郡市文化財センター 1995「油井古塚原遺跡群」
- (財)山武郡市文化財センター 2000「小野山田遺跡群 I -鉢ヶ谷遺跡-」
- (財)山武郡市文化財センター 2002「小野山田遺跡群 IV -稲荷谷遺跡-」

第2章 鉢ヶ谷遺跡（1）の調査

第1節 概要

前章第3節に述べたように、鉢ヶ谷遺跡（1）の調査区は、大グリッドの7I・8I・7Jの一部にかかる地区で、標高は70m～73mになる。第5図のアミを入れた調査区については、第7図のようなトレンチを設定し上層及び下層の確認調査を行った。さらにアミで示した調査区の南東側は、土塁状あるいは塚状の土盛が認められた。通常は測量を実施した後、断面切断によって構築状況を調査する手順を経るべきであるが、隣接する墓地の関係者並びに寺院の管理者の意向と、土砂の流出が懸念されたため、測量のみの調査となった。この場所の測量結果は第6図のようになった。数か所の塚状となる土盛が等高線に現れているが、詳細は上述の経緯から明らかにならない。



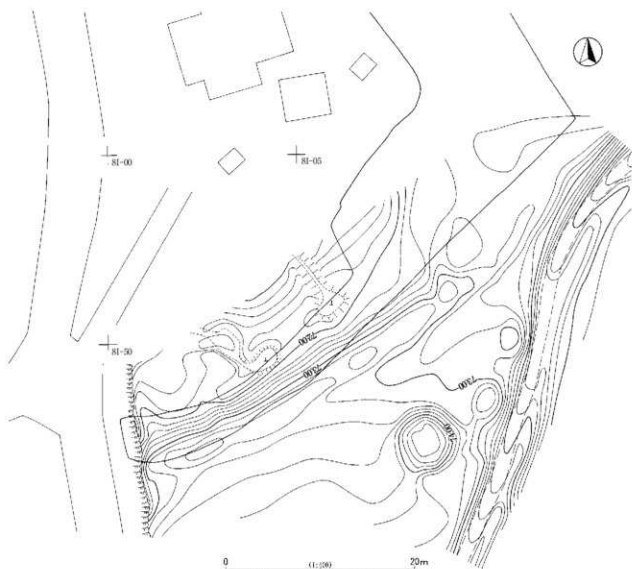
第5図 調査区周辺地形

第2節 遺構と遺物

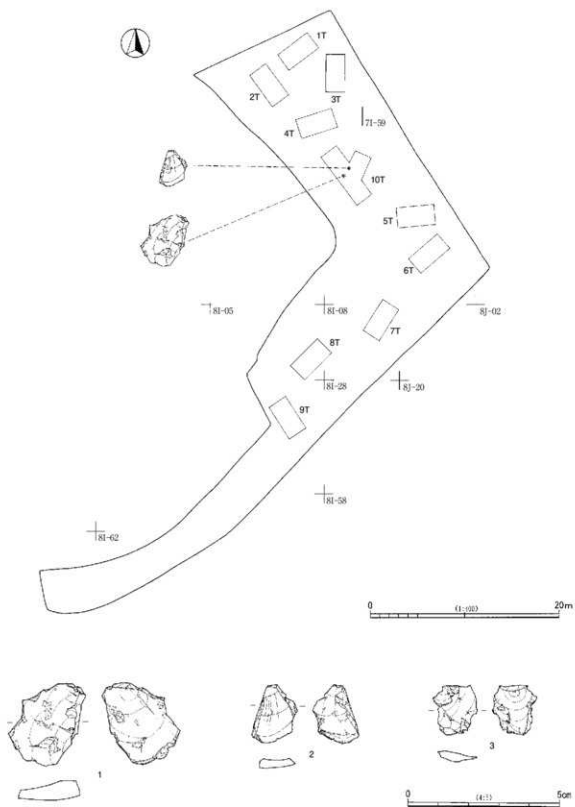
第6図の南東端部の1基の見かけの直径が最も大きく約7mとなり、高さは約1mである。ほかは直径2m前後でいずれも低い。土塁状の盛り上がりは明瞭ではない。

確認トレンチは、幅2m、長さ4mを基本にして任意の方向に10か所設定した。トレンチ内は立川ローム層のソフトローム層上面まで全体に掘り下げ、遺構や遺物の出土状況を確認した。調査の結果、土器の細片が出土したほか遺構は検出されず、上層については確認調査によって完了することとなった。引き続き旧石器時代の石器についてその包含の有無を確認するため、2m×2mで武蔵野ローム層上面まで掘り下げて石器の包含を確認した。その結果、10トレンチの一角のみで、立川ローム層のハードローム層中(IV層)から黒曜石の剥片が2点出土した。その結果から周辺を拡張したが、もう1点の剥片が出土したものの、それ以上の遺物分布の拡がりは認められず、部分的な拡張によって下層の調査も終了した。

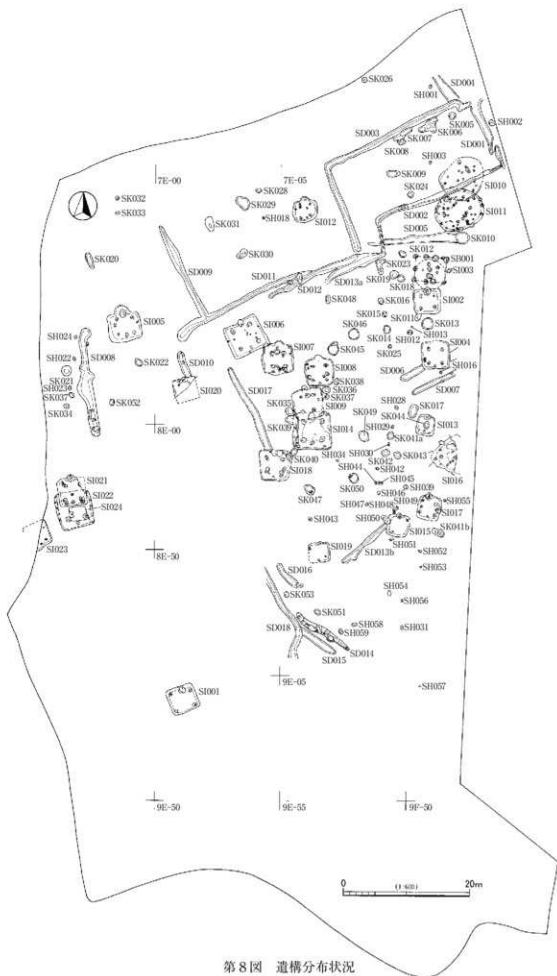
遺物は第7図1～3の黒曜石製の剥片である(図版14)。いずれも不純物が多く認められ、同一母岩である可能性が高い。1は最大長27.0mm、最大幅25.5mmの剥片で、3点の中で最も大きいものである。



第6図 調査区詳細地形



第7図 トレンチ設定状況・出土遺物



第8図 遺構分布状況

第3章 鉢ヶ谷遺跡（2）の遺構と遺物

第1節 概要

調査区（2）は、(財)山武郡市文化財センターが調査を行っているI区の北東側に隣接する調査区である。道路がほぼ南北に通る場所であることから、遺跡の北東部に広がる平坦部を縦断するよな調査区である（第3図参照）。調査に入る時点において、すでに報告書が刊行されているI区の成果から、奈良・平安時代の遺構が検出されることが推測され、遺構の分布密度も濃いという見通しがあった。

実際に調査で検出された遺構は下記ようになった。

まず縄文時代は、堅穴住居3軒、陥穴1基、小堅穴・土坑8基が調査区の東側を主な分布域として検出された。陥穴は単独で検出され、周辺に多い溝型陥穴ではなく、平面形が楕円形を呈する部類である。小堅穴には断面形状が袋状を呈するものも存在する。

明らかに古墳時代に位置づけられる遺構は発見されていない。

奈良・平安時代は、堅穴住居や掘立柱建物などが検出された。堅穴住居件数は推測したとおり、21軒検出され、比較的分布密度が高い状況が窺われる。分布は調査区の北側に多く、I区に近い南側は希薄な状況である。掘立柱建物は1棟にとどまり、I区とは異なる様相がみられる。

土坑や溝状遺構については、一部が奈良・平安時代に比定され、多くは中世から近世の所産と考えられる。これらの遺構も調査区の北側に多く検出されている。

次に出土遺物について触れておきたい。まず旧石器時代は、確認調査による石器の出土は認められず、石器集中出土地点は存在しないと判断することとなった。しかし、単独で出土した石器の中に旧石器時代に比定できる遺物も認められた。

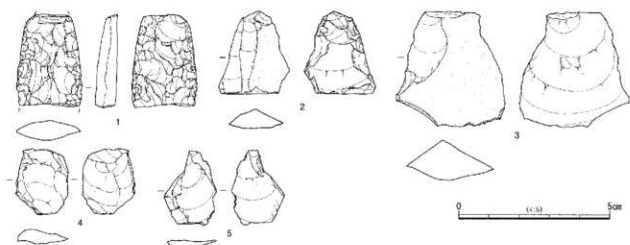
縄文時代は表土や遺構覆土から早期、中期、後期の土器が出土し、ほかに石器が出土した。それぞれ出土量はわずかである。堅穴住居は保存状態がいずれも不良で、出土遺物もわずかにすぎない。中期に比定される小堅穴の1基からは貝層が検出され、近隣に所在する同時期の羽戸遺跡や養安寺遺跡との対比資料となるデータを得ることができた。

奈良・平安時代の堅穴住居からは土師器や須恵器の土器類が出土している。土器類は堅穴住居ごとに多寡があり、まとまった土器類を出土した堅穴住居は少ない。ほかに石製品、金属製品や石製品が出土している。鉄製品ではクルル鉤が出土しており注目される。

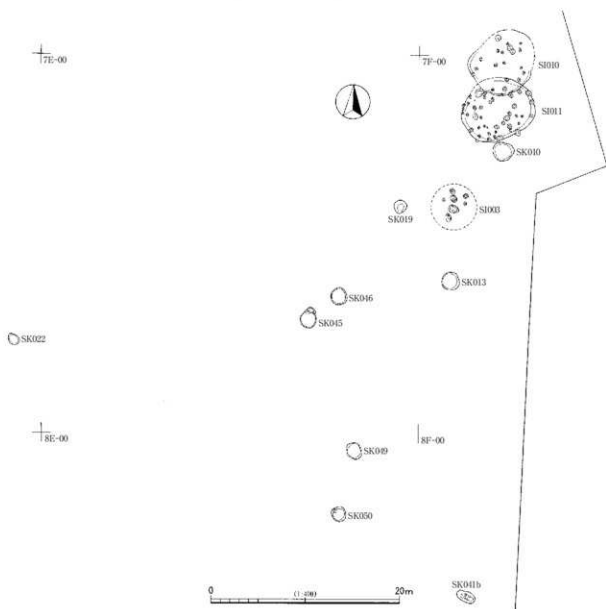
第2節 旧石器時代

上述したように、旧石器時代の石器集中地点の有無を調査するための下層の確認調査を実施した結果、ローム層中から石器は発見されなかった。しかし、後世の遺構覆土から出土した石器の中に、旧石器時代に比定される石器が存在していたため第9図（図版14）に図示した。

第9図1は両面加工が行われている尖頭器である。先端部及び基部を欠損する。頁岩製で、遺存する長さは30.5mmである。2は二次加工が認められる黒色安山岩製の剥片である。3は流紋岩製の剥片で、長さ37.5mm、幅36.0mmである。使用痕や加工痕は認められない。4は安山岩製の剥片で、表裏面にローム層が付着していたことから旧石器時代に帰属させた。5は頁岩製の剥片である。



第9図 旧石器時代の遺物



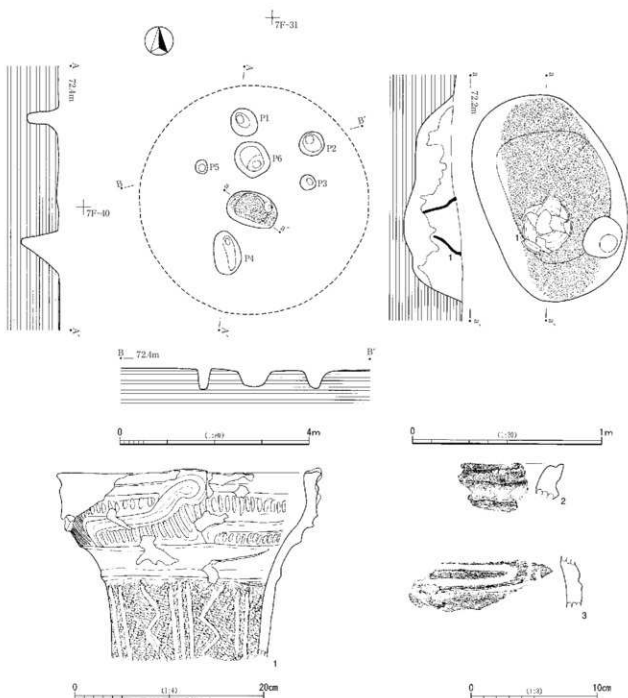
第10図 縄文時代の遺構分布

第3節 縄文時代

1 竪穴住居

SI003 (第11図, 図版4・10・14)

調査区の北東部にあたる7F-41を中心に位置している。奈良・平安時代の掘立柱建物が重複している。壁が全く遺存しないが、これが掘立柱建物の構築にあるとは考えられない。

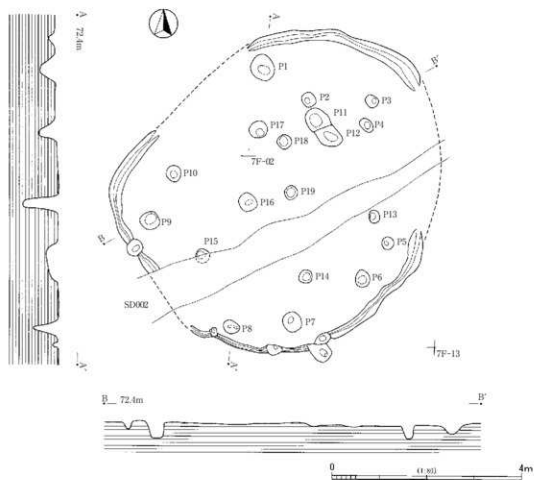


第11図 SI003

炉とその周辺から発見された柱穴と考えられるピットから竪穴住居と判断した。かろうじて踏み固められた床面とみられる痕跡が認められ、その範囲から推定すると、直径4.8m内外の円形の竪穴住居であったと考えることができる。柱穴はP1～P6が該当するであろう。P3の南側にもう1か所柱穴が掘られていたかもしれないが、掘立柱建物の柱穴が掘られているため断定はできない。また、P4についても掘立柱建物の柱穴と重複する。柱穴の深さは、P1：67cm、P2：35cm、P3：69cm、P4：80cm、P5：41cm、P6：53cmである（それぞれ深さは床面の標高72.1mからの深さ）。炉は1の土器を埋設したいわゆる埋甕炉である。炉全体の規模は長径110cm、短径73cmの楕円形で、長軸方向は北西-南東である。深鉢の上半部が南東側に埋設されており、破片の状態で検出された。

遺物は炉体で使用された1の深鉢と小破片が2点で、石器等ほかに伴う遺物は出土していない。1は口縁部に2本1対の隆帯によるクランク状の意匠が施され、その間に縦方向の短沈線文が充填される。頸部に無文帯を設け、隆帯以下の胴部には縄文が施文される。縦方向に2本か3本単位の沈線文が引かれ、その間に蛇行する沈線文が垂下する。火熱によるためか、口縁部付近は脆い状態になる。2は口唇部に凹部を認める口縁部破片である。3は楕円状の沈線文が施されている破片で、浅鉢の口縁部下部と考えられる。

本竪穴住居は、炉体土器に基づくと、加曾利E I 式期と考えられる。



第12図 SI010

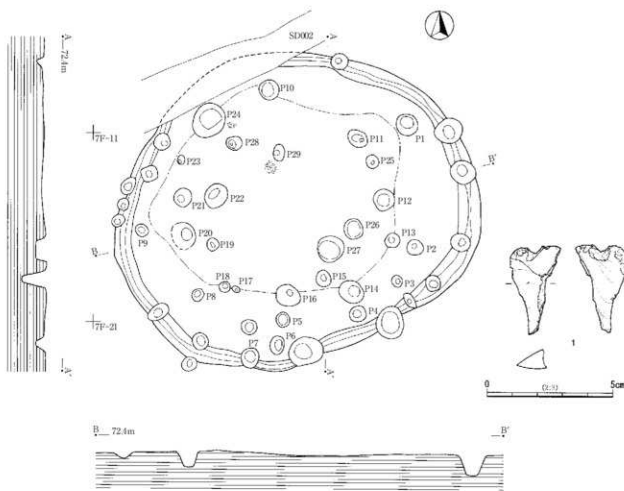
SI010 (第12図、図版6)

調査区の北東部である7F-02付近に位置している。SD002が本跡の南側を斜めに横断するように切り、さらにSI011が南側に重複する。後述するが、本跡とSI011からは時期が決められるような遺物が出土していないので、時期区分による新旧関係は明確にならない。ただ、本跡の上にSI011の床面が形成されていることが確認されているので、それ以前に構築されていたことがわかる。保存状態は全体に不良といえる。平面形態は北東-南西方向に長軸をとる楕円形である。規模は、長軸長6.40m、その直交方向に6.00mである。壁は残存せず、全体に巡っていたであろう壁溝が検出され、それを根拠に上述の規模を計測した。P1～P19のピットを検出した。この中のいくつかが柱穴であった可能性が強いが特定することは難しい。深さが50cm以上になるのは、P2、P5、P7、P10の4か所である。本来の床面の状態については明らかにならない。炉は検出できていない。

遺構の保存状態が良くなかったため、本跡に伴う遺物は出土していない。堅穴住居の形態などから縄文時代の所産と判断した。

SI011 (第13図、図版6・17)

調査区の北東部である7F-11・12付近に位置している。遺構の北側でSI010と重複しSD002に切られてい



第13図 SI011

0 1.00 4.00

る。SI010との新田関係については、SI010で既述したように本跡が新しいとみられる。壁の遺存は認められず、規模を知る手立てとしては壁溝の存在がある。検出した壁溝を基にすると、平面形態は楕円形であり、規模は長軸方向に7.75m、直交する短軸方向に6.40mである。壁溝は全周していたと推測され、SD002に切られている部分のみ遺存していない。壁溝から内側にはP1～P29のピットが検出されている。この中で、P11が床面から66cmの深さを測り、P13:60cm、P16:56cm、P28:63cmと相対的にみると深く掘られている。ほかは40cm～50cmの深さになるピットが多い。中央部を中心にして直径4.80m程度の範囲に硬化面を確認しているが、上述の深いピットは硬化面範囲の内側に穿たれている。柱穴の可能性がある。炉は中央部に焼け面が残り、焼土がP29付近に確認されている。中心部付近に炉を設けていた可能性が高い。また、P24付近にも焼土が認められる。

遺物は黒曜石の剥片が1点出土しているにすぎない。時期を決められる大きな土器片は出土していない。1は黒曜石の剥片で、長さ35.0mm、幅20.0mm、厚さ9.8mm、重量2.65gである。

本堅穴住居は縄文時代に比定される。中期から後期の所産であったと考えられるが、詳細な時期については決定できない。

2 陥穴・小堅穴・土坑

ここでは陥穴と小堅穴それぞれと土坑について図示していく。周辺の調査例でも述べたように、本地域は陥穴の検出例が数多く存在する地域として知られている。しかし、今回の調査で検出した陥穴は1基のみである。小堅穴・土坑については、出土した遺物から8基を縄文時代に比定した。すべて中期の所産といえる。中期の堅穴住居としては、先述したSI003の1軒のみが存在する。中期の遺構は、土坑を加えても極めて疎らな分布である。なお、以下に図示する個々の概要については順不同とした。

SK041b (第14図、図版9)

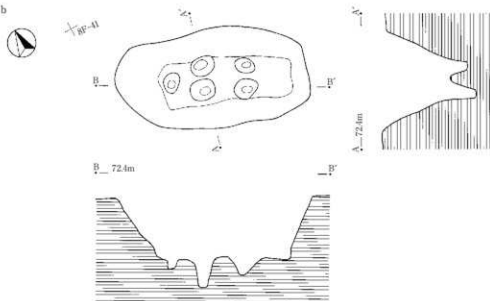
調査区東側の8F-41に位置している。ほかの遺構との重複は認められない。長軸長は2.00m、短軸長は1.00mのやや不整の楕円型陥穴である。検出面から底面までは65cmの深さで、底面に5か所の小ピットが検出されている。小ピットの中で最も深い箇所は底面から34cmを測る。時期決定できる遺物は出土していない。周辺の状況から推量すれば、中期以前の所産で、早期の可能性が高い。しかし、遺跡周辺で検出された陥穴は、溝型が圧倒的に多くを占めているので、時期の比定は慎重にしたい。

SK010 (第14図、図版8・13・14)

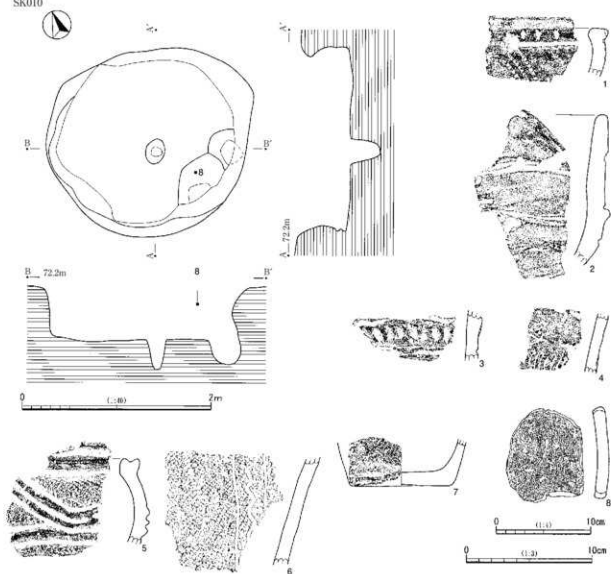
調査区東側の7F-22に位置している。開口部の直径が2.20mのやや不整形となる小堅穴である。検出面から底面までは50cmの深さがあり、一部にオーバーハングが認められる。底面は平坦で、中央部に小ピットが穿たれ、南側の立ち上がり部に接して2か所の小ピットが掘られている。

遺物は土器片と土器片利用の土鍾が出土しており、大部分が覆土一括で取り上げられている。1は口唇部上面が平坦となる口縁部である。口唇部の外側端部に刻みが施され、その直下と口縁部に角押文がみられる。2は波状口縁の一部である。波頂部から下方に隆帯が施され、横方向の隆帯に接続する。ほかに波状の沈線文が認められる。雲母がかなり目立つ。3・4は胴部破片である。3は蛇行する沈線間に幅広い爪形文が施され、4にも細い爪形文が施文されている。5はキャリパー形の深鉢口縁部である。縄文が施

SK041b



SK010



第14图 SK041b · 010

文され、2条の隆帯が文様を描く。6は深鉢の胴部破片である。2本の沈線とその間に蛇行する沈線がみられる。7は深鉢の底部である。下端近くまで縄文が施文されている。8は土器片鏝である。

土器からは時期幅が窺われ、阿玉台式～加曾利E I式が含まれる。新しい時期でみれば、加曾利E I式期に比定されよう。

SK013 (第15図、図版8・13・15・17)

調査区東側の7F-50・60に位置している。開口部の直径が1.95mのやや不整形となる小堅穴である。検出面から底面までは65cmの深さがあり、やや傾斜して底面に至る。底面の直径は1.50mで平坦である。断面形状は箱形となる。覆土は2層に分けられる。1層は黒褐色土（明赤褐色のブロックを含む）、2層は明赤褐色土（黒褐色土が所々に入る）である。

遺物は土器片と石器が出土しており、1以外は覆土一括で取り上げられている。1は深鉢の底部である。地文は認められず、櫛歯状工具による蛇行沈線が底部下端付近まで施されている。器表面に小孔が生じており、火熱を受けた状態がみられる。2・3は胴部の一部である。2の胎土には雲母や石英粒が多く認められ、3は雲母がわずかである。4は縦長の剥片である。

土器の出土数が少なく断定的な時期比定は困難であるが、阿玉台式期の終わり頃に考えておきたい。

SK050 (第15図、図版13・15)

調査区東側の8E-28付近に位置している。開口部の直径が1.55mの円形の小堅穴である。検出面から底面までは50cmの深さがある。底面の直径は1.25mで、西側の壁面にピットが存在する。ピットの深さは底面から30cmである。

遺物は、土器片が覆土から出土している。1は深鉢の口縁部である。平縁の1か所に突起が付けられ、口縁部の上下には隆帯が周回する。口縁上部の隆帯直下にはコンパス文状の沈線が伴い、また、2本1対の隆帯が曲線を描く。隆帯の一部に縄文が施文されている。胴部には断面三角形になる沈線がみられる。2は円筒状になる深鉢の口縁部である。口唇部の外側に貼られた隆帯上に刻みが施されている。3・4は1本の隆帯による波状の意匠が認められる。胎土に特徴的な混和物は認められない。

本小堅穴は加曾利E I式期のやや古い段階に位置づけられよう。

SK019 (第16図)

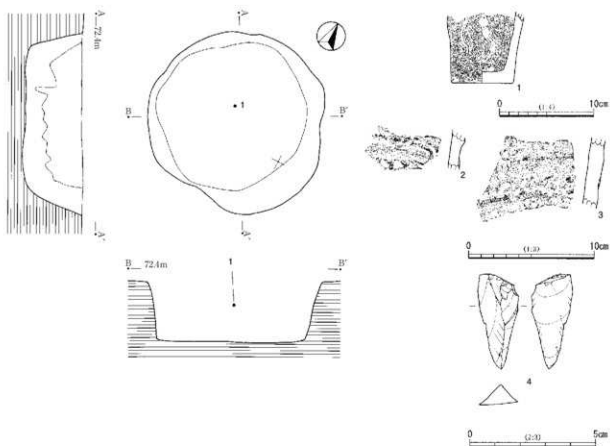
7E-49に位置している。南東側にSK018が接している。開口部の長径が1.40m、短径が1.10mの不整形円形の土坑である。検出面から底面までは48cmの深さがあり、さらに底面中央部に小ピットが存在するので、断面形状は漏斗状となる。

遺物は中期後半と考えられる土器片が出土している。いずれも小破片のため図示するに至らなかった。本遺構は中期後半と考えられるが、詳細な時期は明らかにならない。

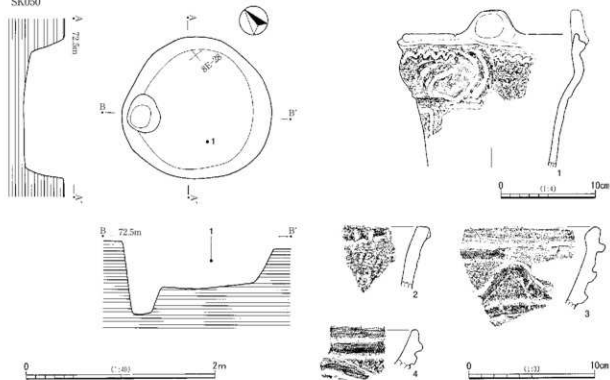
SK022 (第16図、図版8)

7D-78に位置している。開口部の長径が1.40m、短径が0.95mの楕円形の土坑である。検出面から底面までは47cmの深さがあり、底面は平坦となっている。

SK013



SK050



第15图 SK013·050

遺物は中期後半と考えられる土器片が出土している。いずれも小破片のため図示するに至らなかった。本遺構は中期後半と考えられるが、時期の詳細は明らかにならない。

SK045 (第16図、図版9・15)

調査区の北側の7E-67・68に位置している。開口部の直径が1.70mの円形の小竪穴である。北側に張り出すように土坑が接続しているが、この部分は別の掘込みになると考えられる。検出面から底面までは50cmの深さがあり、一部でオーバーハングし、断面形状は張りの少ない袋状を呈する。底面は平坦である。覆土は大きく5層に分けられる。1層は黒褐色土（ローム粒を少量含む）、2層は暗褐色土（ローム粒少量と小ロームブロックを含む）、3層は貝層（チョウセンハマグリ、ダンベイキサゴを主とする）、4層は暗褐色土（小ロームブロックとローム粒を多く含む）、5層は暗褐色土（ローム粒を少量含む）である。さらに貝層の直上及び、1層の下位あるいは2層中から焼土層と灰層を検出している。ただ、土層断面図を作成したB-B'ではそれが投影できなかった。貝層は底面近くで大きく2か所のブロックに分かれた状態で検出されている。土層断面図に投影されている北側のブロックを貝層Bとし、南側のブロックを貝層Aとして、それぞれ全量採取し分析を行っている。なお、この貝層の分析結果は別に図示しているとおりである。

遺物は覆土中から土器が出土している。1は深鉢の口縁部である。口縁部が外反し、口唇部直下に隆帯が伴い、短い隆帯が口唇部に縦方向に付けられ、そこが小さな突起状となる。その下から口縁部は無文となり、胴部境には2本の隆帯が巡るようである。胎土に雲母が多量に含まれている。2の深鉢も1と同様な隆帯が口縁部の上部に付き、胴部は縄文が底部近くまで施文される。さらに口縁部直下から2本を単位とする鋸歯状の沈線が縦方向に施されている。胎土に雲母を認めるが、1と比較するとかなり少量にみえる。以上の2点は覆土1層から出土している。3は口縁部無文の深鉢である。4・5はキャリバー形の深鉢口縁部であろう。隆帯に沈線が伴っている。6は3と同一固体である可能性が高い。7・8は深鉢の胴部破片である。8は3・6の胴部になるかもしれない。9は口唇部が角頭状を呈している。浅鉢の口縁部である。

本小竪穴は加曽利E1式期に位置づけられよう。

SK046 (第17図)

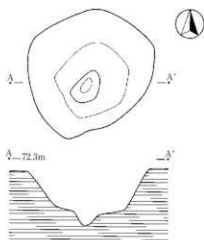
SK045の北東側の7E-67・68に位置している。開口部の直径が1.80mの円形の小竪穴である。検出面から底面までは45cmの深さがある。底面は平坦である。覆土は3層に分けられた。1層：黒褐色土（ローム粒をやや多く含む）。2層：暗褐色土（ローム粒を多く含む）。3層：暗褐色土（小ロームブロックとローム粒を多く含む）。

遺物は中期後半と考えられる土器片が出土している。いずれも小破片のため図示するに至らなかった。本遺構は中期後半と考えられるが、時期の詳細は明らかにならない。

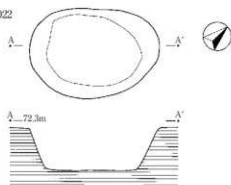
SK049 (第17図、図版15)

8E-08に位置している。開口部は長径1.90m、短径1.50mの不整形円形を呈する小竪穴である。検出面から底面までは55cmの深さがあり、一部でオーバーハングして、その断面形状はB-B'のように張り

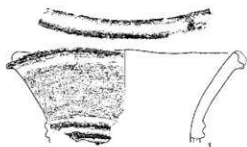
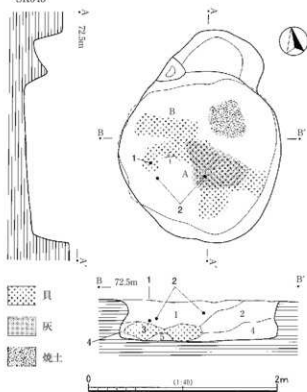
SK019



SK022



SK045

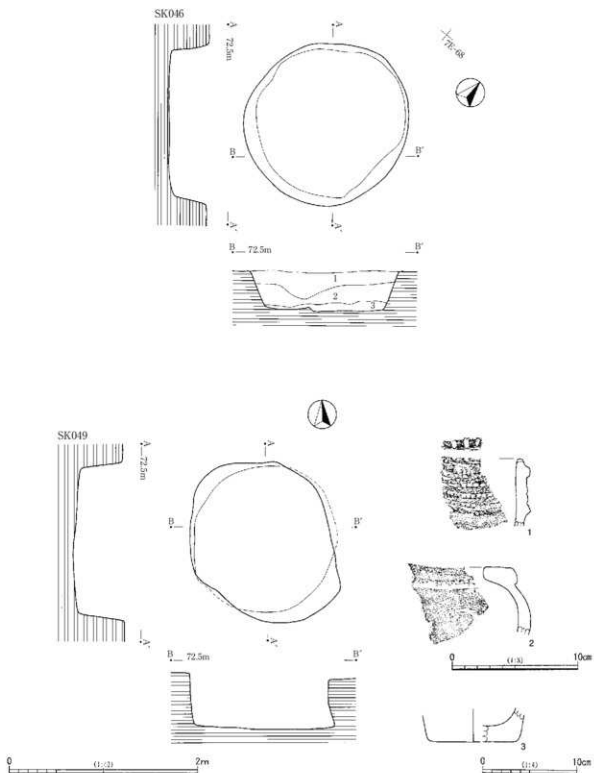


0 2 10cm



0 2 10cm

第16圖 SK019・022・045



第17图 SK046·049

の少ない袋状を呈する。底面は平坦である。

遺物は土器片で、覆土中から出土している。1は波状口縁となる深鉢の口縁部であろう。口唇部には刻みが施され、口縁部は上下にある隆帯の間に5条の有節線文が認められる。2は口縁部が肥厚して内側に折れ、口唇部上面が平坦になる。内外面ともミガキで調整されている浅鉢である。3は深鉢の底部である。胎土に特徴的な混和物は含まれていない。

出土した土器が少量で、時期の決定は難しいが、2・3から考えると加曾利EⅠ式期になるであろう。

3 遺構外出土遺物

土器（第18図、図版16）

縄文土器は、早期、中期、後期の土器がわずかに出土している。1～9は条痕文系土器である。表裏に条痕が施され、胎土に繊維を多く含んでいる。2は口唇部に刻み目が加えられ、補修孔と考えられる焼成後の穿孔痕が認められる。7・9には格子状の細い沈線がみられる。

10～13・15～18は阿玉台式と考えられる。角押文などの押引文が施されている。13の口唇部は角頭状を呈している。16・17は窓枠状の隆線が施され、16は隆線に角押文が付随し、17には加えられていない。

23の口縁部は真っ直ぐ上方に開き、隆帯による区画が施される。隆帯に沿ってペン先状の工具による押引文が浅く認められる。胎土に雲母や石英粒を多く含んでいる。

14・19～22・24～26は加曾利E式である。14は把手の一部になると考えられる。19・20はおそらく同一個体になるであろう。口縁部とみられ、2本の隆帯が曲線を描いている。21は深鉢の胴部になる。全体に縄文が施文され、沈線などは認められない。この3点は加曾利EⅠ式である。22は隆帯による渦巻文が施されている。24は沈線による区画が行われ、25は縄文施文部が沈線で区画され、他にはミガキが施されている。26は口唇部に凹形の浅い押捺が連続する。

27～36は加曾利B式である。27は全体に縄文が施文された浅鉢の口縁部である。28の口縁部からは瓢形の器形が窺われる。30～36にはヘラ先で施したような細い沈線が斜方向にみられる。いずれも内面は丁寧なミガキが行われている。

石器（第19図、図版17）

縄文時代に属すると考えられる石器は、図示した17点が全部である。ほかに礫が存在するが、これについては時期比定が困難である。

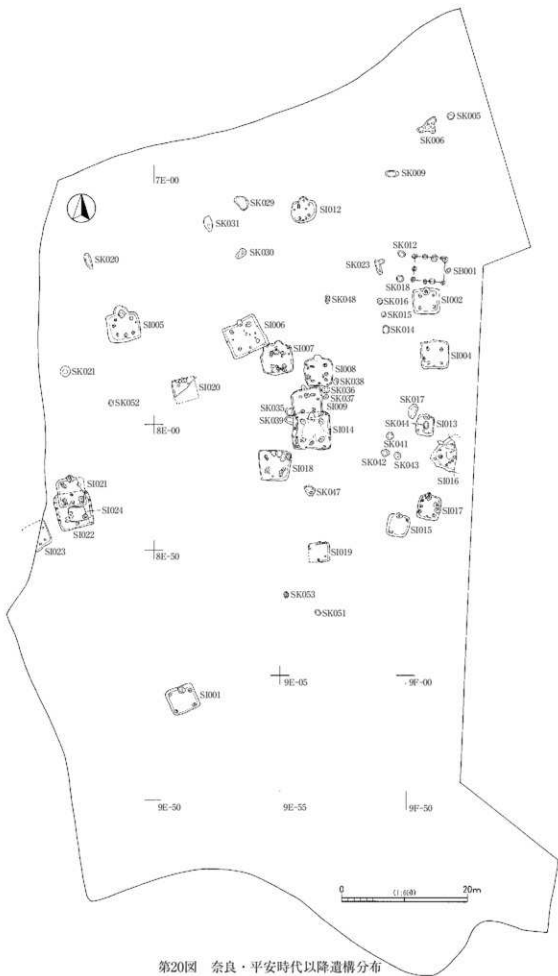
1は有舌尖頭器である。頁岩製で先端部を欠損する。現状で長さは42.6mmである。草創期に帰属する可能性が高い。2は黒曜石製の石鎌である。薄い剥片に調整を施し、石鎌にしている。3は両極剥片で、石材はチャートである。4・5は二次加工が認められる剥片である。5の表面には磨きの痕跡が認められるため、本来は磨製石斧であった可能性も考えられる。6～9は剥片である。7の石材がチャートで、残り3点は黒曜石である。いずれも小型の剥片である。10～13は石核である。12は水晶で、端部に敲痕が認められる。14は磨製石斧の欠損品である。刃部を欠損し、現状では長さ90.5mmを残している。15・16は礫石器の部類である。15の両面には凹部が認められ、さらに磨痕も一部に観察できる。石材は凝灰岩である。16は安山岩製の磨石の一部である。17は石棒の頭部の一部になる。頭部の下位には3条の沈線が巡る。



第18図 遺構外出土土器



第19図 遺構外出土石器



第20図 奈良・平安時代以降遺構分布

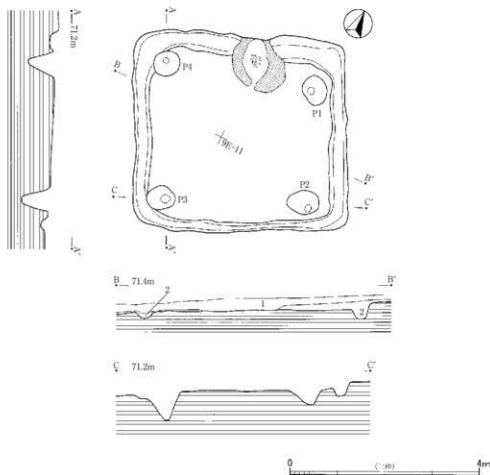
第4節 奈良・平安時代以降

1 竪穴住居

SI001 (第21図、図版4)

調査区の南側である9E-11を中心に位置している。重複関係は認められず、付近に竪穴住居や掘立柱建物は遺存していない。遺構分布が希薄となる地域である。カマドを北壁の中央部に設け、主軸方向は北からやや西に傾く。規模は主軸方向に4.30m、その直交方向に4.45mで、ほぼ正方形に近い平面形態を呈する。検出面から床面までは浅く、東側で22cmの壁高を残す程度である。覆土は2層に分層した。覆土は東側から西側に向かって流れ込んだ様相を呈し、覆土の堆積時期には壁のほとんどが削られた状況であったと推測される。壁下には壁溝が巡る。四隅に近接してピットが検出されており、柱穴である可能性をもつ。深さは、P1:24cm、P2:41cm、P3:75cm、P4:59cmである。一定した深さでなく柱穴と断定しがたい様相もある。床面は目立った凹凸は認められないが、踏み固められた硬化面は明瞭に捉えられない。カマドは北側壁の中央からやや東に寄って構築されている。袖部の基部と火床部を検出した。

遺物は土師器の破片が出土しているにすぎない。明確な時期決定は困難であるが、時間幅を拡大すれば8世紀～9世紀の間に比定されよう。

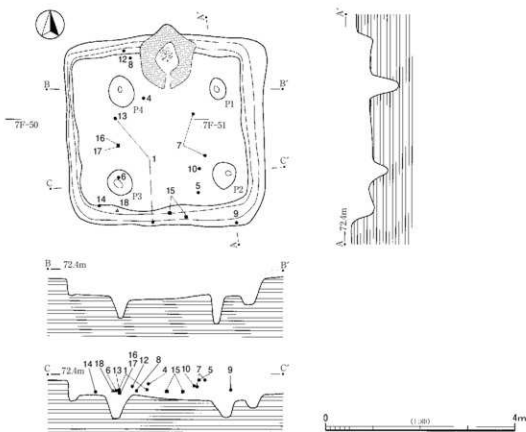


第21図 SI001

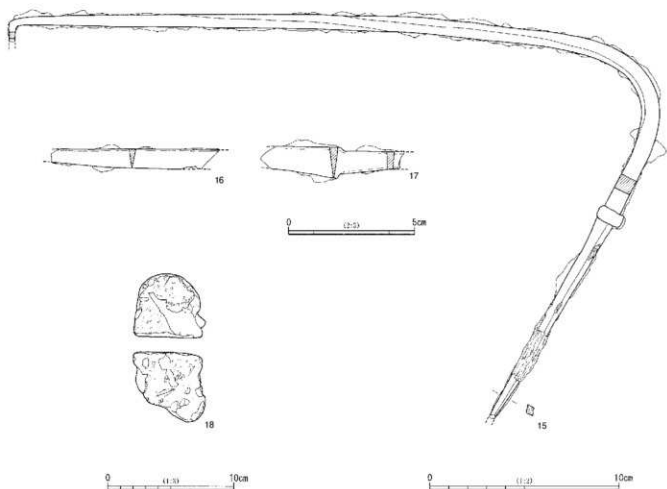
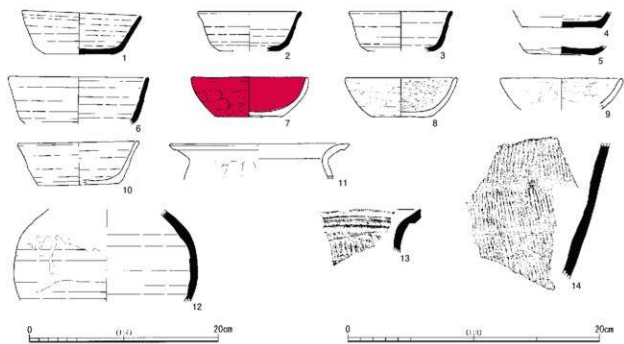
SI002 (第22・23図、図版4・10・18・19)

調査区中央部東側である7F-50付近に位置している。重複関係は認められず、南側にSI004が検出されている。カマドを北壁の中央部に設けた方形の堅穴住居で、主軸方向をほぼ南北に向ける。主軸方向に4.10m、その直交方向に4.20mの規模で、ほぼ正方形に近い平面形態を呈する。検出面から床面まで40cm前後の壁高を残す。覆土は黒褐色土が主体になり、分層は明瞭ではない。壁下には壁溝が全体に巡る。対角線上に穿たれた4か所のピットが柱穴になる。深さは、P1:64cm、P2:44cm、P3:44cm、P4:52cmである。一定した深さではないものの、いずれも40cm以上の深さに掘られている。床面は平坦さが認められない。本来は平坦に構築されていた可能性が高いが、踏み固めが不十分であったため、精査時に床面を部分的に剥がし、その結果、凹部が生じてしまったとも考えられる。カマドは北壁の中央に構築されている。袖部の基部と火床部の存在を検出した。煙道部は、詳細が捉えられなかった。

遺物は、須恵器、土師器の土器類とクルル鉤等の金属製品が出土している。第23図1～6は須恵器の杯である。1は完形で出土している。体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリが施されている。2・3は1と比較すると口径が小さく、底径との差も小さくなる。体部下端は2点とも回転ヘラケズリが施されている。4・5は底部の破片で保存状態は不良である。6は体部のみであるが、高台が付いていた可能性がある。7～10は土師器の杯で、いわゆる非ロクロの杯になる。平底から体部は内彎して立ち上がり、内面はヘラミガキが施される。体部外面から底部にかけてはヘラケズリによって調整されている。10はロクロ



第22図 SI002 (1)



第23圖 SI002 (2)

土師器である。出土レベルが床面から浮いた位置である。11は小型の部類になる甕の口縁部破片である。12は須恵器壺の肩部付近、13・14は須恵器の甗破片であろう。

15の鉄製品はクルル鉤と呼ばれるものである。鉤爪部から柄の部分まではほぼ残存している。直線的に伸びる解錠部の長さは約34.5cmで、製作時に「ねじり」が加えられている。柄と軸部との間に闕が作られ、柄には木質が一部残存する。特別な建物の鉤であったと推測され、堅穴住居の居住者が管理していたとも想像される。16・17は刀子である。接合部は存在しないが、同一個体の可能性が高い。18は軽石の砥石である。

本堅穴住居は、非ロクロの土師器の特徴から判断すると、8世紀後葉に位置づけられよう。

SI004 (第24図、図版5・10・18・19)

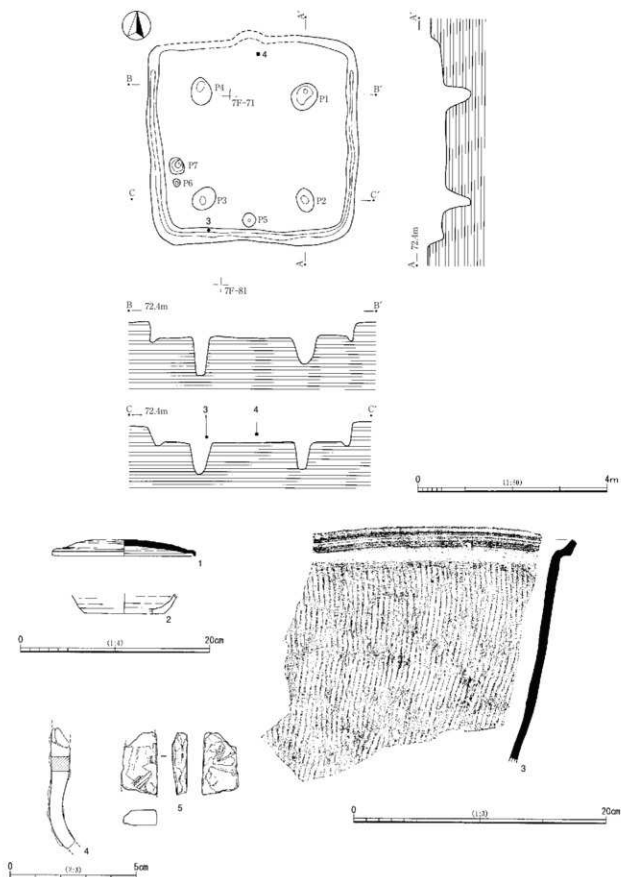
調査区中央部東側である7F-71付近に位置している。SD006と重複し、北側に新しい擾乱が入り、遺構を破壊している。カマドは北壁側に設けられていたと推測されるが、擾乱によって不明である。推測した位置にカマドが設置されていたならば、主軸方向はほぼ南北に向けられている。規模は主軸方向に4.50m、その直交方向に4.50mで、正方形に近い平面形態を呈する。検出面から床面までは32cm～40cm前後の壁高を残す。壁下には壁溝が伴うが、擾乱を受けている北壁については不明である。柱穴は対角線上に穿たれた4か所のピットが該当する。深さはP1:55cm、P2:58cm、P3:68cm、P4:72cmである。東側2か所の柱穴の深さに比して、西側の2か所の柱穴が深く掘られている。P5は入口に伴う梯子穴と考えられ、深さは13cmである。P6とP7の性格は推測できない。床面は比較的平坦な状況であるが、硬化面については明瞭に捉えることができない。

遺物は須恵器、土師器の土器類と鉄製品、石製品が出土している。遺構の保存状態が一部を除いて保たれていた割には、遺物の全体量は少なく、破片が散発的に出土しているにすぎない。1は須恵器の蓋である。ツマミを欠失している。2は土師器の杯底部の破片である。3は須恵器甗の胴部上半部の破片である。4の鉄製品は断面形状が四角形を呈している。器種は不明である。5は凝灰岩製の砥石である。

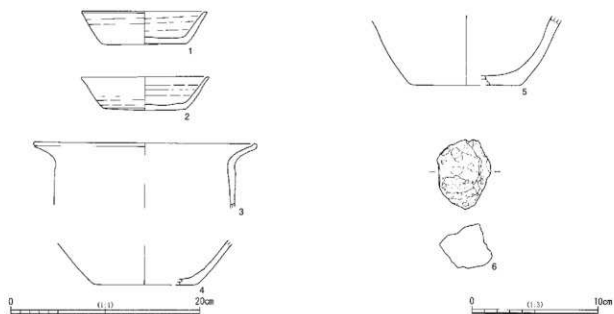
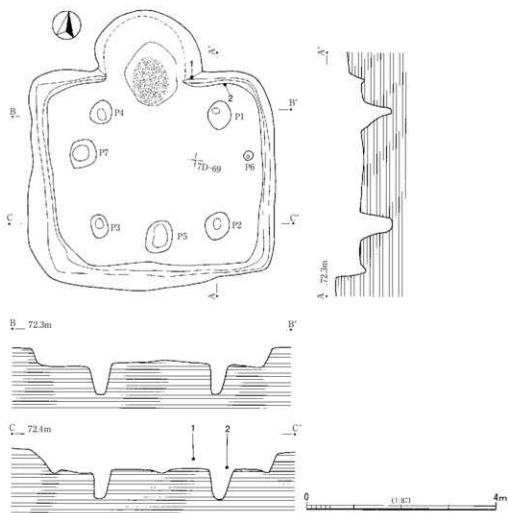
出土土器類が少量であるため、時期決定が難しいが、やや時間幅をとって8世紀後葉に位置づけておきたい。

SI005 (第25図、図版5・10・18)

調査区中央部西側である7D-68・69付近に位置している。ほかの遺構とは重複していない。カマドは北壁側に設けられ、主軸方向は北からわずかに西に傾く。規模は主軸方向に4.60m、その直交方向に5.30mで、隅に丸みがある方形の平面形態を呈する。検出面から床面までは35cm～55cm前後の壁高を残し、壁下には壁溝が伴う。壁の保存状態は比較的良好といえる。柱穴は対角線上の4か所に検出されている。深さはP1:69cm、P2:68cm、P3:62cm、P4:69cmで、大きな差がない。P5は入口に伴う梯子穴と考えられ、深さは21cmである。P6とP7は対になるような位置に検出されている。4か所の柱穴を補う柱材が存在していた可能性がある。深さはP6:8cm、P7:20cmである。床面は平坦さに欠ける状況がみられ、硬化面については明瞭に捉えることができない。カマドは北壁の中央に構築され、煙道部を外側に向けて張り出させている。袖部や天井部については保存状態が不良で、残存する構築材からは詳細が明らかにできない。



第24图 SI004



第25図 SI005

遺物は、遺構の保存状態の良さから考えると少量にとどまる。1・2は土師器の杯である。3は土師器甕の口縁部である。口唇部の端部が上方に折られ丸く収められている。4・5は甕の底部になる。6は軽石で砥石として使用されていたと考えられる。

本堅穴住居は、8世紀後葉に位置づけられよう。

SI006（第26図、図版5・10・19）

調査区中央部からやや北側になる7E-63付近に位置している。SI007が南東側で重複している。カマドは北壁側に設けられており、主軸方向はわずかに西に傾く。規模は主軸方向に5.55m、その直交方向に5.85mで、四隅が直角で正方形に近い平面形態を呈する。後世の攪乱はわずかであるが、検出面から床面までは5cm～30cm前後の壁高を残すのみで、特に北側では浅くなっている。壁下には壁溝が全体に巡る。柱穴は対角線上に穿たれた4か所のビットが該当する。深さはP1：77cm、P2：68cm、P3：69cm、P4：66cmで、いずれも深く大きな差がない。P5は入口に伴う梯子穴と考えられ、深さは42cmである。柱穴と別に壁溝中に3か所小ビットが検出されている。P1に近い壁溝中には深さ26cmのビットが存在し、その対向方向の壁溝中にも深さ14cmのビットが発見されている。また、P5に近い場所にも小ビットが認められる。いずれも性格は推測できない。さらに柱穴に開かれた内側からも深さ15cm前後の小ビットが7か所に発見されている。床面は比較的平坦な状況であるが、硬化面については明瞭に捉えることができない。カマドは北壁の中央に構築され、袖部が残存する。天井部は残っており、煙道の構造は不明である。火床部は煙道側に認められる。

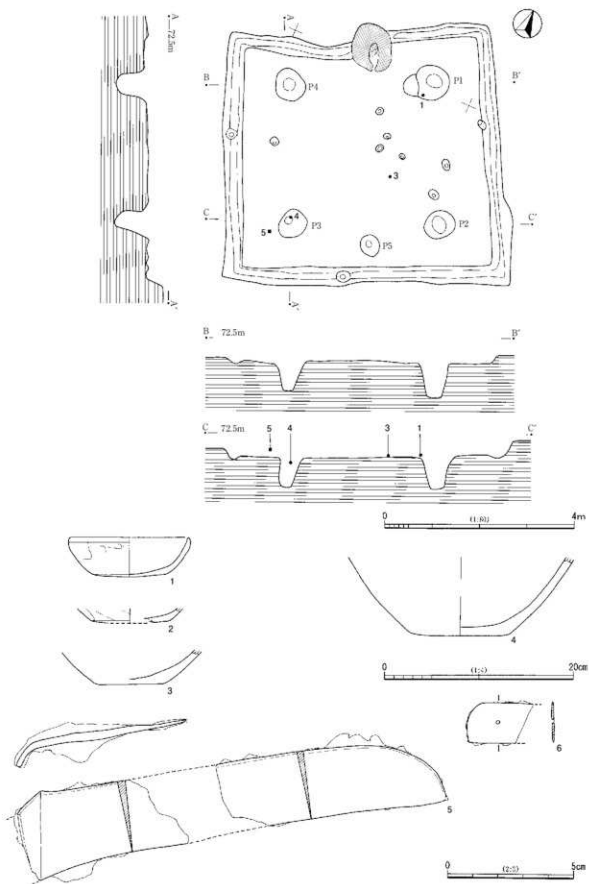
遺物は、土師器や金属製品が出土している。遺物は少なく、保存状態も不良である。1は土師器の杯である。底部はわずかに丸みが残り、体部は内彎気味に立ち上がる。体部はヘラケズリで調整されている。2は杯の底部である。3・4は土師器の甕の底部である。5は鎌である。接合部位は認められないが、同一個体と判断した。6は穂摘鎌の一部である可能性が高い。

本堅穴住居の出土遺物はわずかであるが、8世紀末葉前後に位置づけられよう。

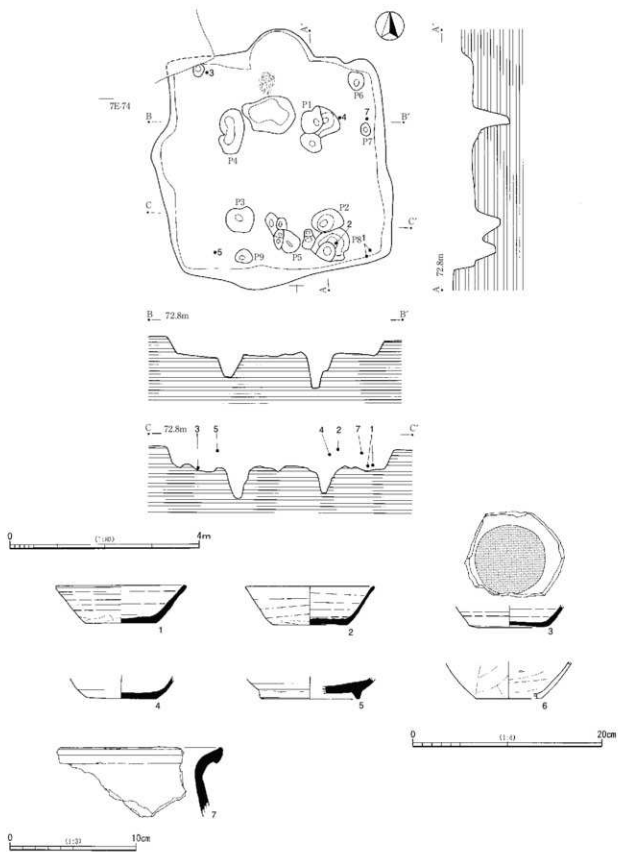
SI007（第27図、図版5・10）

調査区中央部の7E-74・75に位置している。北西隅はSI006と重複する。カマドは北壁に設けられ、主軸方向はほぼ南北に向けられている。規模は主軸方向に5.00m、その直交方向に5.00mである。平面形態は正方形に近いと考えられるが、調査の進捗時には四方向の壁が直線的ではなく、歪んだ壁として検出されている。検出面から床面までは28cm～40cm前後の壁高を残す。壁下に壁溝は検出されていない。ただ、床面が軟弱だったことが起因して本来の床面を剥いでしまったという状況も考えられ、結果として壁溝の存在が不明瞭になったともみられる。西壁側に壁溝らしい痕跡が検出されているので、壁溝の存在を完全に否定することもできない。柱穴は対角線上に穿たれた4か所のビットが該当する。深さはP1：81cm、P2：56cm、P3：71cm、P4：54cmである。P5は入口に伴う梯子穴で深さは22cmである。ほかにP6～P10のビットが検出されたが、それぞれの性格は明らかではない。床面は先述したとおり軟弱な状態を呈し、明瞭な硬化面の形成は認められない。カマドは北壁の中央に構築されていた。袖部や天井部の保存状態は不良で、火床部が検出されたととどまる。

遺物は須恵器、土師器の土器類が出土している。1・2の須恵器杯は体部下端から底部にかけてヘラケ



第26图 SI006



第27图 SI007

ズリが施されている。断面の色調は褐色を呈する。3の須恵器杯底部内面は全体に磨られた状態が認められ、硯に転用されていた可能性が高い。4は須恵器杯底部である。5の内面も比較的滑らかな状態を呈しているため、転用硯として用いられていたかもしれない。6は土師器の甕の底部である。ここに図示した遺物の保存状態はいずれも不良である。

本竪穴住居は9世紀初頭に位置づけられよう

SI008 (第28・29図、図版6・10・11・18・19)

調査区中央部である7F-76・86付近に位置している。本遺構よりも古く位置づけられるSI009が南側に近接するが、重複関係にはなっていない。カマドを北壁に設け、主軸方向はほぼ南北に向けられている。規模は主軸方向に4.30m、その直交方向に4.50mで、隅丸方形の平面形態を呈する。検出面から床面までは35cm～45cm前後の壁高を残す。壁下には壁溝が巡っていた可能性も窺われるが、床面から2cm～3cm程の深さの差が壁下にみられる程度であり断定は難しい。柱穴は対角線上の4か所に存在する。深さはP1:60cm、P2:53cm、P3:64cm、P4:75cmである。P5は入口に伴う梯子穴と考えられ、深さは16cmである。ほかにP6～P10のビットが存在する。深さはP6:15cm、P7:6cm、P8:28cm、P9:12cm、P10:23cmである。いずれも柱穴の深さと比較して浅く、位置にも対応関係が認められないので、それぞれの性格を推測することは困難である。床面は比較的平坦な状況であるが、硬化面の形成範囲については明瞭に捉えることができない。カマドは北壁の中央に構築され、煙道部を外に張り出して設けている。袖部や天井部については、構築材の保存状態が不良で残存していない。火床部についても遺存状態は明瞭ではない。

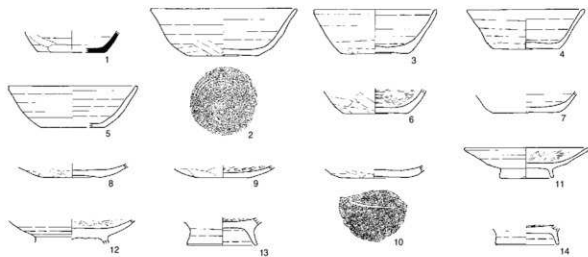
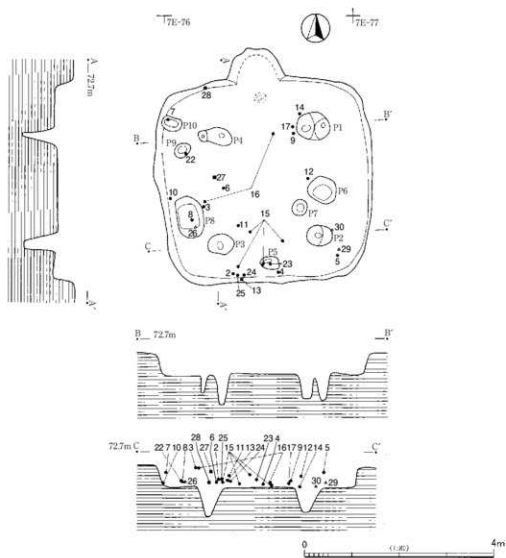
遺物は須恵器、土師器の土器類と金属製品が出土している。土器類の保存状態は全体に悪く、完形品は出土していない。1～7は杯である。須恵器は1のみでほかは土師器になる。2は復元口径15.4cmで、本跡では最も大きな口径の杯となる。底部はヘラケズリが施されているが、回転糸切り痕が残っており、ヘラケズリは周辺から底部下端に行われている。3の底部調整も同様である。4の底面は1方向のヘラケズリで調整されている。8・9は平底の皿である。底部のみで、底面に明瞭なヘラケズリの跡が残されており、ある程度乾燥が進んだ段階で調整が行われたものと考えられる。10は杯の底部となる可能性も強い。底面に×状のヘラ記号が付けられている。11～14は高台付き皿である。

第29図15は須恵器甕の胴部である。16・17は土師器の甕である。18～21には墨書が認められるが、文字の判読はできない。22は須恵器杯の底部を円板状に調整している。23～25は須恵器片である。26は石製紡錘車である。上面の中央部に浅い凹みが認められ、その中央部に孔を穿っている。仕上げの調整が不足したためか、外形は全体にやや歪んでおり、正円を呈していない。27・28は刀子で、いずれも先端部を欠損している。29は片麻岩製の砥石である。30はホルンフェルスを石材に用いた石器である。縄文時代の打製石斧の可能性もあるが、用途不明石器として本跡出土として図示した。

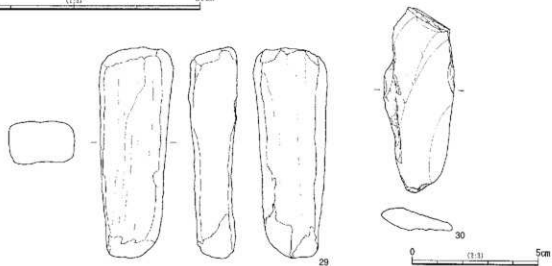
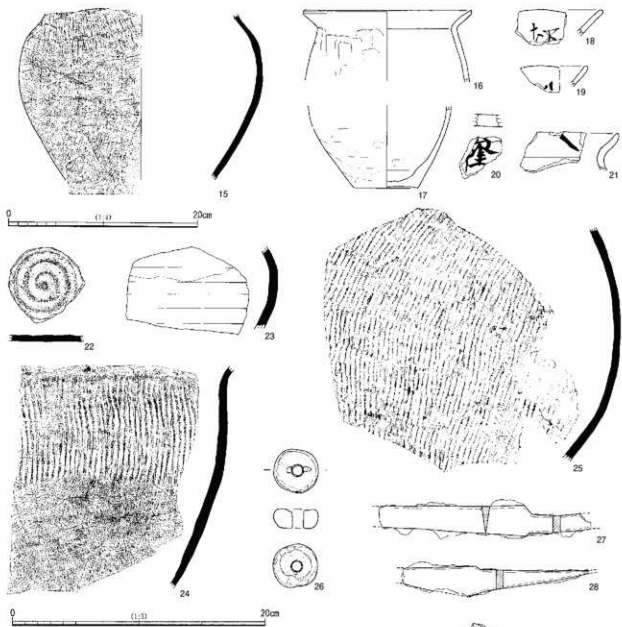
本竪穴住居は9世紀後葉に位置づけられよう。

SI009 (第30図、図版6・11・19)

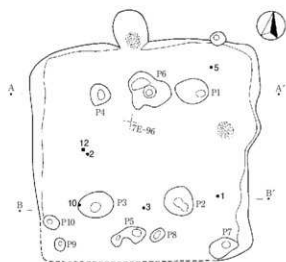
調査区中央部7E-96付近を主にして位置している。SI008が北側に近接し、南側でSI014と重複する。その重複する部分も含め、遺構の保存状態は全体に不良である。カマドは当初東側に設けられ、その後北壁



第28图 SI008 (1)



第29圖 SI008 (2)



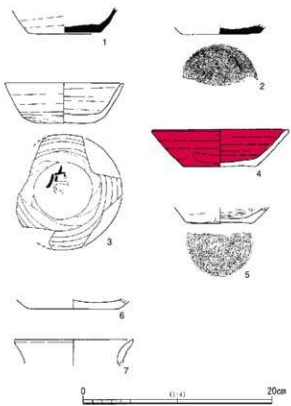
A 73.0m A'



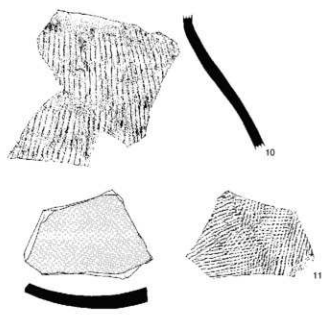
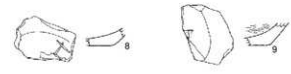
B 73.0m B'



0 4m



0 20cm



0 20cm



0 5cm

第30图 SI009

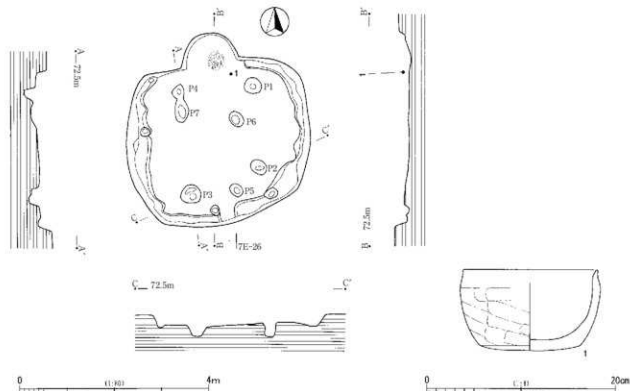
中央部に移されている。その主軸方向は北からやや西側に傾いている。規模は主軸方向に4.65m、その直交方向に4.80mで、隅に丸みをもつ正方形に近い平面形態を呈する。検出面から床面までは良好な部分で40cm程度の壁高を残す。壁下に壁溝が存在していた可能性があるが、床面が軟弱であったことから明瞭に存在を捉えることができない。柱穴はP1～P4のビットが該当する。深さはP1：69cm、P2：57cm、P3：58cm、P4：46cmである。P5は入口に伴う梯子穴と考えられ、深さは39cmと比較的深い。ほかのP6～P10の性格は推測できない。床面は硬化面の把握が難しく、掘形まで掘りを行った部分も生じたとみられる。カマドの移設から、ある程度の期間にわたって使用されていた状況ではあるが、床面は軟弱で、出土した遺物量も少なく、廃棄に際し意図的に竪穴住居の破壊が行われた可能性も考えられる。

遺物は須恵器、土師器の土器類と金属製品が出土している。土器の保存状態はいずれも良い状態ではない。1・2は須恵器杯の底部である。2の底面にはヘラによって「×」が記されている。3の底部中央には墨書が認められる。广（まだれ）がみられるが、判読は難しい状態である。「廣」の可能性も考えられる。4は体部の破片で、内外面に赤彩が施されている。5の底部にはヘラによって「M」状の線刻が2か所に刻まれている。6は杯の底部。7は土師器甕の口縁部である。8・9に線刻が認められる。10は須恵器甕の胴部である。11は須恵器甕の破片で、内面が滑らかになっていることから、甕に転用して使用したものと考えられる。12は刀子である。13は釘とみられる。

本竪穴住居は出土遺物が少なく保存状態も不良で判断が難しいが、9世紀中葉に位置づけておきたい。

SI012（第31図、図版6・11）

調査区中央部北側である7E-15・16付近に位置している。竪穴住居を含むほかの遺構とは重複関係が認められない。カマドを北壁に設け、主軸方向はほぼ南北に向けられている。規模は主軸方向に3.40m、そ



第31図 SI012

の直交方向に3.90mで、隅丸方形の平面形態を呈する。四隅とも丸みを帯び全体に歪な形態を呈する。検出面から床面までは12cm～30cmの壁高を残す。壁下には南側の一部を除き壁溝が存在する。床面に掘られたピットはP1からP7の7か所である。P1の深さは13cmと浅く、以下P2:24cm、P3:22cm、P4:32cmとなる。いずれも浅く、深さも不定であり、柱穴との判断は難しい。P5については入口の梯子穴に比定して問題ないと考えられる。床面は軟弱な状況で、硬化面は存在していない。カマドは北壁の中央に構築され、煙道部を外に張り出して設けている。袖部や天井部については、構築材の保存状態が不良で詳細は明らかにならない。火床部は赤色に硬化した焼土が残されていて使用されていたことが推測される。ただ、床面の硬化面が発達していなかった状況から、その期間は比較的短期間であったと考えられる。

遺物は少なく図示可能であったのは土師器の鉢1点である。1の鉢はやや丸みを帯びる底部から体部がわずかに内彎しながら立ち上がり、口縁部は上方に立って口唇部がやや尖り気味になる。体部は全体にヘラケズリによって調整されている。遺構に伴わない可能性が高い。

本堅穴住居は、住居形態から推定すると9世紀後葉に位置づけられよう。

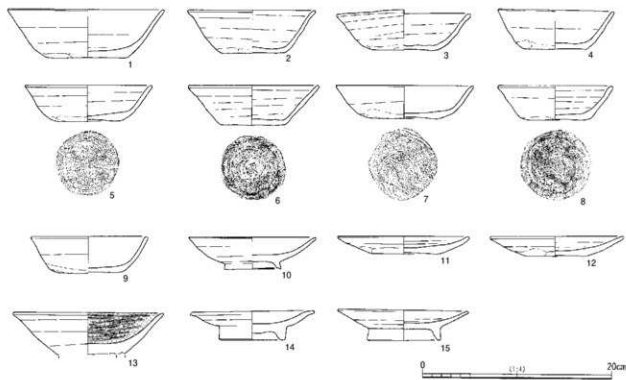
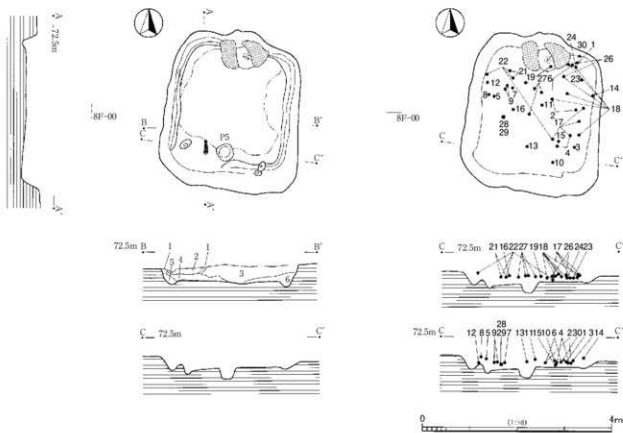
SI013 (第32～34図、図版6・7・11・12・18・19)

調査区中央部東側である8F-01付近に位置している。ほかの遺構との重複関係は認められない。カマドを北壁に設け、主軸方向は北からわずかに東側に傾けられている。規模は主軸方向に3.30m、その直交方向に2.80mで、隅丸長方形の平面形態を呈する。検出面から床面までは10cm～20cm前後の壁高を残す。壁下には全体に壁溝が巡っていたとみられるが、南西隅については不明瞭である。壁は外傾して立ち上がる。覆土は6層に分層したが、断面図の1層・2層は部分的な攪乱とも考えられる。以下、3層は暗赤褐色土(赤褐色粒子を含む)、4層は暗赤褐色土(炭化物を含む)、5層は赤褐色土(明るい赤褐色土を含む)、6層は黒褐色土(ローム粒を含む)である。柱穴は確認されていない。カマドの対向方向に検出されたP5は入口に伴う梯子穴と考えられる。床面は南西隅を除き比較的平坦な状況がみられ、硬化面の形成がカマドの前面から入口方向にかけて面的に捉えることができた。カマドは北壁の中央に構築され、煙道部を壁からわずかに外に張り出して設けている。袖部については残存するが、天井部は残っていない。袖部の内側に火床部が認められる。

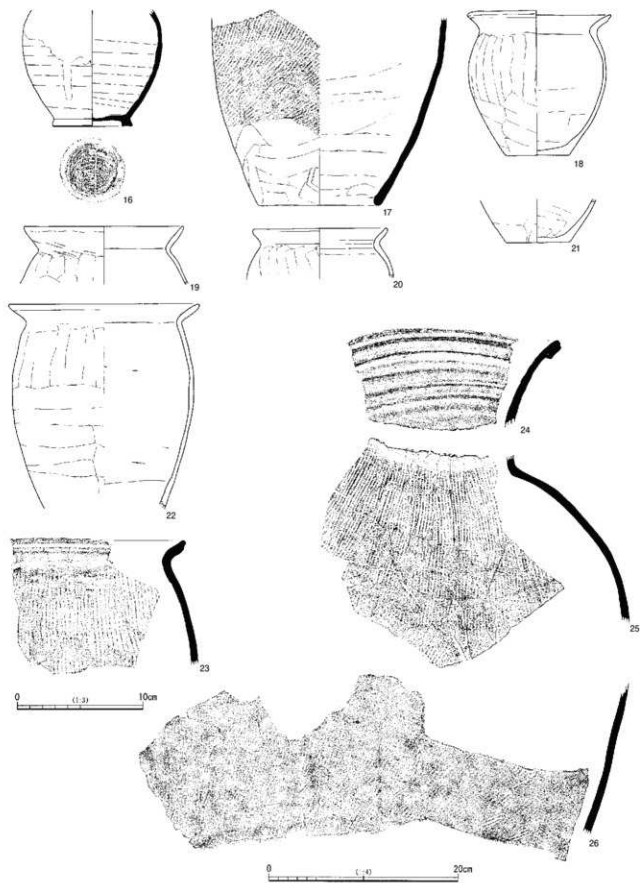
遺物は須恵器、土師器の土器類と金属製品、石製品が出土している。今回の調査の中では遺物量が最も多い。遺物の分布状況は南西隅を除き全体にみられ、出土レベルは床面か床面からやや浮いた位置が主体になる。土師器の保存状態は全体に良いといえる。

第32図1～9は土師器の杯である。1は復元口径が16cm以上になる大振りの杯である。底部から大部下端にかけて手持ちヘラケズリが施されている。2・3は全体に歪んでいる。いずれも体部下端は手持ちヘラケズリが行われている。4の底部は一方の手持ちヘラケズリが行われている。5は回転糸切りの後、中央部のみへヘラケズリを加えている。6は口径と底径の比が大きい。体部下端は調整が行われていない。7は図に示していないが、口唇部の2か所に逆三角形の破損部が存在する。この割れ面は古い状態を呈している。何らかの目的があって意図的に割った可能性が高い。8は底部周辺から体部下端に手持ちヘラケズリが施されている。9は底部全体と体部下端がヘラケズリ調整されている。

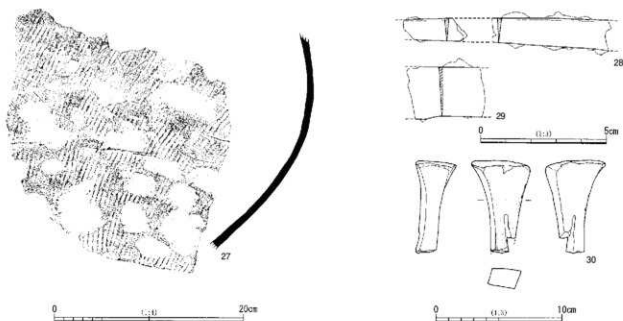
10は高台付きの皿である。口縁部の2か所に古い割れ口が認められる。11・12の皿は平底で、ヘラケズリが施されている。13は高台付き杯になるであろう。高台部分全体が割られたように欠失している。内面



第32圖 SI013 (1)



第33图 SI013 (2)



第34図 SI013 (3)

は全体にミガキが施され、黒色処理が行われている。14・15は高台付き皿で、高台部の高さが1cm以上となる。

第33図16の須恵器壺の底部にはヘラによる「+」の線刻が認められる。17は須恵器甗である。底部の孔は5孔であったと推定される。18～22は土師器の甕になる。胴部と口縁部との境界はくの字状に外傾している。胴部はヘラケズリが施され、器厚が薄く調整されている。第33図23～第34図27は須恵器の破片を図示した。23はおそらく甗の口縁部であろう。24・25・26は同一固体である可能性が高い。完全な形であったならば、かなり大型の製品と推測される。27は須恵器甗の胴部である。

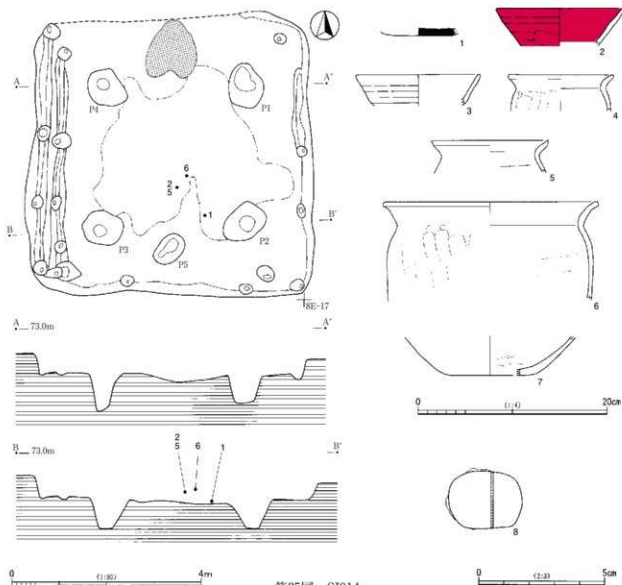
28は刀子の刃部である。29は保存状態が不良であるため器種の断定は難しいが、曲刃鎌の一部である可能性が高い。30は凝灰岩製の砥石の欠損品である。

本堅穴住居は9世紀後葉に位置づけられよう。

SI014 (第35図、図版7・19)

調査区中央部である8E・05・06付近に位置している。北側でSI009と重複し、本住居に切られている。カマドを北壁に掛け、主軸方向はほぼ北を向いている。規模は主軸方向に6.10m、その直交方向に6.10mで、ほぼ正方形に近い平面形態を呈する。検出面から床面までは27cm～44cmの壁高を残すが、SI009と重複する北壁の一部は検出することができなかった。壁溝は東壁下の一部と西壁下に存在する。西壁側については2条の溝が検出されており、拡張が行われたか、壁の補修が行われたかのような状況がみられる。柱穴は、対角線上に掘られた4か所のピットが該当する。深さはP1:43cm、P2:45cm、P3:46cm、P4:58cmである。比較的同じような深さに掘られている。カマドの対向方向である南壁側に検出されたP5は入口に伴う梯子穴と考えられる。床面は4か所の柱穴を結ぶ内側に硬化面の形成が認められる。ただ、平坦な状況ではなく、柱穴を結ぶ線から壁寄りについては凹凸が激しい。カマドは北壁の中央に構築された痕跡をとどめるが、煙道部の状況や袖部については保存状態が不良であるため、詳細は明らかにならない。

遺物は須恵器、土師器の土器類と金属製品が出土している。いずれの保存状態も不良で、完全な形を保つ



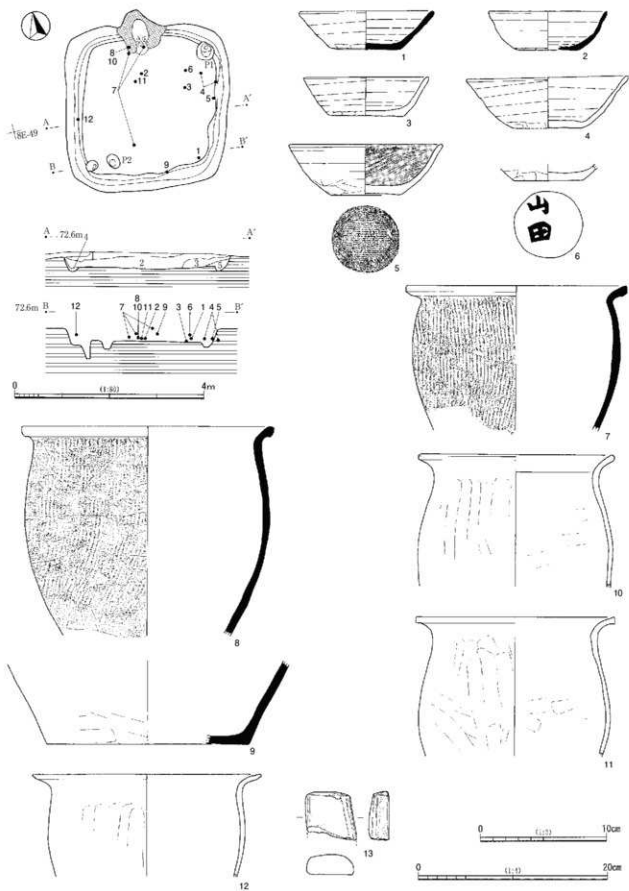
第35図 SI014

で出土した土器類は皆無である。1は須恵器杯の底部である。内面の一部に磨られた状態が観察され、硯として利用されて可能性がある。2・3は土師器の杯になる。2の内外面は赤彩が施されている。4～7は土師器の甕である。6は胴部上半に最大径をもち、底部に向かってすぼまっていく形態になると推定される。8は鉄製品になるが、器種は不明である。残存部には刃部になるような部分は見られない。

本堅穴住居は2の杯等を根拠にすれば、9世紀前葉に位置づけられよう。

SI015 (第36図、図版7・12・18)

調査区の南東側である8E-39・49付近に位置している。溝状遺構であるSD013bと重複しているが、新旧関係についてはSD013bが本遺構を切っている。カマドを北壁に設け、主軸方向は北からわずかに東側に傾けられている。規模は主軸方向に3.50m、その直交方向に3.50mで、隅丸方形の平面形態を呈するが、全体に歪んだ形状となっている。検出面から床面までは24cm～30cmの壁高を残す。壁下には全体に壁溝が巡っている。壁はわずかに外傾して立ち上がる。覆土は次のように5層に分けることができた。1層は黒褐色土（焼土ブロックを少量含む）、2層は暗褐色土（ローム粒を含む）、3層は赤褐色土（明るい赤褐色



第36图 SI015

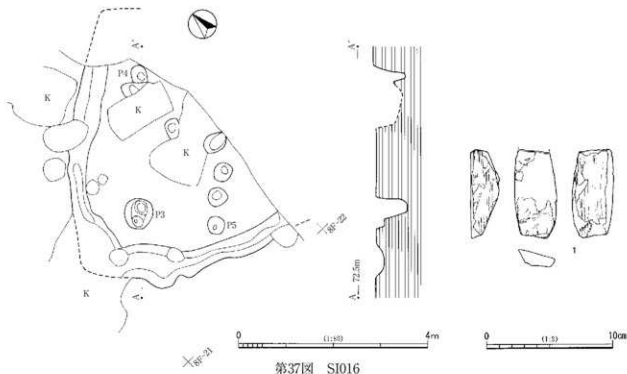
土を含む)、4層は暗黄褐色土(ソフトローム粒を含む)、5層は暗褐色土(山砂を含む)である。柱穴は存在しない。北東隅に検出されたP1は深さ47cmと比較的深いが、性格については不明である。また、P2については入口の梯子穴の可能性も考えられる。床面は全体に比較的平坦な状況がみられるが、硬化面はそれほど明瞭ではない。カマドは北壁の中央に構築され、煙道部を壁からわずかに外に張り出して設けている。構築材については袖部と煙道部について残存するが、天井部は残存していない。袖部の内側は焼けて赤色に硬化している。火床部は左右の袖部の手前に認められる。カマドについては、残存する構築材が熱によって硬化していることから、使用頻度が高かった様相が看取される。床面の硬化面形成が明瞭ではなかったが、ある程度の期間にわたり使用されていたことが窺われる。

遺物は須恵器、土師器の土器類と石製品が出土している。杯類は保存状態が良く、甕は破片になっている。1の須恵器杯はほぼ完形を保っている。底部は回転ヘラ切りで切り離され、その後持ちヘラケズリが施されている。2の須恵器杯は、1の体部の立ち上がりや質感で全く異なった様相を呈している。2は灰色で硬質感がある。3・4は完形に近い土師器杯である。3の底部は回転糸切りでその後調整は行っていない。体部下端にのみヘラケズリが行われている。4の杯は大振りの部類である。底径は比較的小さく丁寧な持ちヘラケズリが施されている。5の体部はやや内彎しながら立ち上がり、内面は全体にヘラミガキが行われている。現状では脱色しているが、黒色処理が施されていた可能性が強く、図では黒色処理として図示した。6の底部には「山田」の墨書が認められる。7～9は須恵器の甕である。7・8の口縁部は外反して口唇部が肥厚している。9は大型の甕の底部になる。10～12は土師器の甕である。口唇部の形状がそれぞれ異なっている。13は砥石の欠損品である。

本竪穴住居は9世紀後葉に位置づけられよう。

SI016 (第37図、図版18)

調査区中央部東側である8F-01・10付近に位置している。最近の耕作などによって遺構が攪乱され、東



第37図 SI016

側の半分については調査範囲の外に含まれるため、保存状態は極めて不良である。カマドが設置されている可能性が高いが、調査した部分には痕跡は認められない。北西壁側に山砂の流れた状況は観察されていないので、北東壁にカマドが設けられていた可能性が高い。規模は5.0m前後で、方形の平面形態と推測される。検出面から床面までは浅く、壁下全体に壁溝が巡っていたとみられる。P3・P4が柱穴になると判断した。カマドの対向方向になると考えられるP5が入口に伴う梯子穴とみられる。先述のように攪乱が著しいため、床面の状態は不良である。

遺物は土器細片と、1の砥石が出土している。

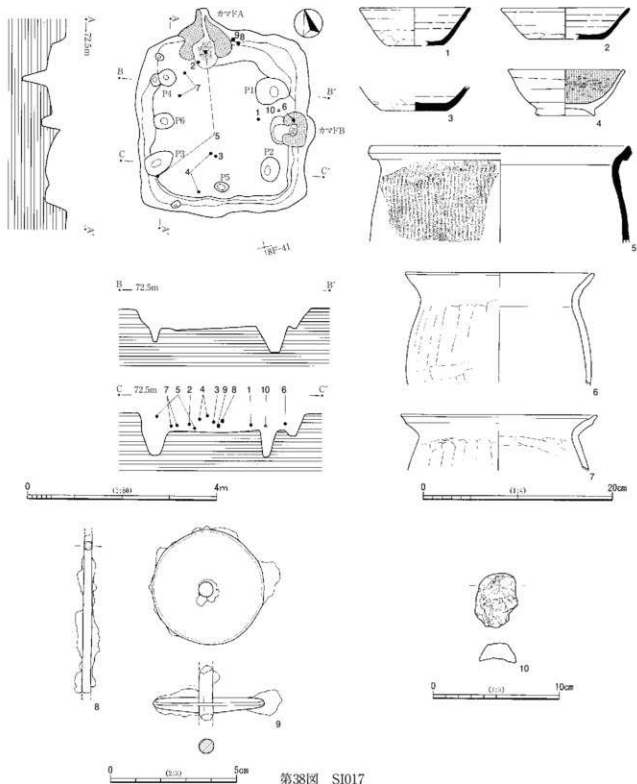
本堅穴住居は8世紀以降の構築と考えられるが、時期を限定することはできない。

SI017 (第38図、図版7・12・18・19)

調査区の中央東側である8F-30・31付近に位置している。重複する遺構は存在しないが、南西側にSI015が近接している。本堅穴住居はカマドの設置が2か所に認められ、遺存状況から両方とも機能していた可能性も否定できない。ここでは長軸方向を主軸として記述を進めることとする。規模は主軸方向に4.00m、その直交方向に3.70mで、隅丸方形の平面形態を呈する。検出面から床面までは35cm～45cmの壁高を残す。壁下には全体に壁溝が巡っていたと考えられるが、一部で途切れたようになり、壁はわずかに外傾して立ち上がる。覆土はローム粒を多く含む黒褐色土が主体で、一気に埋まったような状況を示している。柱穴はP1～P4が該当する。配置は対角線を外れ、壁に近接して位置している。それぞれの床面からの深さは、P1:55cm、P2:51cm、P3:45cm、P4:57cmである。南壁に近いP5は梯子穴で、深さ13cmと浅い。また、P6についても東側のカマドの対向方向になるので、入口の梯子穴の可能性も考えられる。床面は硬化面の形成が明瞭でなかったため、調査時に掘りすぎて、本来の床面が捉えられていない。

カマドは北壁側に1基と東壁側に1基と2基の存在が確認された。ここでは前者をカマドA、後者をカマドBと呼んでおこう。カマドAは北壁の中央からやや西に寄った位置に設けられ、煙道を壁から外に50cm張り出させている。天井部は全く遺存せず、左右に袖部が残存する。火床部は袖部に囲まれた中央部に形成されている。カマドBは東側の壁のほぼ中央部に設置されている。煙道部は壁からわずかに外側に張り出していて、カマドAの煙道部と比較すると短い状況が認められる。構築材は袖部が残存し、天井部は残っていない。火袋部の中央に火床部が形成されている。カマドA・Bは構造における若干の違いが認められるものの、両者とも袖部が残るといって遺存状況は共通する。カマドAの対向方向にはP5が位置し、入口と考えることが推測され、カマドBの対向方向にはP6が検出され、同様に入口であった可能性もたれる。入口が2か所存在したことも考えられるし、入口の新旧があったことも否定できない。よくみられる事例では、最初に構築されたカマドを終息させた後に、別の壁にカマドを設置し直すものである。本例はどちらもカマドとして機能させるに支障のない状態であるため、入口2か所という推察も可能性としては考えられる。

遺物は須恵器、土師器の土器類と金属製品、石製品が出土している。いずれも保存状態は不良で、完全な形を保って出土した遺物は存在しない。1～3は須恵器の杯である。3点に共通するのは底部から体部下端のヘラケズリで胎土は大きく異なる。4は高台付き杯である。外に小さく開くハの字状の高台をもち、体部は内燗気味に立ち上がる。内面はヘラミガキを行い、黒色処理が施されている。5は須恵器の甕であ

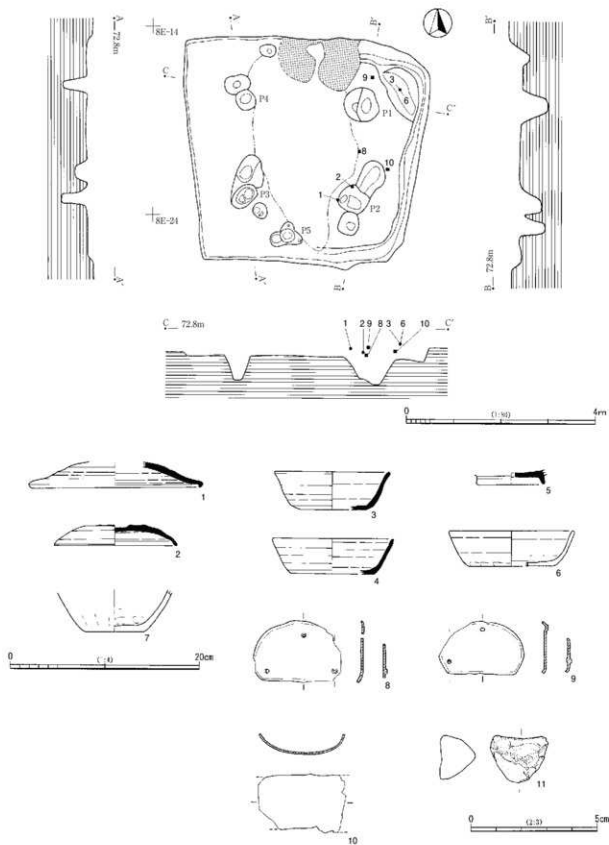


第38図 SI017

る。断面の色調は暗褐色である。6・7は土師器の甕で、胴部上半に縦方向のヘラケズリが行われている。

8・9は軸部の接合部位がないので確定的ではないが、鉄製紡錘車の同一個体になると考えられる。10は軽石の破片で、砥石のように使用していたとみられる。

本竪穴住居は、4の高台付き杯の年代がほかの土器より新しくなるが、これを除いて推定すると9世紀中葉に位置づけられよう。



第39图 SI018

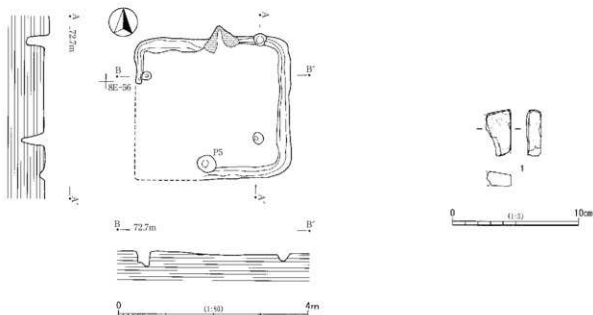
SI018 (第39図、図版7・12・18・19)

調査区の中央部である8E-14・15付近に位置している。溝状遺構であるSD017と土坑SK040が重複する。調査工程の都合から東半分の調査を行った後、しばらく期間を置いた後に西半分の調査を実施している。カマドを北側の壁に設け、主軸方向はほぼ南北を向いている。規模は主軸方向に4.80m、その直交方向に最大で5.20mである。東西方向については、北側で広がり、南側で4.35mと狭まるため、平面形態は北向きの逆台形となり、全体に歪な形状となっている。検出面から床面までは8cm～30cm前後の壁高を残し、東側の壁下には壁溝が検出されている。柱穴は図に示したP1～P4が該当すると判断した。それぞれの柱穴に隣接してピットが存在するので、柱のつけ替えが行われた可能性も否定はできない。深さは、P1：64cm、P2：53cm、P3：56cm、P4：47cmである。P5は入口の梯子穴の可能性が高い。床面は4か所の柱穴とP5を結んだ中央部に硬化面の形成が認められ、カマドの前面付近にも硬い床面が存在する。全体に比較的平坦な状況がみられる。カマドは北壁の中央に構築されている。袖の基部が残存するのみであるため詳細はつかめない。

遺物は須恵器、土師器の土器類と金属製品、石製品が出土している。いずれも保存状態は不良で、遺構の東側からの出土品が図示可能となっている。1は須恵器の蓋である。ツمامミは遺存していない。天井部は回転ヘラケズリが施され、端部は下方に短く屈曲している。2の蓋も天井部の中央にツمامミが取れた状態で遺存していない。天井部の半分に回転ヘラケズリが行われている。端部近くでわずかに開き、内面に凹線がめぐっている。3～5は須恵器の杯になる。3・4の底部は回転ヘラケズリが行われ、体部下端にはヘラケズリが施されている。5は高台部のみ遺存する。6は土師器杯である。底部と体部下端に手持ちヘラケズリが施されている。7は土師器の甕底部である。

8～10は金属製品である。8・9は青銅製の鈎帯具である。腐食が進行し保存状態は不良である。10は薄い鉄製品で湾曲している。器種は不明である。11は火打ち石である。

本竪穴住居は9世紀初頭に位置づけられよう。



第40図 SI019

SI019 (第40図、図版8・18)

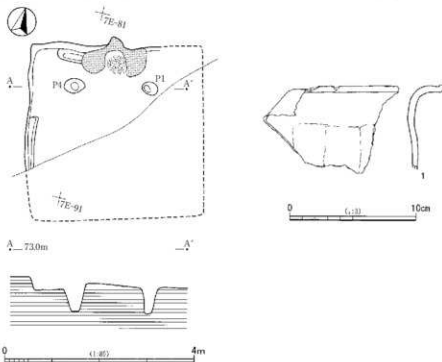
調査区の中央部のやや南側である8E-56付近に位置している。重複する遺構は存在せず単独で検出されている。カマドを北壁に設置し、主軸方向はほぼ南北となる。南西の隅は遺構精査前に破壊されており、全体に保存状態は不良である。規模は主軸方向に3.00m、その直角方向に3.30mで、やや隅が丸くなる方形の平面形態を呈する。検出面から床面まではわずかに5cm前後の壁高を残すのみで、壁下に巡る壁溝によって平面形態や規模が明らかになったともいえる。柱穴は存在しない。北東隅近くと南東側、それと北西側の3か所から径の小さなピットが検出されたが、不規則な配置で性格は不明である。カマドの対向方向である南壁の中央付近に位置するP5は、梯子穴固定のピットと判断した。床面は全体に比較的平坦な状況がみられるが、硬化面はそれほど明瞭ではない。カマドは北壁の中央に構築され、その痕跡がかるうじて確認可能な程度の遺存であるため、詳細は明らかにならない。床面は比較的平坦であるが硬化面の形成は明瞭ではない。

遺物は土器類の細片と石製品が出土している。1は砥石の欠損品である。これ以外に図示可能な遺物は存在しない。

本竪穴住居は住居形態などから推測し、9世紀後葉以降に位置づけられよう。

SI020 (第41図、図版8)

調査区の中央部西側である7E-81付近に位置している。溝状遺構であるSD010と重複し、遺構の南半分が攪乱されており、調査時点で全体の2分の1強が失われていた。カマドを北壁に設け、主軸方向は北からわずかに西側に傾けられている。攪乱が多いため規模は性格にならないが、柱穴配置から推測すると一辺3.50mの方形であったと考えられる。遺存部分では検出面から床面までは20cm程度の壁高を残す。壁下の所々に壁溝が検出されており、全体に巡っていた可能性が高い。柱穴は2か所確認した。本来対角線上



第41図 SI020

の4か所に配置されていたと推測され、その北側に穿たれたP1とP4を検出した。P1の深さは63cm、P4は57cmである。検出範囲の床面は、平坦さがみられず、硬化面の形成も認められない。カマドは袖部の基部近くが残っているが、天井部は失われていた。

遺物は土器片が少量出土している。図示したのは1の土師器甕の口縁部破片1点のみである。口唇部が上方に屈曲している特徴がみられる。

本堅穴住居は9世紀前葉～中葉に位置づけられよう。

SI021 (第42・43図、図版8・12・13・19)

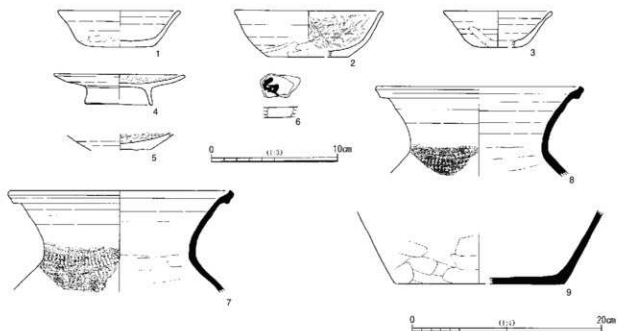
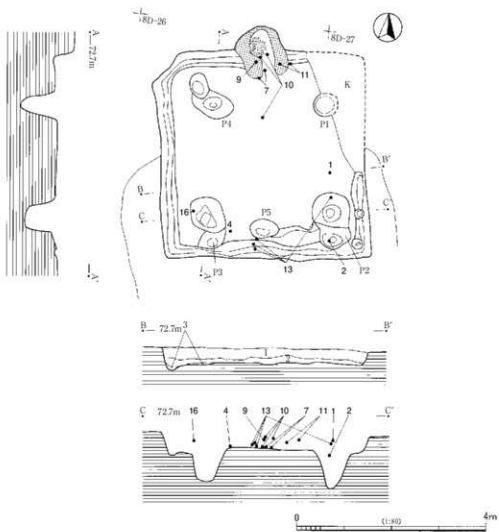
調査区の西側中央部である8D-26付近に位置している。後述するSI022と重複し、それを切って構築されている。また、攪乱が北東隅に認められ、そこだけ遺構が深く破壊されている。カマドを北壁に設け、主軸方向は北からわずかに西側に傾けられている。規模は主軸方向に4.35m、その直交方向に4.40mで、方形の平面形態を呈する。壁高は北西隅近辺で40cm前後である。北東隅は破壊されて明らかではないが、壁下に壁溝が全周していたと考えることができる。覆土は次のように3層に分けることができた。1層：黒褐色土（赤褐色粒を含む）、2層：黒褐色土（褐色粒を少量含む）、3層：明褐色土（黒褐色土を含む）。柱穴は図に示したP1～P4が柱穴と判断した。P1とP4は対角線上に存在するが、P2とP3は南壁に接する位置に検出されたピットが該当する。P2とP3のそれぞれ北側にピットが掘られているが、このピットは、先行して構築されていた堅穴住居であるSI022に伴うと考えられる。それぞれの深さはP1：41cm、P2：64cm、P3：57cm、P4：77cmである。南壁中央部付近のP5は入口の梯子穴である。床面は平坦さがみられず、硬化面も明瞭ではない。カマドは北壁の中央に構築され、煙道部を壁から外に張り出して設けている。構築材は袖部と煙道部について残存するが、天井部の存在は認められない。火袋部は壁から外の位置になることが、火床部の形成位置から明らかである。

遺物は須恵器、土師器の土器類と金属製品が出土している。1は土師器杯で、体部中位から口縁部にかけて開き気味になる。底部から体部下端はヘラケズリが行われている。2の杯の内面はヘラミガキが施されており、現状では痕跡がみつからないが、黒色処理が施されていた可能性も考えられる。3は全体に小ぶりである。4は高台付きの皿である。高台の高さは1.5cmになる。5の皿は高台がとれている。内面はヘラミガキが施され、4よりも丁寧に行われている。6は底部に残された墨書であるが、一部分であるため判読はできない。7～9は須恵器の甕である。第43図10～14は土師器甕で、胴部は縦方向にヘラケズリが施されている。15・16は須恵器瓶の口縁部であろう。先述の甕とは色調および質感が全く違う。17は穂摘鎌の欠損品である。18は刃部が認められず利器との判断が下せない器種不明の鉄製品である。

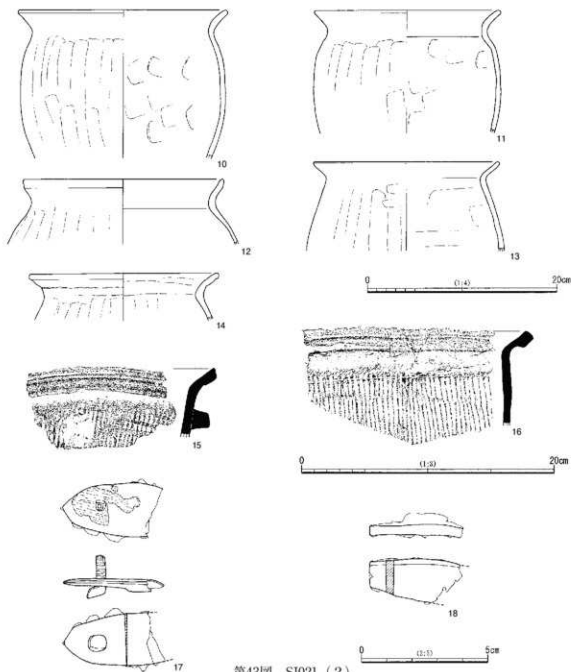
本堅穴住居は9世紀後葉に位置づけられよう。

SI022 (第44図、図版8・13・19)

調査区の西側中央部である8D-36付近に位置している。前述したSI021と重複し、北側の半分近くをそれに切られている。さらに後述するSI024が、本遺構に入れ子の状態で構築されていた。カマドはSI021に切られた北壁に設けられていたとみられる。カマドの存在を仮定すると、主軸方向は北からわずかに西側に傾けられていることになる。規模は主軸方向に約5.90m、その直交方向に5.65mで、わずかに隅が丸い方形の平面形態を呈する。検出面から床面までは25cm～40cm前後の壁高を残す。壁溝は途切れるか所が認



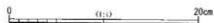
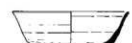
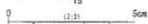
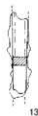
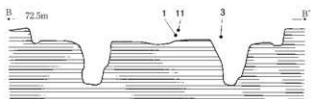
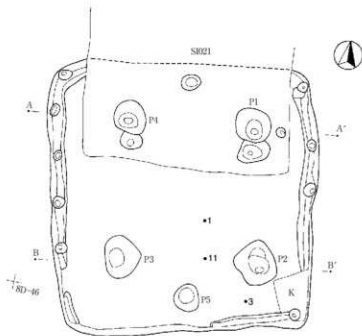
第42図 SI021 (1)



第43図 SI021 (2)

められるが、全体に巡っていた可能性が高い。また、壁溝の所々に小ビットが存在する。柱穴は対角線上の4か所に配置されている。それぞれの深さは、P 1 : 83cm、P 2 : 90cm、P 3 : 88cm、P 4 : 68cmである。おそらくカマドの対向方向になるであろう P 5 は、入口の梯子穴のと考えられる。SI024の床面が覆土中に設定されていたため、床面は攪乱をまぬがれ、全体に比較的平坦な状況を残しているが、硬化面はそれほど明瞭ではない。カマドは北壁の中央に構築されていたであろうが、痕跡は全く確認することができない。

遺物は須恵器、土師器の土器類と金属製品が出土している。杯類は須恵器が卓越し、土師器の図示個体数は少ない傾向である。1の須恵器杯は口径と底径の差が小さく体部下端に丸みが認められる。2の体部は1と同様にわずかに内彎気味に立ち上がり、3・4・5は体部上位から口縁部にかけてやや外反する。6は非ロクロの土師器杯である。体部は内彎しながら立ち上がり、体部外面はヘラケズリが施され、内面



第44图 SI022

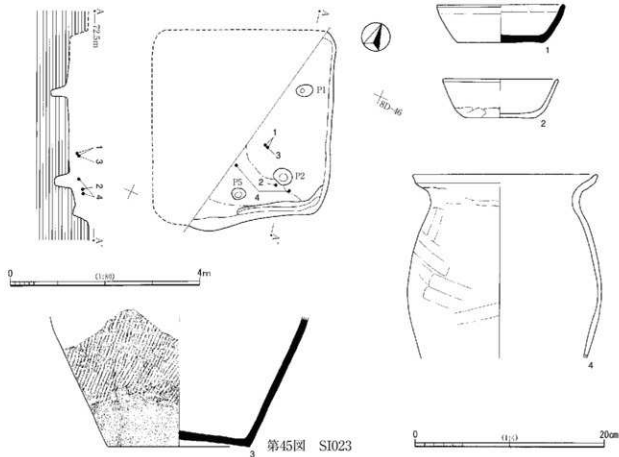
はミガキが行われている。7の須恵器蓋は天井部に扁平なツمامミが付き、端部は短く下方に折られている。8は土師器甕の口縁部である。ゆるやかに外反する口縁部で、外面にはヘラ状工具で周回したような調整痕がみられる。9・10は土師器杯の口縁部付近に記された墨書である。遺存部分が少なく判読は不可能であるが、2点とも2文字かそれ以上の文字が記されていることが明らかである。11は須恵器瓶の口縁部であろう。12~15は鉄製品である。いずれも一部分が残されていたにとどまる。14は曲刃鎌の先端部の可能性が強く、15は刀子の一部になるかもしれない。

本竪穴住居は出土遺物に時間幅があるように見受けられる。1の須恵器杯や6の土師器杯等の存在から、8世紀末から9世紀初頭に位置づけておきたい。

SI023 (第45図、図版8・13)

調査区の中央部西端である8D-45付近に位置している。SI022の南西側に検出されたが、大部分が調査区の外に含まれ、明らかにできたのは全体の3分の1程度にすぎない。カマドはおそらく北壁に設けられていたと推測されるが、調査区外になるため断定はできない。仮にそうであれば、主軸方向は北からわずかに西側に傾けられている。平面形態はやや隅が丸くなる方形で、規模は4.0m内外とそれぞれ推定される。検出面から床面までは30cm~40cm前後の壁高を残す。壁溝は南東隅近くで検出されているのみである。柱穴は図のP1とP2が該当すると判断した。それぞれ深さは47cmと45cmである。また、P5については入口の梯子穴の可能性が考えられる。床面は入口方向であるP5の周辺に硬化面の存在が確認されている。

遺物は須恵器、土師器の土器類が出土している。1の須恵器杯は在地産(永田・不入堂)と考えられ、表面にざらつき感がある。2の土師器杯の体部下位はヘラケズリが施されている。3は須恵器甕の胴部下



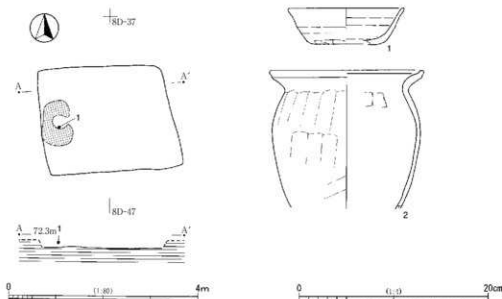
第45図 SI023

位から底部で、比較的薄くつくられている。4の土師器甕は長胴であったと推測され、口唇部は小さく上方に折られている。頸部の下から胴部にかけては、縦方向や斜方向のヘラケズリが施されている。

本竪穴住居は8世紀末葉に位置づけられよう。

SI024 (第46図、図版8・13)

調査区の中央部西側である8D-36付近に位置している。9世紀初頭に位置づけたSI022の覆土中に構築され、その精査途中に存在が判明した。竪穴住居の存在が明らかになったのは、カマドが検出されたことによる。その検出までにSI022の覆土を全体に掘り下げていたので、壁はまったく残すことができなかった。したがって規模や形態については不明である。ただ、検出したカマドの基部から推定すると、カマドは西壁に設けられていたとみることが可能で、主軸方向は東西方向であったと推定される。柱穴が穿たれた痕跡は認められない。全体に小型の部類に入る竪穴住居である。



第46図 SI024

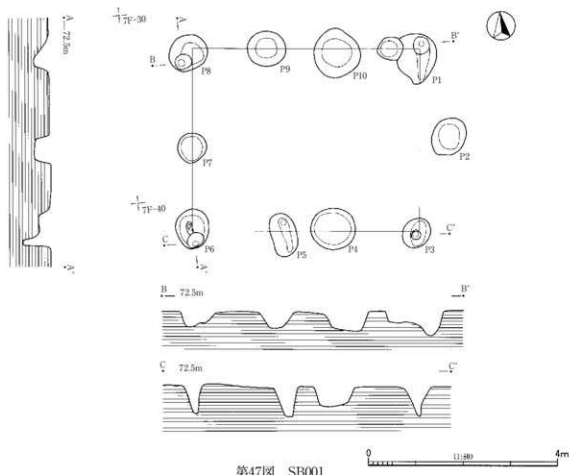
遺物は土師器が出土している。1は土師器杯で、器表面全体にざらつき感がある。底部から体部下端にヘラケズリが施されている。2は土師器甕である。胴部の上位が膨らみ、底部に向かって細くなる。口縁部は外反し、口唇部は短く上方に折られている。胴部は縦方向のヘラケズリが行われている。

本竪穴住居は9世紀中葉に位置づけられよう。

2 掘立柱建物

SB001 (第47図)

7F-30・31・40・41に検出された掘立柱建物である。縄文時代中期の竪穴住居SI003のを破壊している。やや不規則な柱配置であるが、掘立柱建物としてとらえた。規模は桁行3間で4.80m、梁行2間で3.84mである。梁行の方向はほぼ南北を向いている。柱間間隔は不揃いであるが、平均値では桁行は1.60m、梁行の平均値は1.92mとなる。また、四隅の柱穴がわずかに深くなる傾向がみられる。各柱穴の平面形態は円形を基本とするが、P5については楕円形を呈している。この柱穴の覆土については観察を十分に行って



第47図 SB001

いないが、SI003の柱穴の可能性も考えられる。また、P2がこの掘立柱建物の柱穴となるか、別遺構になるかについても判断が難しい。それぞれの柱穴から柱痕跡は確認されていない。

柱穴から遺物は出土していない。年代決定の根拠はないが、SI002が南側に隣接していることから、8世紀後葉である可能性は低い。9世紀代の構築を考えておきたい。

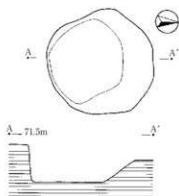
3 土坑

古墳時代以降の土坑は28基存在する。分布については、第20図に示したように、調査区の北側半分地区に多く存在する。SI002、SI009、SI013の周辺にややまとまって検出されている状況が看取される。

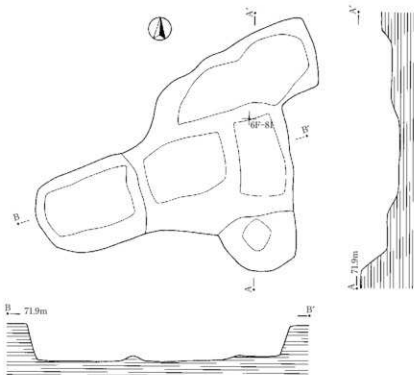
土坑の平面形態は、第48図～第51図に図示したように、円形、不整形円形、楕円形、不整形円形が多くを占める。第48図に挙げたSK006は、いくつかの土坑が同一地点で繰り返し掘り直されたか、何らかの意図で5基の土坑を連結させたのかもしれないが、状況の形成は明らかにならない。このような不整形な形状にはSK023も該当する。検出面からの深さは、SK018の54cmが最も深く、SK051が23cmと浅い。底面が平坦になる部類が多いが、断面形がレンズ状になったり、逆台形を呈する土坑も認められる。

遺物は13基から土器類の破片が出土している。SK005からは近世に比定される陶磁器類の破片が出土している。SK006、014、016、018、020、023、041、042、044、051、052、053からは須恵器や土師器の破片が出土している。これら土器類は実測して図示可能な保存状態ではないが、いずれも平安時代に比定可能な破片である。また、SK014からは刀子が破損状態で出土している（第48図1・2、図版19）。墓坑であった可能性がある。ほかの土坑にも墓坑が存在するのかもしれないが、断定する資料が出土していないので、

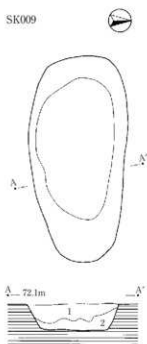
SK005



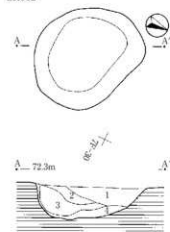
SK006



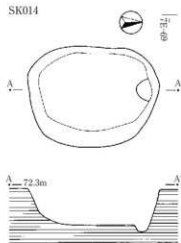
SK009



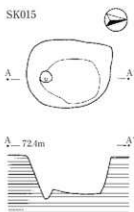
SK012



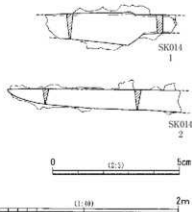
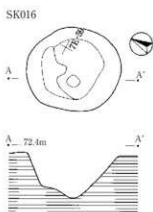
SK014



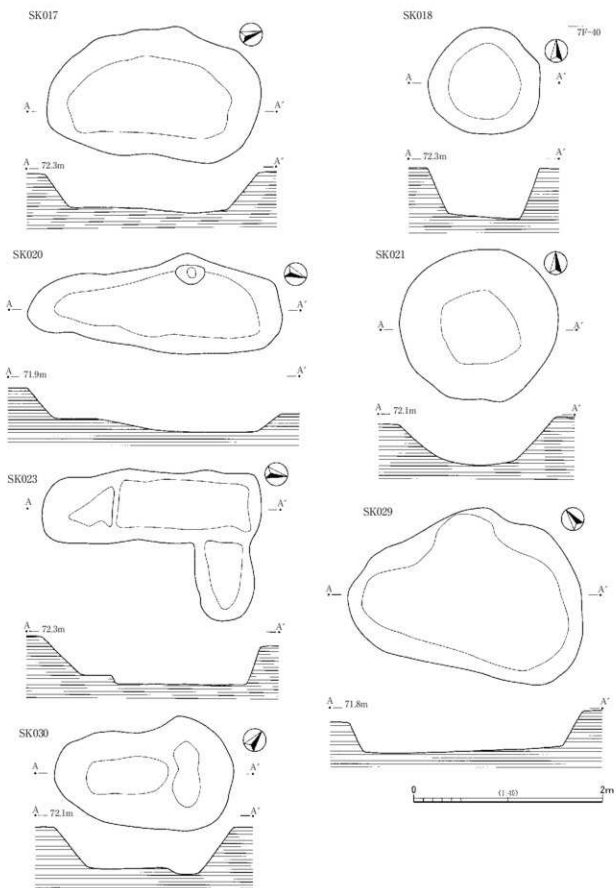
SK015



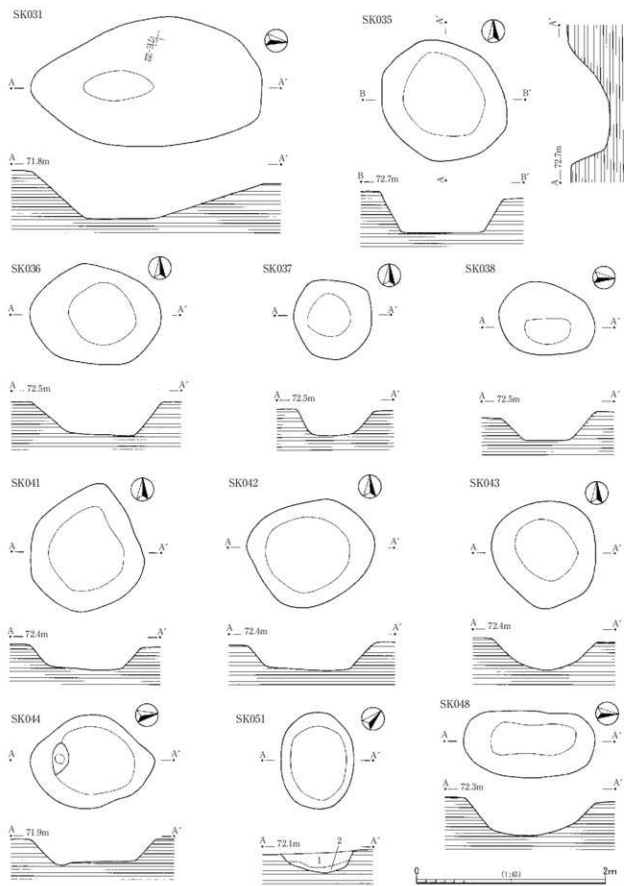
SK016



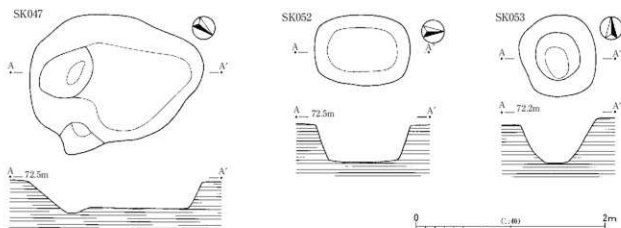
第48圖 土坑(1)



第49圖 土坑(2)



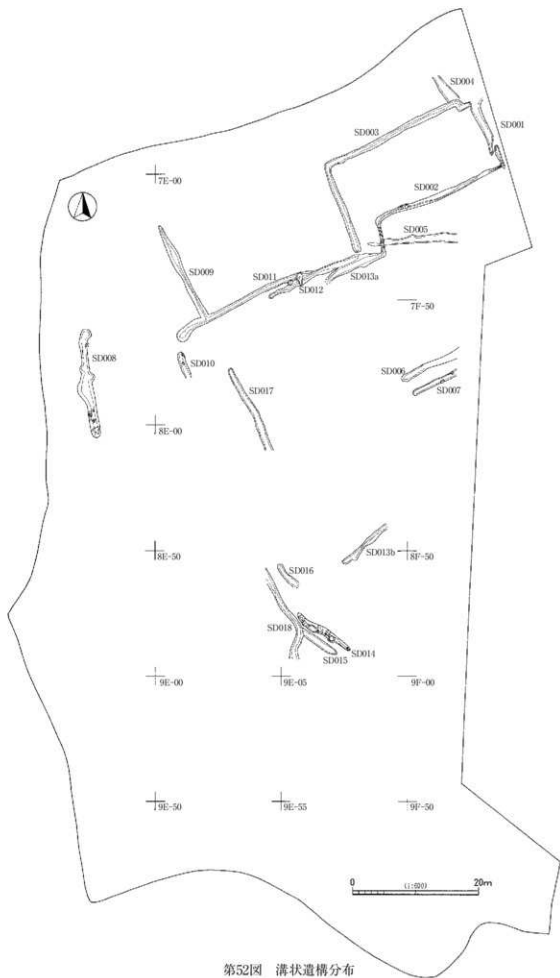
第50圖 土坑 (3)



第51図 土坑(4)

第1表 奈良・平安時代以降土坑一覧

遺構番号	位置	種類	形状	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	遺物	時期	備考
SK005	6F-71	土坑	円形	113	110	38	陶磁器	近世	
SK006	6F-80	土坑	不整形	280	253	40	土師器	平安	5基の土坑が連結
SK009	6E-99	土坑	楕円形	217	105	28			
SK012	7E-39	土坑	不整形円形	120	97	40			
SK014	7E-69 (墓壙)	土坑	不整形楕円形	138	106	41	土師器 刀子	平安	底面に小ピット1か所
SK015	7E-59	土坑	不整形円形	89	73	41			底面に小ピット1か所
SK016	7E-58	土坑	円形	100	90	52	土師器	平安	底面に小ピット1か所
SK017	7F-90	土坑	不整形円形	225	140	45			
SK018	7E-49	土坑	円形	120	113	54	須恵器 土師器	平安	
SK020	7D-37	土坑	不整形楕円形	270	107	48	須恵器	平安	底面に小ピット1か所
SK021	7D-76	土坑	円形	167	158	53			
SK023	7E-38	土坑	不整形長方形	230	75	52	須恵器 土師器	平安	2基の土坑が接続
SK029	7E-13	土坑	不整形	250	175	45			
SK030	7E-33	土坑	不整形楕円形	190	120	50			
SK031	7E-12	土坑	不整形楕円形	245	135	50			断面逆台形
SK035	7E-95	土坑	円形	130	127	43			
SK036	7E-86	土坑	不整形円形	135	103	40			
SK037	7E-86	土坑	円形	83	83	29			
SK038	7E-87	土坑	不整形楕円形	100	78	28			
SK041	8E-09	土坑	不整形円形	137	118	25	土師器	平安	
SK042	8E-19	土坑	不整形円形	136	112	30	須恵器 土師器	平安	
SK043	8E-19	土坑	不整形円形	113	110	35			
SK044	7F-90 8F-00	土坑	不整形円形	132	100	29	土師器	平安	底面に小ピット1か所
SK047	8E-26	土坑	不整形	183	135	29			
SK048	7E-46 7E-56	土坑	長楕円形	140	70	40			
SK051	8E-76	土坑	楕円形	103	78	23	須恵器 土師器	平安	
SK052	7D-98	土坑	隅丸長方形	102	75	40	土師器	平安	
SK053	8E-65	土坑	不整形円形	87	80	47	土師器	平安	



第52図 溝状遺構分布

個々の性格を説明するのは難しい。

なお、図示した土坑の大きさなどは第1表に示したとおりである。この表の長さや幅については最大の値で、深さは検出面からになる。

4 溝

溝状遺構として先頭記号にSDと付けた遺構は、001～018までで、013にaとbを付したので全部で19条である。遺構の分布については第52図に溝状遺構のみを図示した。全体の傾向として、北西-南東方向に延びる溝と、それと直交するような方向である北東-南西に延びる溝が認められる。この方向は8世紀から9世紀に構築された竪穴住居の方向とは異なり、竪穴住居の配置とは無関係であることがわかる。

個々の規模については明確にならない点があるが、SD003からSD011、あるいはSD009からSD017は本来それぞれつながっていたと考えられる。SD003の幅は75cm～125cm、検出面からの深さは最大で60cmである。SD011の幅は77cm～168cmで、深さは最大で44cmである。また、SD009の幅は80cm～140cm、検出面からの深さは最大で61cmであり、SD017の幅は75cm～132cmで、深さは最大で29cmである。幅や深さについては一定ではなく、溝底に規則的に並ぶように配置されたビットなどは検出されていない。溝の目的や役割としては、土地の境界などとして掘られた可能性が高い。ただ、ほかの溝も含め、それぞれの目的を明確にすることは困難である（第53～55図、図版18、第2表）。

遺物は土師器の細片が出土しているが、伴う遺物にはならない。SD004とSD014から出土している砥石が溝に関連すると推測される。

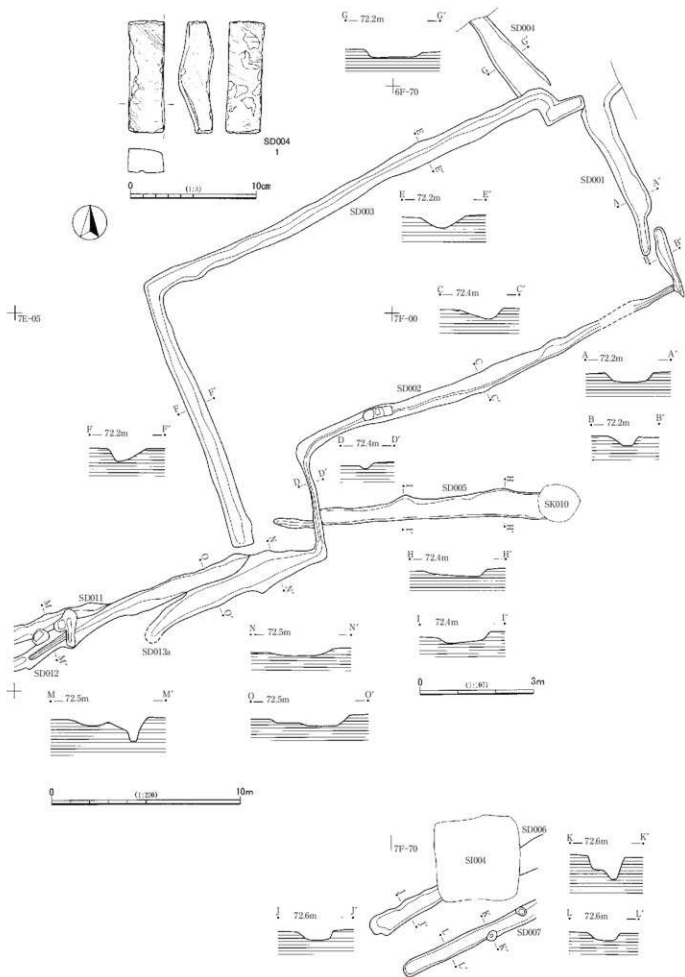
構築時期については明確にならない。近世以降ということも考えられる。

5 遺構外出土遺物

第56図（図版13・18・19）に遺構に伴わない遺物を図示した。1は土師器の鉢である。やや丸みを帯びた底部からわずかに内彎して立ち上がり、口縁部は尖り気味になる。体部は全体にヘラケズリが施されている。竪穴住居の時期よりも古く、古墳時代後期の所産と考えられる。

2・3・4は須恵器の杯である。色調は黄褐色系を呈する。5も須恵器の杯であるが、内面に硯として使用された痕跡を残している。底部の切り離しは静止糸切りによるものである。6は須恵器甌である。底部には中心に円形の穴が開けられ、周囲の4か所に楕円形の穴が開けられていたことがわかる。復元値で口径31.1cm、器高28.0cm、底径14.0cmである。7は土師器の杯体部の破片で、墨書の一部が残る。比較的細い筆致で記されているが、判読は不可能である。8は常滑の片口鉢の口縁部破片である。中世の所産になろう。9は瀬戸の皿の底部である。内面に灰黄色の釉がかかる。中世に比定される。10は常滑の挿鉢底部である。

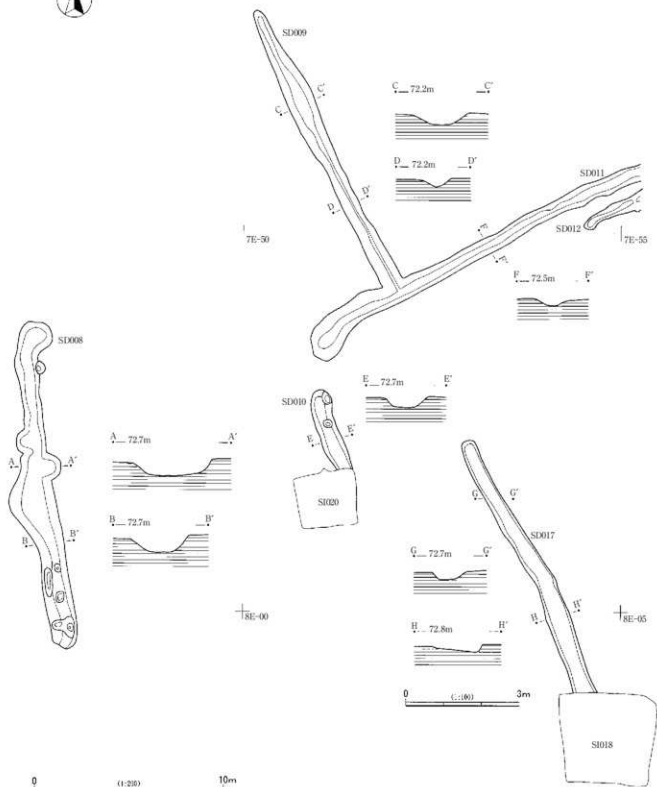
11は鉄滓である。12は凝灰岩製の砥石の欠損品である。13～25は銭貨で、「永樂通寶」と「寛永通寶」が出土している。13～18の「永樂通寶」については平安時代の竪穴住居であるSI021から出土している。竪穴住居の調査中に検出することができなかったが、中世以降の土坑墓が存在していた可能性がある。



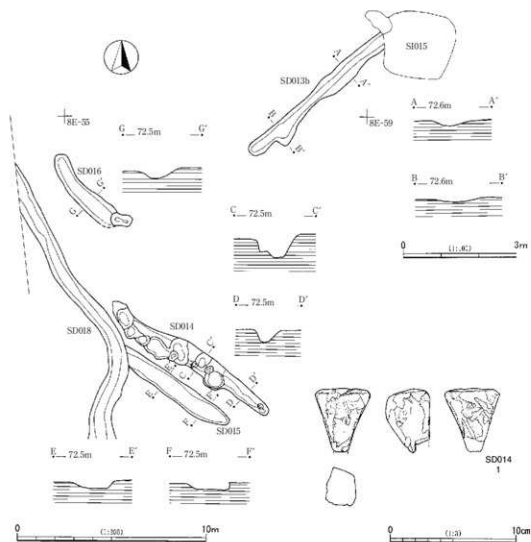
第53図 溝状遺構 (1)

7E-10

7E-15



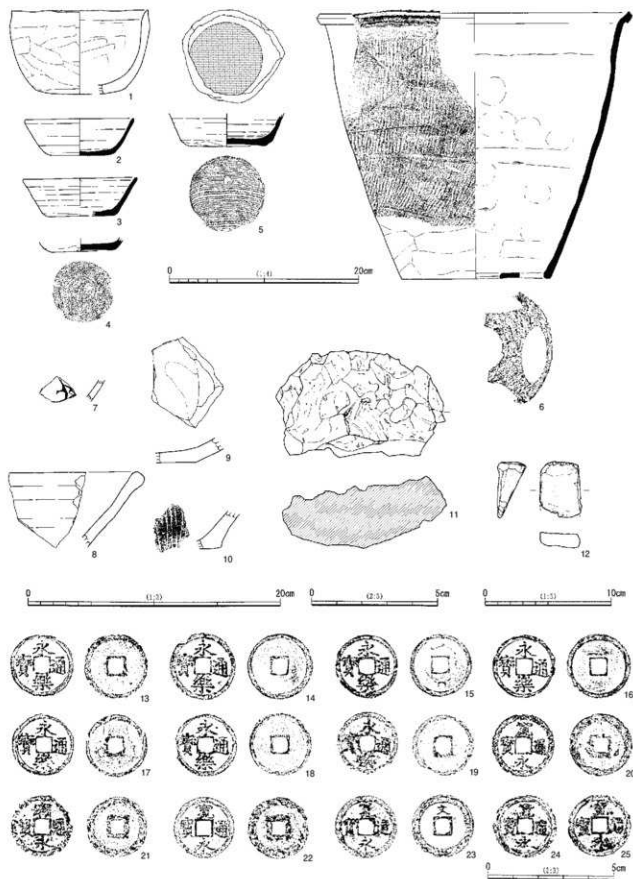
第54図 溝状遺構(2)



第55図 溝状遺構 (3)

第2表 溝一覽

遺構番号	幅 (cm)		深さ (cm)		遺物	遺構番号	幅 (cm)		深さ (cm)		遺物
	狭	広	浅	深			狭	広	浅	深	
1 SD001	57	145	19	36		11 SD011	77	168	22	44	
2 SD002	38	105	11	25		12 SD012	73	105	10	45	
3 SD003	75	125	25	60		13 SD013a	83	205	20	34	
4 SD004	88	175	17	32	砥石	14 SD013b	52	120	11	15	
5 SD005	78	151	13	26		15 SD014	68	143	34	42	砥石
6 SD006	84	110	21	46		16 SD015	93	107	14	27	
7 SD007	75	80	19	34		17 SD016	77	110	24	30	
8 SD008	90	248	37	75		18 SD017	75	132	19	29	
9 SD009	80	140	21	63		19 SD018	85	118	16	61	
10 SD010	90	108	49	59							



第56图 遺構外出土遺物

第3表 石器・石製品属性表

発掘番号	位置	器物番号	器種	石材	最大径(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	目石器	備考
第19号1	71-68	3-①	潤片	黒曜石	27.0	25.5	9.0	3.98	目石器	
第19号2	71-68	2	潤片	黒曜石	19.0	15.0	3.6	0.96	目石器	
第19号3	71-68	3-③	潤片	黒曜石	16.0	14.5	4.0	0.63	目石器	
第9号1	SB04	2	尖頭器	琥珀頁岩	(30.5)	21.6	7.0	(5.49)	目石器	
第9号2	SB05	1	二次加工潤片	黒色安山岩	27.1	23.5	8.0	4.35	目石器	
第9号3	SB06	1	潤片	流紋岩	37.5	36.0	12.5	14.88	目石器	
第9号4	SK002	1	潤片	安山岩TPO	21.5	17.5	6.0	2.26	目石器	
第9号5	SB05	1	潤片	頁岩	24.6	17.5	5.5	1.25	目石器	
本表のみ	71-68	3-②	チャップ	黒曜石	9.0	9.0	1.2	0.01以下	目石器	
第21号1	SB01	2	潤片	黒曜石	35.0	30.0	9.8	2.45		
本表のみ	SB01	3	潤片	黒曜石	17.0	16.5	9.5	2.01		
第21号4	SK013	4	潤片	礫灰岩	38.0	16.5	8.0	3.05		
第19号1	SB05	4	有舌尖頭器	頁岩	(42.6)	21.5	6.0	(5.13)		
第19号2	SB07	5	石鏃	黒曜石	15.6	15.6	5.0	0.77		
第19号3	LST	1	肉輪潤片	チャート	26.0	17.8	7.9	4.1		
第19号4	SD04	1	二次加工潤片	黒曜石	12.2	15.5	6.7	1.1		
第19号5	SB02	2	二次加工潤片	頁岩	40.0	36.0	11.0	18.16		磨製石鏃から作出
第19号6	SH03	1	潤片	黒曜石	14.0	23.0	3.5	0.86		
第19号7	SH07	1	潤片	チャート	24.5	22.5	5.5	2.78		
第19号8	6F-72	1	潤片	黒曜石	16.9	30.5	7.3	2.32		
第19号9	ZT	1	潤片	黒曜石	32.0	30.0	8.0	5.05		
第19号10	7F-31	1	石核	黒曜石	46.2	40.0	16.0	20.49		
第19号11	SD-01	1	石核	黒曜石	19.5	23.5	14.5	5.42		
第19号12	7F-81	2	石核	水晶	33.5	17.0	15.2	9.17		
第19号13	7F-61	1	石核	石英	16.0	15.0	16.5	4.44		
第19号14	SB04	7	磨製石斧	閃緑岩	60.5	38.0	22.0	160.0		
第19号15	8F-61	1	箭石	礫灰岩	78.0	70.5	37.0	223.2		
第19号16	SH00	1	磨石	安山岩	36.0	32.0	44.0	57.4		
第19号17	SD004	1	石鏃	礫灰岩	44.5	33.0	22.0	45.1		
本表のみ	SH002	1	潤片	黒曜石	14.0	12.5	3.0	0.4		
第21号18	SB02	19	砥石	礫石	51.0	56.5	55.0	29.65		
第21号5	SB04	2	砥石	礫灰岩	(49.5)	29.0	12.0	(23.03)		
本表のみ	SB04	5-①	潤片	黒曜石	11.4	8.9	2.0	0.18		
本表のみ	SB04	5-②	チャップ	黒曜石	6.5	4.5	0.5	0.01以下		
第21号6	SB05	4	砥石	礫石	54.5	42.5	38.0	30.18		
第21号26	SB06	56	結縛華	流紋岩	34.2	35.0	15.5	26.0		
第21号29	SB06	7	砥石	片麻岩	165.6	58.0	39.0	542.71		
第21号30	SB06	8	打製石斧?	ホルンフェルス	146.5	56.0	30.5	153.21		
第21号31	SB03	30	砥石	礫灰岩	72	47.0	31.5	65.37		
第21号13	SB05	1	砥石	砂岩	(37.2)	40.0	16.0	(31.68)		
第21号1	SB06	1	砥石	礫灰岩	(70.0)	32.5	22.5	(56.45)		
第21号10	SB07	35	砥石	礫石	42.5	33.0	18.5	6.3		
第21号11	SB05	1	火打石	石英	58.6	23.0	15.0	7.5		
第21号1	SD09	1	砥石	礫灰岩	(36.2)	(19.7)	11.5	(10.42)		
第21号1	SD04	1	砥石	礫灰岩	(88.3)	(28.5)	27.5	(97.21)		
第21号1	SD04	1	砥石	礫灰岩	(50.0)	43.0	35.0	(66.79)		
第21号12	SB01	1	砥石	礫灰岩	(43.3)	33.0	22.5	(17.78)		
本表のみ	6F-62	1	潤片	黒曜石	17.0	4.5	3.5	0.25		
本表のみ	6F-92	1	潤片	黒曜石	15.1	11.5	2.0	0.28		
本表のみ	7F-12	1	チャップ	黒曜石	9.0	8.2	1.0	0.01以下		
本表のみ	8F-81	1	潤片	石英	17.0	18.0	9.0	27.4		

第4表 掲載土器観察表

遺積番号	伴出番号	国産	器種	産出地	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成	外面色調	内面色調	特徴
SB002	第21号1	10	瓶蓋器 杯	支那	12.5	4.6	7.3	頁岩 細砂粒	良	灰白～黄褐色	黄褐色	
SB002	第21号2	10	瓶蓋器 杯	体底25%	(10.8)	(4.2)	(6.4)	細砂粒	良	細灰黄褐色	暗赤褐色	
SB002	第21号3	10	瓶蓋器 杯	体底25%	(10.8)	(4.3)	(7.0)	細砂粒	良	細灰黄褐色	暗赤褐色	
SB002	第21号4	10	瓶蓋器 杯	体底50%	-	-	(8.6)	細砂粒	良	暗赤褐色	暗灰黄褐色	
SB002	第21号5	10	瓶蓋器 杯	体底のみ	-	-	6.9	頁岩少量	良	灰白～リーブ	灰白～リーブ	胎用靄 断面褐色
SB002	第21号6	10	瓶蓋器 杯	体底20%	(14.5)	(5.0)	-	細砂粒	良	暗赤褐色	灰褐色	
SB002	第21号7	10	土師器 杯	口縁完整	12.1	4.2	7.0	砂粒	良	赤赤	赤赤	
SB002	第21号8	10	土師器 杯	全体の25%	(11.6)	(4.1)	(6.4)	砂粒	良	暗赤褐色	暗赤褐色	赤赤?
SB002	第21号9	10	土師器 杯	全体の25%	(12.8)	(3.3)	-	砂粒	良	褐色	褐色	
SB002	第21号10	10	土師器 杯	全体の40%	(12.6)	(4.5)	(8.4)	砂粒	良	暗褐色	暗褐色	
SB002	第21号11	10	土師器 壺	破片	(18.6)	(3.8)	-	砂粒	良	灰白～赤褐色	暗赤褐色	
SB002	第21号12	10	瓶蓋器 壺	胴部破片	-	-	-	細砂粒 靄害	良	灰白～暗赤褐色	灰白～暗赤褐色	胴部最大径19.4cm
SB004	第21号1	10	縄文 漆鉢	口縁部40%	(25.0)	(19.8)	-	砂粒	良	灰褐色	灰白～暗赤褐色	口縁部隆起2条のクラック
SB004	第21号2	10	瓶蓋器 壺	全体の60%	15.0	(1.7)	-	ヌコリア	やや不良	灰白～リーブ	灰褐色	つまみ欠失
SB004	第21号2	10	土師器 杯	底部の30%	-	-	(8.4)	細砂粒	良	灰白～暗赤褐色	暗赤褐色	
SB005	第21号1	10	土師器 杯	口縁部	13.2	3.6	8.8	砂粒	良	暗褐色	暗赤褐色	赤赤の可能性あり
SB005	第21号2	10	土師器 杯	体部70%	13.4	3.6	8.7	砂粒	良	灰白～暗赤褐色	灰白～暗赤褐色	
SB005	第21号3	10	土師器 壺	口縁部45%	(23.6)	(5.2)	-	砂粒	普通	暗赤褐色	暗赤褐色	胴底より調整痕不明
SB005	第21号4	10	土師器 壺	底部の30%	-	-	(11.2)	砂粒	普通	灰白～黄褐色	赤褐色	

選積番号	採回番号	回數	器種	選分度	口徑(㎝)	器高(㎝)	底径(㎝)	動土	構成	外面色調	内面色調	特徴
S005	第2045	10	土師器 甕	底部分のみ	-	-	11.8	砂粒	普通	灰青褐色	黒褐色	
S006	第2046	10	土師器 杯	全体の40%	(12.4)	(4.0)	(7.5)	砂粒	具	暗赤褐色	赤褐色	
S006	第2047	10	土師器 杯	底部分のみ	-	-	(8.4)	砂粒	普通	黒褐色	濃い赤褐色	
S006	第2048	10	土師器 甕	底部分のみ	-	-	7.2	砂粒	普通	褐色	黒色	濃い赤褐色
S006	第2049	10	土師器 甕	底部分のみ	-	-	19.0	砂粒	普通	浅黄褐色	濃い赤褐色	
S007	第2049	10	須恵器 杯	全体の30%	(13.7)	(4.0)	(7.6)	砂粒	具	黒黄褐色	黄褐色	
S007	第2050	10	須恵器 杯	全体の40%	(13.3)	(4.1)	(7.8)	砂粒	具	黒灰黄色	黒黄褐色	
S007	第2051	10	須恵器 杯	底部分のみ	-	-	8.3	砂粒	具	黒灰黄色	黒灰黄色	内面黒色帯
S007	第2052	10	須恵器 杯	底部分のみ	-	-	7.4	砂粒	具	褐色	黒灰黄色	
S007	第2053	10	須恵器 杯	底部分のみ	-	-	10.2	石灰砂多	普通	黄褐色	黒灰黄色	高台付き取皿用?
S007	第2056	10	土師器 甕	底部分のみ	-	-	(7.0)	砂粒	具	濃い赤褐色	濃い赤褐色	
S008	第2061	10	須恵器 杯	底部分の45%	-	-	(7.2)	砂粒	具	濃い赤褐色	濃い赤褐色	
S008	第2062	10	土師器 杯	全体の70%	(15.4)	(5.0)	7.4	砂粒	普通	濃い赤褐色	濃い赤褐色	
S008	第2063	11	土師器 杯	全体の50%	(12.8)	(4.7)	7.0	砂粒	普通	濃い赤褐色	濃い赤褐色	
S008	第2064	11	土師器 杯	全体の70%	(12.4)	(4.2)	7.0	砂粒	普通	濃い赤褐色	濃い赤褐色	
S008	第2065	11	土師器 杯	全体の30%	(13.4)	(4.4)	(6.8)	スコリア多	普通	濃い赤褐色	濃い赤褐色	
S008	第2066	11	土師器 杯	全体の20%	-	-	(6.8)	砂粒	普通	濃い赤褐色	濃い赤褐色	
S008	第2067	11	土師器 杯	底部分の50%	-	-	(7.0)	砂粒	普通	濃い赤褐色	濃い赤褐色	
S008	第2068	11	土師器 甕	底部分のみ	-	-	6.2	砂粒	具	褐色	褐色	
S008	第2069	11	土師器 甕	底部分のみ	-	-	5.8	砂粒	具	濃い赤褐色	褐色	
S008	第2070	11	土師器 甕	底部分のみ	-	-	(7.2)	砂粒	普通	黒褐色	濃い赤褐色	底面に「x」の彫刻
S008	第2071	11	土師器 高台付き甕	全体の30%	(13.0)	(3.2)	(5.6)	細砂粒	具	濃い赤褐色	灰褐色	
S008	第2072	11	土師器 高台付き甕	底部分の80%	-	-	-	細砂粒	具	濃い赤褐色	濃い赤褐色	
S008	第2073	11	土師器 高台付き甕	底部分のみ	-	-	7.4	砂粒	具	褐色	褐色	
S008	第2081	11	土師器 高台付き甕	底部分のみ	-	-	6.5	砂粒	具	褐色	褐色	
S008	第2085	11	須恵器 甕	底部分の40%	-	(17.4)	-	砂粒	普通	濃い赤褐色	濃い赤褐色	胴部最大径25.7cm
S008	第2091	16	土師器 甕	口縁部	(17.8)	-	-	砂粒	普通	濃い赤褐色	濃い赤褐色	
S008	第2092	17	土師器 甕	底部分のみ	-	-	6.8	砂粒	普通	灰褐色	灰褐色	底面に「x」の彫刻
S009	第3001	11	須恵器 杯	底部分のみ	-	-	7.8	砂粒	具	黒褐色	黒褐色	
S009	第3002	11	須恵器 杯	底部分の50%	-	-	(8.1)	砂粒	具	黒褐色	黒褐色	底面に「x」の彫刻
S009	第3003	11	土師器 杯	全体の65%	(12.3)	(4.3)	6.2	砂粒	具	褐色	褐色	底面に「W」の彫書
S009	第3004	11	土師器 杯	全体の25%	(14.3)	(3.9)	(7.6)	砂粒	普通	赤砂	赤砂	内外面赤褐色
S009	第3005	11	土師器 杯	底部分の50%	-	-	7.0	砂粒 スコリア	具	褐色	褐色	底面に「M」の彫刻
S009	第3006	11	土師器 甕	底部分のみ	-	-	(9.6)	砂粒	具	黄褐色	黄褐色	
S009	第3007	11	土師器 甕	口縁部破片	(12.4)	-	-	砂粒	普通	濃い赤褐色	濃い赤褐色	
S012	第3011	11	土師器 甕	全体の60%	(14.2)	8.6	10.6	砂粒	普通	黒灰黄色	黒灰黄色	
S013	第3011	11	土師器 杯	全体の55%	(16.4)	5.1	8.0	砂粒	普通	濃い赤褐色	濃い赤褐色	
S013	第3012	11	土師器 杯	ほぼ定形	13.4	4.6	6.4	砂粒 スコリア	普通	明赤褐色	明赤褐色	
S013	第3013	11	土師器 杯	全体の80%	13.9	4.3	6.6	砂粒 スコリア	普通	褐色	褐色	
S013	第3014	11	土師器 杯	全体の70%	12.2	4.3	6.7	砂粒	普通	褐色	褐色	
S013	第3015	11	土師器 杯	定形	13.4	4.9	6.7	砂粒	普通	濃い赤褐色	濃い赤褐色	
S013	第3016	11	土師器 杯	全体の90%	13.6	4.3	5.8	砂粒 スコリア	普通	褐色	褐色	
S013	第3017	11	土師器 杯	定形	14.3	3.5	7.0	砂粒 スコリア	普通	濃い赤褐色	濃い赤褐色	全体に赤み面赤
S013	第3018	11	土師器 杯	定形	12.0	3.7	7.4	砂粒 スコリア	普通	濃い赤褐色	濃い赤褐色	
S013	第3019	11	土師器 杯	定形	12.6	3.9	6.2	砂粒 スコリア	普通	濃い赤褐色	濃い赤褐色	
S013	第3020	11	土師器 杯	定形	13.3	3.5	6.0	砂粒	普通	褐色	褐色	
S013	第3021	11	土師器 甕	全体の70%	13.6	1.9	6.9	砂粒 スコリア	普通	明黄褐色	明黄褐色	
S013	第3022	11	土師器 甕	全体の90%	13.9	2.1	6.6	砂粒 スコリア	普通	濃い赤褐色	褐色	
S013	第3023	11	土師器 高台付き杯	高台尖丸	15.7	(4.4)	-	砂粒	具	濃い赤褐色	黒色	内面黒色処理
S013	第3024	11	土師器 高台付き甕	定形	12.9	3.1	7.0	砂粒	具	褐色	褐色	
S013	第3025	12	土師器 高台付き甕	全体の90%	13.5	3.4	7.7	砂粒 スコリア	普通	褐色	褐色	
S013	第3026	12	須恵器 甕	胴部の65%	-	(12.3)	8.5	石灰砂多	具	黒黄褐色	黒灰黄色	底面に「x」の彫刻
S013	第3027	12	須恵器 甕	胴部の65%	-	(19.8)	12.9	砂粒	普通	黄褐色	黄褐色	底部5孔
S013	第3028	12	土師器 甕	全体の70%	14.9	15.3	6.8	砂粒 スコリア	普通	濃い赤褐色	濃い赤褐色	
S013	第3029	12	土師器 甕	口縁部破片	(16.8)	-	-	砂粒 スコリア	普通	濃い赤褐色	濃い赤褐色	
S013	第3030	12	土師器 甕	口縁部破片	(14.0)	(5.3)	-	砂粒 スコリア	普通	灰黄褐色	灰黄褐色	
S013	第3032	12	土師器 甕	底部	-	-	6.7	砂粒	普通	濃い赤褐色	濃い赤褐色	
S013	第3032	12	土師器 甕	全体の70%	20.0	(21.7)	-	砂粒	普通	濃い赤褐色	濃い赤褐色	
S014	第3031	12	須恵器 杯	底部分のみ	-	-	7.4	石灰 長石	普通	灰褐色	灰褐色	
S014	第3032	12	土師器 杯	破片	(13.4)	(4.0)	-	砂粒	普通	濃い赤褐色	褐色	内外面赤砂
S014	第3033	12	土師器 杯	口縁部	(13.4)	-	-	砂粒	具	濃い赤褐色	褐色	
S014	第3034	12	土師器 甕	破片	(11.0)	-	-	砂粒	普通	灰黄褐色	濃い赤褐色	
S014	第3035	12	土師器 甕	破片	(12.3)	-	-	砂粒	普通	濃い赤褐色	濃い赤褐色	
S014	第3036	12	土師器 甕	破片	(22.0)	-	-	砂粒	普通	濃い赤褐色	濃い赤褐色	
S015	第3039	1	須恵器 杯	ほぼ定形	14.4	4.1	7.4	砂粒	普通	黒褐色	黒褐色	
S015	第3040	1	須恵器 杯	全体の30%	(12.4)	(4.1)	(6.4)	砂粒 長石散	普通	灰黄色	灰黄色	
S015	第3040	3	土師器 甕	ほぼ定形	13.3	4.3	8.0	砂粒 スコリア	普通	濃い赤褐色	濃い赤褐色	
S015	第3040	4	土師器 杯	ほぼ定形	17.2	5.9	7.0	砂粒 スコリア	具	濃い赤褐色	濃い赤褐色	
S015	第3040	5	土師器 杯	全体の60%	(16.2)	5.4	7.3	砂粒 スコリア	具	明褐色	明褐色	内面黒色処理
S015	第3040	6	土師器 杯	底部分のみ	-	-	7.1	砂粒	普通	明褐色	明褐色	底面に「山田」の彫書
S015	第3040	7	須恵器 甕	胴部の40%	(26.6)	(22.2)	-	砂粒 雲母	具	黒灰褐色	灰褐色	

遺構番号	埋蔵品番号	図号	器種	遺存状況	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	構成	外面色調	内面色調	特徴
SI015	第36008		灰皿器 夾	全体の30%	(23.2)	(15.3)	-	砂粒	普通	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	
SI015	第36009		灰皿器 夾	破片	(20.0)	-	(20.4)	砂粒	普通	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	
SI015	第36010		灰皿器 夾	底部の25%	-	-	(21.8)	砂粒 スコリア	やや不貞	灰褐色	にぶい赤褐色	
SI015	第36011		土師器 夾	破片	(21.0)	-	-	砂粒 スコリア	普通	にぶい褐色	にぶい褐色	
SI015	第36012		土師器 夾	破片	(24.0)	-	-	砂粒	普通	にぶい褐色	にぶい褐色	
SI017	第36011		灰皿器 杯	全体の25%	(10.6)	(4.0)	(6.0)	砂粒 スコリア	貞	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	断面中央灰色、外側暗褐色
SI017	第36012		灰皿器 杯	全体の25%	(13.5)	(3.3)	(7.8)	砂粒	貞	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	
SI017	第36013		灰皿器 杯	底部のみ	-	-	7.0	砂粒	普通	灰褐色	灰褐色	
SI017	第36014	12	土師器 高台付き皿	全体の40%	(12.1)	(4.9)	4.9	砂粒	普通	にぶい褐色	にぶい褐色	内面灰色処理
SI017	第36015		灰皿器 夾	破片	(27.0)	(10.2)	-	砂粒	普通	灰青褐色	にぶい赤褐色	
SI017	第36016		土師器 夾	口縁部破片	(19.5)	(11.9)	-	砂粒	普通	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	
SI017	第36017		土師器 夾	口縁部の30%	(20.0)	(5.9)	-	砂粒	普通	にぶい褐色	にぶい褐色	
SI018	第36011		灰皿器 蓋	破片	(17.8)	-	-	砂粒 長石粒	貞	灰色	灰色	
SI018	第36012	12	灰皿器 蓋	全体の50%	(12.9)	(2.2)	-	砂粒	やや不貞	灰色	灰青褐色	フタミ欠失
SI018	第36013		灰皿器 杯	全体の40%	(13.1)	(3.8)	(8.7)	砂粒	貞	にぶい褐色	にぶい褐色	
SI018	第36014		灰皿器 杯	全体の25%	(12.8)	(3.8)	(8.3)	砂粒	普通	暗灰色	灰青褐色	
SI018	第36015		灰皿器 杯	底部のみ	-	-	7.0	砂粒	普通	灰青褐色	灰青褐色	底部に焼成前の穿孔
SI018	第36016	12	土師器 杯	全体の40%	(12.2)	(4.0)	(6.9)	砂粒	貞	暗灰色	灰青褐色	
SI018	第36017		土師器 夾	底部のみ	-	-	6.6	砂粒	普通	にぶい褐色	にぶい褐色	
SI021	第42011	12	土師器 杯	全体の60%	(12.8)	3.8	7.0	砂粒 スコリア	普通	褐色	褐色	
SI021	第42012	12	土師器 杯	全体の30%	(15.6)	4.9	(8.5)	砂粒 スコリア	普通	にぶい褐色	にぶい褐色	
SI021	第42013		土師器 杯	全体の30%	(11.2)	3.8	(5.2)	砂粒 スコリア	普通	褐色	褐色	
SI021	第42014	12	土師器 高台付き皿	全体の60%	(13.5)	3.2	7.0	砂粒多	普通	明赤褐色	明赤褐色	
SI021	第42015		土師器 高台付き皿	底部のみ	-	-	-	砂粒	普通	褐色	褐色	高台欠失
SI021	第42017		灰皿器 夾	口縁部の50%	(23.2)	-	-	砂粒多	普通	にぶい褐色	にぶい褐色	
SI021	第42018		灰皿器 夾	口縁部の25%	(21.4)	(9.5)	-	砂粒	普通	暗灰色	にぶい褐色	
SI021	第42019		灰皿器 夾	底部の20%	-	-	(18.0)	砂粒	普通	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	
SI021	第42010		土師器 夾	口縁部の25%	(21.6)	(15.8)	-	砂粒	普通	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	
SI021	第42011		土師器 夾	口縁部の20%	(19.0)	(13.0)	-	砂粒	普通	灰褐色	にぶい褐色	
SI021	第42012		土師器 夾	口縁部破片	(20.6)	-	-	砂粒	普通	褐色	褐色	
SI021	第42013		土師器 夾	口縁部の25%	(19.0)	(9.5)	-	砂粒	普通	灰褐色	にぶい褐色	
SI021	第42014		土師器 夾	口縁部の25%	(19.4)	-	-	砂粒	普通	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	
SI022	第44011	13	灰皿器 杯	全体の60%	(13.2)	(3.7)	(9.7)	砂粒	普通	暗褐色	暗褐色	
SI022	第44012	13	灰皿器 杯	全体の25%	(12.8)	(3.9)	(8.7)	砂粒 スコリア	普通	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	
SI022	第44013		灰皿器 杯	全体の25%	(13.6)	(3.9)	(9.8)	砂粒	貞	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	
SI022	第44014	13	灰皿器 杯	全体の70%	13.1	4.5	7.3	砂粒	貞	灰色	灰色	
SI022	第44015		灰皿器 杯	全体の25%	(12.2)	(3.8)	(8.0)	砂粒	貞	灰褐色	灰褐色	
SI022	第44016	13	土師器 杯	全体の40%	(11.6)	(3.8)	(6.9)	砂粒	普通	にぶい褐色	にぶい褐色	
SI022	第44017		灰皿器 蓋	全体の30%	(14.0)	(3.0)	-	砂粒	普通	黄灰色	灰色	
SI022	第44018		土師器 夾	口縁部破片	(17.5)	-	-	砂粒	普通	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	
SI023	第45011	13	灰皿器 杯	全体の45%	(13.5)	(4.0)	9.2	砂粒 雲母	やや不貞	灰タテゾク	灰タテゾク	
SI023	第45012	13	土師器 杯	全体の25%	(12.2)	(4.1)	(7.5)	砂粒	普通	にぶい褐色	にぶい褐色	
SI023	第45013	13	灰皿器 夾	底部のみ	-	-	(15.0)	砂粒	普通	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	
SI023	第45014	13	土師器 蓋	上部の40%	19.4	-	-	砂粒	普通	黒褐色	黒褐色	
SI024	第46011	13	土師器 杯	全体の25%	(12.3)	(3.8)	(7.0)	砂粒多	普通	赤褐色	赤褐色	
SI024	第46012		土師器 蓋	上部の25%	(16.2)	-	-	砂粒	普通	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	
SK030	第15017	13	縄文 漆鉢	底部のみ	-	-	10.8	砂粒	貞	明褐色	褐色	
SK031	第15011	13	縄文 漆鉢	底部	-	-	6.5	砂粒	普通	にぶい赤褐色	暗赤褐色	火熱を受けた可能性有り
SK045	第36011	15	縄文 漆鉢	口縁部	(25.0)	-	-	雲母多	貞	灰青褐色	明褐色	
SK045	第36012	15	縄文 漆鉢	全体の40%	(15.2)	(17.6)	6.8	雲母	貞	褐色	にぶい赤褐色	
SK049	第17013		縄文 漆鉢	底部のみ	-	-	(9.2)	砂粒	貞	にぶい赤褐色	褐色	
SK050	第15011	13	縄文 漆鉢	全体の30%	(18.0)	(16.6)	-	砂粒 スコリア	貞	にぶい赤褐色	黄褐色	
遺構外	第36011	13	土師器 鉢	全体の35%	(14.3)	9.3	(9.5)	砂粒	貞	黄褐色	黄褐色	
遺構外	第36012		灰皿器 杯	全体の20%	(11.5)	3.8	(7.4)	砂粒	貞	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	
遺構外	第36013		灰皿器 杯	全体の25%	(11.9)	4.0	(8.0)	砂粒	貞	暗灰色	暗灰色	
遺構外	第36014		灰皿器 杯	底部のみ	-	-	6.6	砂粒	貞	灰色	灰色	
遺構外	第36015		灰皿器 杯	底部+底部	-	-	8.0	砂粒	貞	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	腹に転用
遺構外	第36016	13	灰皿器 瓶	口縁部の10% 底部の40%	(31.1)	(28.0)	(14.0)	細砂粒	貞	にぶい赤褐色	暗灰色	

第4章 鉢ヶ谷遺跡（2）の動物遺体

1 概要

縄文中期中葉・加曾利E1式期の小竪穴1基で貝層を検出した。底面付近の2か所に小規模な純貝層ブロックを形成しており、A・Bの名前をつけ全量を採取した。貝殻にはカルシウム状の付着物がきわめて多く、とくに多い部分では貝殻同士が付着して分離できないものもみられた。貝殻の保存状態は良好である。貝類の同定には、同時に作業を進めている養安寺遺跡出土貝類標本を用いており、分析方法も同報告書の記載のとおりである。1試料にすぎないが、隣接地域には養安寺遺跡や羽戸遺跡など同時期に貝層を形成した遺跡が存在しており、遺跡群内での比較検討が可能である。なお、貝層からは貝類以外の動物遺体や植物遺体は検出しておらず、貝サンプルから検出した貝類の分析結果がすべてとなる。

2 貝種の分析結果

(1) 貝種組成

同定された貝類は海産巻貝類2種、二枚貝類2種、汽水産二枚貝類1種である。チョウセンハマグリが中87.5%を占めており、これにダンベイキサゴを加えた2種がほとんどを占める。フジノハナガイはきわめて小形の貝であるが、cut1でややまとまっているので、食用に採取されたことは明らかである。以上の3種は、現在も九十九里海岸の主要種であり、貝漁は外洋域で行われたことが明らかである。これ以外のツメタガイとヤマトシジミについては、ごくわずかであり、積極的に採取されたとは言いきれない。

(2) 大きさ

主要3種を計測した。チョウセンハマグリは養安寺遺跡の中期のデータに近似するが、やや小さめである。ダンベイキサゴは大きなものを選択的に採取しており、養安寺遺跡に比べてやや大きく、粒ぞろいである。フジノハナガイは、最大でも殻長が20mmを上回らない小さな貝であり、成貝が中心である。養安寺のデータに近似し、やや小さめである。

(3) 「標準貝類相」資料

貝種組成と計測値分布のデータにより、貝サンプル1リットルの平均的な内容を示すものである。

第5表 貝類同定結果

貝種	cut1	cut2	全体
ダンベイキサゴ	489	177	666
ツメタガイ	1	4	5
フジノハナガイ	228	38	266
チョウセンハマグリ	4362	2187	6549
ヤマトシジミ	1		
合計	5080	2406	7486
水洗前堆積 (リットル)	34.0	24.0	58.0
水洗前重量 (kg)	26.8	17.0	43.8
水洗後重量 (kg)	15.0	8.1	23.1
微小貝	1/3本	1/3本	
土器片	6	3	

第6表 貝種組成

貝種	cut1	cut2	合計	%
チョウセンハマグリ	4362	2187	6549	87.5%
ダンベイキサゴ	489	177	666	8.9%
フジノハナガイ	228	38	266	3.6%
その他	2	4	6	0.1%
合計	5081	2406	7487	100.0%
その他内訳				
ツメタガイ	1	4	5	
ヤマトシジミ	1		1	

1リットルあたり、チョウセンハマグリ113個、ダンベイキサゴ11個、フジノハナガイ5個が当遺跡の標準貝類相であり、算出方法を第8表に示した。図版20はこのデータに合わせて再現した標本であり、保管資料とする。ただし、貝殻は養安寺遺跡の廃土から標本用に採取したものを使用している。

(4) まとめ

貝類の利用は、現在も九十九里浜に多産するチョウセンハマグリ、ダンベイキサゴ、フジノハナガイの3種が中心であった。貝種組成や大きさは、近接する養安寺遺跡、羽戸遺跡の中期中葉のデータとよく似ており、貝種や大きさは、遺跡の規模や性格等による大きな違いは認められなかった。

第7表 貝類計測値分布

チョウセンハマグリ殻長		ダンベイキサゴ殻長		フジノハナガイ殻長	
殻長mm	個体数	殻長mm	個体数	殻長mm	個体数
-20.0		-20.0		-9.0	1
-25.0	29	-25.0	3	-10.0	1
-30.0	223	-30.0	28	-11.0	1
-35.0	98	-35.0	220	-12.0	6
-40.0	17	-40.0	47	-13.0	48
-45.0	13	-45.0		-14.0	58
-50.0	16	-50.0		-15.0	25
-55.0	4	-55.0		-16.0	2
-60.0		-60.0		-17.0	
試料数	400	試料数	298	試料数	142
平均	25.39	平均	32.79	平均	13.23
標準偏差	5.72	標準偏差	2.57	標準偏差	0.98
最小	16.75	最小	20.51	最小	8.81
最大	49.77	最大	38.12	最大	15.25

第8表 「標準貝類相」

チョウセンハマグリ				ダンベイキサゴ				フジノハナガイ						
殻長mm	全体	%	標準貝	殻長mm	全体	%	標準貝	殻長mm	全体	%	標準貝			
-25.0	29	7.3%	8.19	8	-25.0	3	1.0%	0.11	-9.0	1	0.7%	0.04		
-30.0	223	55.8%	63.00	63	-30.0	28	9.4%	1.03	1	-10.0	1	0.7%	0.04	
-35.0	98	24.5%	27.69	28	-35.0	220	73.8%	8.12	8	-11.0	1	0.7%	0.04	
-40.0	17	4.3%	4.80	5	-40.0	47	15.8%	1.73	2	-12.0	6	4.3%	0.21	
-45.0	13	3.3%	3.67	4	-45.0		0.0%	0.00		-13.0	48	34.3%	1.71	2
-50.0	16	4.0%	4.52	4	-50.0		0.0%	0.00		-14.0	58	41.4%	2.07	2
-55.0	4	1.0%	1.13	1	-55.0		0.0%	0.00		-15.0	25	17.9%	0.89	1
計	400	100.0%	113	113	計	298	100.0%	11	11	計	140	100.0%	5	5

貝種	全体	標準貝層
チョウセンハマグリ	6549	113
ダンベイキサゴ	666	11
フジノハナガイ	266	5
合計		129

「標準貝類相資料」は、貝サンプルの貝種組成から、サンプル1リットルあたりの平均的な内容を示すもの

水洗前体積 58.0リットル

第5章 若司谷遺跡

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過

若司谷遺跡の調査は、東日本高速道路株式会社による首都圏中央連絡自動車道建設事業に伴うもので、今回、開発区域中にある遺跡範囲が工事の影響を受ける事業として計画された。千葉県教育員会と東日本高速道路株式会社との間でその取り扱いについて、慎重に協議した結果、事業の性格上やむを得ず記録保存の措置を講ずることになり、公益財団法人千葉県教育振興財団が発掘調査を実施することとなった。

若司谷遺跡の発掘調査と整理作業の期間及び調査体制は以下のとおりである。

平成21年度

発掘作業

期 間 平成21年2月16日～平成21年2月27日

組 織 調査研究部長 大原正義 中央調査事務所長 折原 繁
副所長 池田大助

内 容 上層 256㎡/2,632.7㎡ (確認調査)
塚1基

平成27年度

整理作業

期 間 平成27年10月1日～平成27年10月15日
平成28年2月1日～平成28年2月15日

組 織 整理課長 岸本雅人
主任上席文化財主事 麻生正信 井上哲朗

内 容 水洗・注記から原稿執筆

平成28年度

報告書印刷・刊行

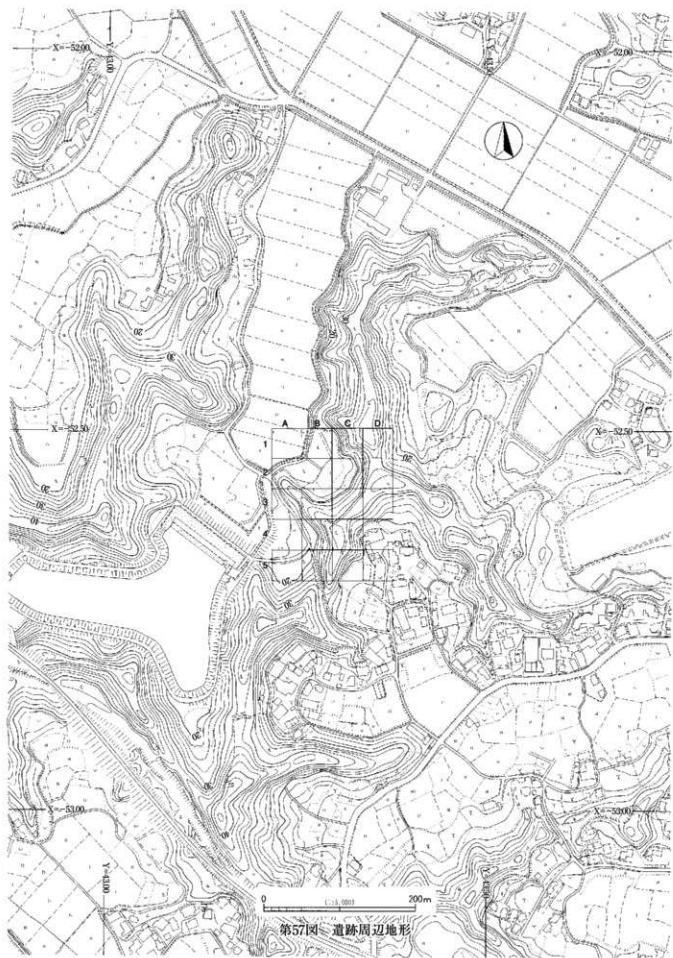
期 間 平成28年4月1日～平成28年12月22日

組 織 整理課長 山口典子
上席文化財主事 小林清隆

内 容 報告書印刷・刊行

2 調査の方法

調査に先立って、調査対象範囲全域に公共座標に合わせたグリッドの設定を行なった。方眼網は世界測地系に基づいて設定し、基点を $X = -52.500$ 、 $Y = 43.125$ とした。そこから東に向かって40mごとにアルファベットでA・B・C・Dと付し、南へは算用数字で1・2・3・4とし、これを組み合わせて大グリッド名として、さらに大グリッドの中を4m方眼の小グリッドで100分割した。基点は1A-00である。





A

B

C

D

1

2

3

4

5

第58図 調査区とトレンチ設定状況

0 (1:1,000) 60m

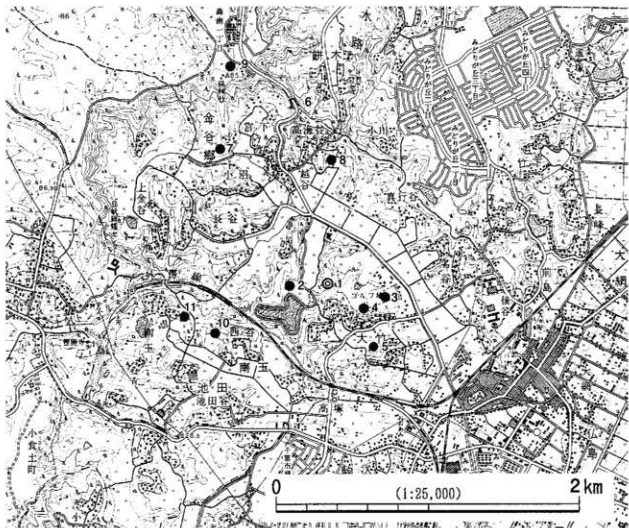
確認調査は、等高線に直交して地点を選び、幅2m、長さ20mを3本、長さ16mを1本の計4本、等高線に平行して幅2m、長さ18mと長さ24mを計2本のトレンチを設定した。各トレンチでは地山面まで掘り下げて遺構・遺物の有無を確認した。

塚は、等高線コンター測量を実施した後、地形に合わせて幅1m、長さ9mのトレンチを1本設定した。

第2節 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

若司谷遺跡は、大網白里市金谷郷962番1ほか^{（1）}に所在する。太平洋に注ぐ南白亀川支流の金谷川により開析された丘陵の支尾根の北西方向に開けた平坦面に所在する。大きさは、北東から南西方向に65m、北西から南東方向に30m程を測り、南東から北西方向に緩やかに傾斜している。当該地は若司谷遺跡として、『千葉県埋蔵文化財分布地図』に搭載されており、包蔵地として、奈良・平安時代の土師器の分布が記録されている。JR外房線大網駅から約500mと至近にあり、周辺地区は住宅地として開発され、市街地化されている。当該地は、当地方特有の地質である笠森層の泥岩層が卓越し、河川により開析された丘陵地が尾根状に細く残されているため、平坦地が少なく市街地化はされていない。



第59図 周辺遺跡分布

2 歴史的環境 (第59図)

周辺には、千葉県埋蔵文化財分布地図によると谷を挟んだ対岸に、2. 殿谷遺跡 (奈良・平安)、後背の丘陵地を挟んで、3. 重田前遺跡 (奈良・平安)、4. 上向田遺跡 (奈良・平安)、5. 稲荷下遺跡 (奈良・平安) などが点在し、包蔵地として記録されている。また上流部には、古墳時代の横穴35基を数える6. 餅木横穴群、7. 反町遺跡 (奈良・平安)、8. 打越遺跡 (奈良・平安)、9. 馬場崎遺跡 (縄文後・晩期、奈良・平安、中世)、10. 増角遺跡 (奈良・平安)、11. 東前遺跡 (縄文後期、奈良・平安) 等が点在する。本遺跡から2kmほど北方には平坦な台地が存在し、台地上には大綱山田台遺跡群、養安寺遺跡、鉢ヶ谷遺跡、羽戸遺跡など多くの遺跡が所在し、縄文時代から奈良・平安時代にかけての大集落が展開している。若司谷遺跡のある当該地区は、縄文時代中期以降、海退に伴って急速に海岸線に平行する砂堤帯が形成され、九十九里平野ができ始めたか所に所在する。台地上の集落から、丘陵のやせ尾根下にわずかにある平坦面に降りてきた奈良・平安時代の新田開発に伴って、居住域が拡大・形成された地区であることが推定される。

第3節 遺構と遺物

1 遺構 (第60・61図、図版22～24)

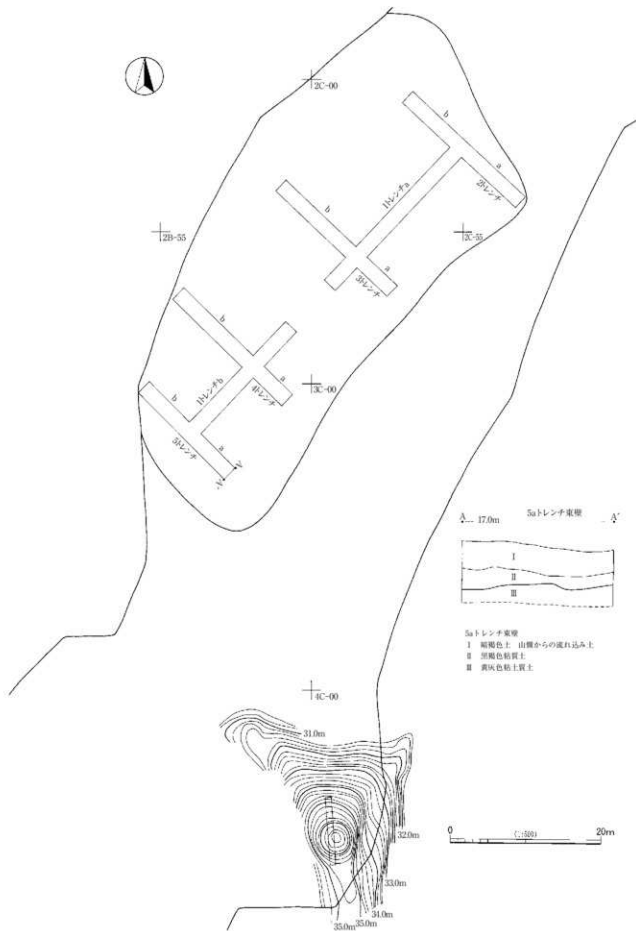
若司谷遺跡が所在する丘陵の細尾根下の平坦面に、等高線に直交する方向で4本、等高線に平行する方向で1本のトレンチを設定し、遺構・遺物の有無を確認した。1トレンチは、3B-16グリッドから北東方向へ2B-98グリッドまで長さ18m、幅2mで設定した。次に2C-60グリッドから北東方向へ2C-24グリッドまで長さ24m、幅2mで設定した。2トレンチは、2C-03グリッドから南東方向へ2C-36グリッドまで長さ20m、幅2mで設定した。3トレンチは、2B-39グリッドから南東方向へ2C-62グリッドまで長さ20m、幅2mで設定した。4トレンチは、2B-75グリッドから南東方向へ3C-09グリッドまで長さ20m、幅2mで設定した。5トレンチは、3B-04グリッドから南東方向へ3B-27グリッドまで長さ16m、幅2mで設定した。

その結果、竪穴住居などの遺構は検出されなかった。このことから、居住域ではないことが確認された。しかし、遺物が出土したことから、畑作や稲作に伴って当時の人々が生活空間として利用していた区域であることが確認された。

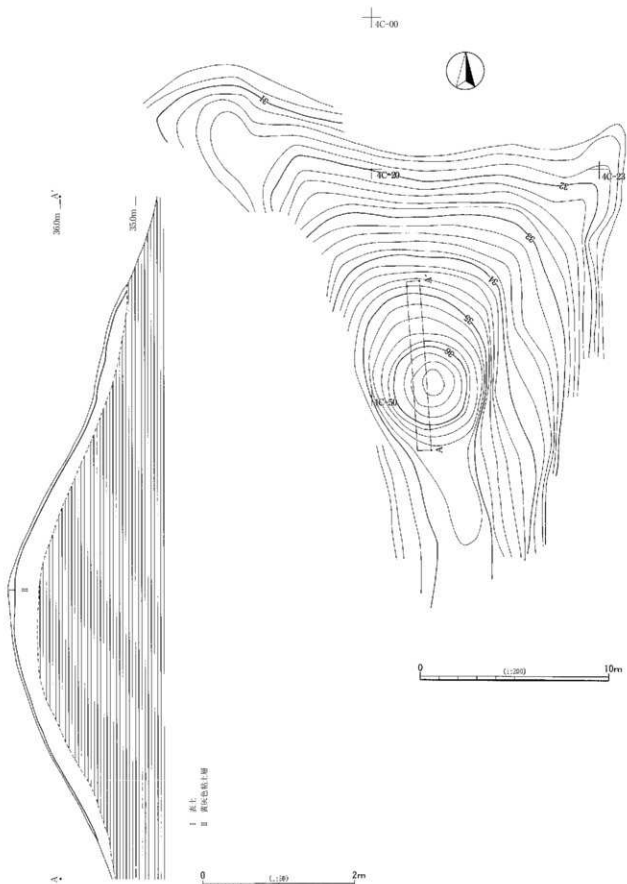
次に、若司谷遺跡から南東方向へ45m程離れた丘陵頂部、4C-40グリッド付近で塚の調査を実施した。20cm間隔で等高線測量を実施し、塚周辺の微細地形を記録した。現地状況は、見かけ上高さ2m、直径12m程の円形の塚に見え、塚の頂部を通るように4C-30グリッドから南北方向に4C-50グリッドまでトレンチを1本、長さ9m、幅1mで設定した。土層断面観察によると頂部に10cmほど、斜面部では5cmほどの表土層が確認された。頂部では周辺より5cmほど、わずかに盛土が確認された。丘陵頂部の自然地形を利用して、塚状に整形している可能性があるが、明確な地山整形は認められなかった。また、遺物は確認されなかった。

2 遺物 (第62図、図版24)

図示できた遺物は、わずかに8片と少ない。1トレンチa地点及び2トレンチからと、調査区北側に偏って、出土している。出土した土器は、縄文時代から中世までの時期で幅広いものである。

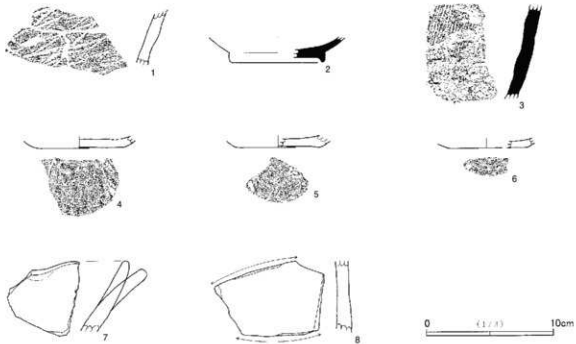


第60図 平坦部・塚トレンチ設定状況



第61図 塚調査状況

1は、縄文土器で、表面に「Z」字型に連続して貝殻腹縁文が施文される深鉢の胴部破片である。縄文時代前期、黒浜式期に比定される。1トレンチa地点から出土した。2は、須恵器高台付杯底部破片である。底径7.4cm（復元）、器高2cm（現存）を測る。色調は、内外面とも2.5Y7/2灰黄色～2.5Y7/3 浅黄色を呈する。調整は、底部外周ナデ、底部回転系切り後、付け高台を施す。見込み外周に灰釉の拭き取り痕がある。1トレンチa地点から出土した。3は、須恵器甕胴部破片である。色調は、5Y3/2オリーブ黒色を呈する。調整は内外面を敲いている。胎土に雲母粒を含むことから常陸産の可能性がある。1トレンチa地点から出土した。4は、土師器杯底部破片である。底径7cm、器高0.9cm（現存）を測る。平安時代に比定される。色調は、10YR6/6明黄橙色を呈する。内外面ナデ、底部回転系切り、底部外周手持ちヘラケズリを施す。1aトレンチから出土した。5は、土師器杯底部破片である。底径7.2cm、器高0.9cm（現存）を測る。平安時代に比定される。色調は、外面10YR7/4にぶい黄橙色～7.5YR6/4にぶい橙色、内面10YR7/4にぶい黄橙色を呈する。底部回転系切り無調整、内外面ナデを施す。2トレンチから出土した。6は、土師器カワラケ底部破片である。中世に比定される。底径6.6cm（復元）、器高0.8cm（現存）を測る。色調は、外面10YR6/4にぶい黄橙色、内面10YR5/4にぶい灰黄褐色を呈する。底部回転系切り、内外面ナデを施す。1トレンチa地点から出土した。7は、中世常滑産の片口鉢口縁部破片である。13世紀後半頃の所産である。色調は、2.5Y3/2黒褐色～2.5Y5/2暗灰黄色を呈する。調整は内面ナデを施す。2トレンチから出土した。8は、中世常滑産の甕胴部破片である。転用砥石として再利用されている。色調は、外面7.5YR5/3にぶい褐色、内面5Y7/2灰白色～5Y5/2灰オリーブ色を呈する。1トレンチa地点から出土した。



第62図 出土遺物

第6章 まとめ

第1節 鉢ヶ谷遺跡

鉢ヶ谷遺跡については平成5年～平成8年にかけて、遺跡の主要部分である83,833㎡を対象に調査が行われている。今回の調査区は、主要部分Ⅰ区の北東に隣接する地区にあたる。Ⅰ区での成果は、縄文時代の陥穴34基、竪穴住居1軒、平安時代を中心とする竪穴住居175軒、掘立柱建物125棟等である。ここでは、鉢ヶ谷遺跡（2）における成果を、Ⅰ区との関わりを踏まえて時代順にまとめてみたい。

縄文時代 早期に構築されたと推定される楕円形型陥穴1基が検出された。周辺での陥穴は高密度で検出され、大部分が溝型の形態であることが指摘されている。それらとは構築時期が異なる可能性がある。

中期では加曾利EⅠ式期の竪穴住居が1軒検出された。遺構の保存状態が不良で、炉に埋設されていた深鉢から時期が判明している。Ⅰ区で検出された竪穴住居は加曾利EⅡ式期に比定されるので、時期には隔たりがある。また、中期の小竪穴が8基検出され、いずれも加曾利EⅠ式期やそれよりやや古く位置づけられる。中期の遺構は調査区の東側に寄って検出されており、東側に未調査の平坦部が存在することから、そこに遺構が展開している可能性がある。竪穴住居や小竪穴が営まれる時期には、遺跡の北側に入る谷を挟んで北側に立地する羽戸遺跡や、南側に所在する養安寺遺跡¹⁾での活動が盛んになっており、その中間に展開した小規模な集落と推測される。

後期と考えられる竪穴住居が2軒検出された。遺構の保存状態が不良のため、住居構造から後期と判断したが、後期に帰属するとしたらこれまでの調査では検出していない遺構となる。遺構外からは加曾利B式や、Ⅰ区では安行1式・2式も出土しているため、この時期に帰属する可能性が大きい。

奈良・平安時代 この地での活動が最も盛んになる時代である。竪穴住居は21軒検出され、遺跡の縁辺部まで居住域が拡がっていたことが明らかになった。まずこの21軒を、下記のようにⅠ期～Ⅳ期の時期区分にしたがい、それぞれを帰属時期に充てておきたい。

Ⅰ期 8世紀代 SI(001)・002・004・005・006・023

Ⅱ期 9世紀前葉 SI014・007・(016)・018・020・022

Ⅲ期 9世紀中葉 SI009・017・024

Ⅳ期 9世紀後葉 SI008・(012)・013・015・(019)・021 () 付きは推定

遺跡全域では集落の開始時期は7世紀の後半からで、最盛期は9世紀代という傾向がすでに示されていたが、遺跡の北東端における状況も大略同様であった。竪穴住居は各時期とも基本的にカマドを北側壁に設け、Ⅰ期からⅢ期にかけては正方形に近い平面形態で、対角線上に柱穴を配置した構造が一般的に採用されている。SI017の1軒については、東側と北側にカマドが設置されているが、例外といえる。Ⅳ期には竪穴住居が小型化の傾向をみせる。SI013・015は平面形態が隅丸方形となり、一辺の規模が3.5m以下となっている。Ⅰ期～Ⅳ期にわたりカマドの対向側に入口に伴う梯子穴が設けられている。

Ⅰ期～Ⅳ期の時期区分は、出土した土器類の特徴によっているので、各期の特徴を図示しておきたい。Ⅰ期では非ロクロの土師器杯と須恵器杯が伴う。非ロクロの土師器杯は体部外面がヘラケズリで調整されている特徴をもつ。Ⅱ期では非ロクロの土師器杯からロクロ使用の土師器杯が加わり、須恵器杯には在地産が含まれる。また、須恵器の杯蓋も出土している。Ⅲ期ではロクロ使用の土師器杯や須恵器杯が出土し

ている。杯は口径と底径の差が大きくなる傾向が認められる。Ⅳ期では土師器皿や土師器高台付き皿が器種の中に加わる。

土器には墨書や刻書が記されたものが出土している。判読可能な文字はSI015から出土した杯に墨書された「山田」の1点である。「山田」は周辺遺跡からも多数出土することが知られている。

土器以外の遺物ではSI002から出土したクルル鉤が目目される。竪穴住居での使用とは考えがたく、別の施設で使用するため、保管の状態であったと推測される。

以上成果の一部を紹介し鉢ヶ谷遺跡のまとめとしたい。

第2節 若司谷遺跡

若司谷遺跡では、縄文時代前期にさかのぼる黒浜式期の土器が出土した。周辺では、縄文時代に所属する遺物が出土していないことから新しい知見となる資料が増えたことになる。

当遺跡から南へ10kmほど離れた茂原市川代遺跡では、丘陵崖面から1km地点の砂堤帯上で縄文時代中期加曾利E式期の竪穴住居跡が発掘されている。それよりも古い時代の前期以降には、気候の寒冷化に伴って、海岸線が下降していき、丘陵崖面と平行に砂堤帯ができ、九十九里平野が形成される頃となるのであるが、当遺跡から南東方向へ1.5km下流は丘陵下の砂堤帯が見える地点であり、丸木舟などを利用して、縄文人の生活圏が九十九里平野砂堤帯と堤間湿地帯におよんでいたことが窺える。

一番遺物の出土量の多い時代は、奈良・平安時代であることから、台地上の集落から丘陵のやせ尾根下にわずかにある平坦面に降りてきた、奈良・平安時代の新田開発に伴って、居住域が形成されたことが窺える。当遺跡の周囲の遺跡からもわずかな平坦面に奈良・平安時代の土師器が多く散見され、同様に台地下の平坦面を生活圏としていた様相が見える。

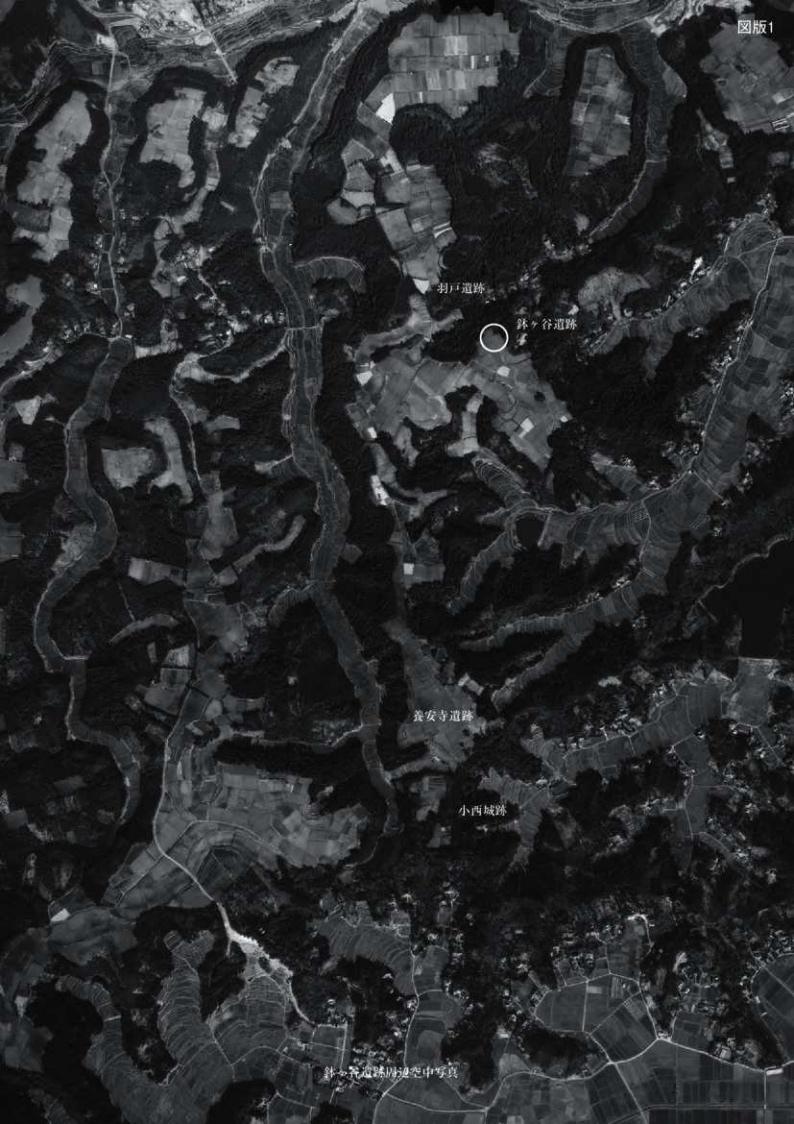
次に、丘陵尾根上の塚の調査では、見かけ上はきれいな円形の塚の形状を呈し、地形測量からもきれいな同心円状の等高線が観測されたことから、塚状の半円球状の地形の盛り上がり裏付けされた。しかし、明確な、塚裾部の地山整形、墳頂部への盛土による造成が認められなかったことから、塚である可能性は低いものといわざるを得ない。また、遺物も出土していないことから、周辺は当該時代の生活圏である可能性は低いと思われる。

注1 平成29年3月に「首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書32 一東金市養安寺遺跡・大網白里市養安寺遺跡—」報告書刊行予定。

引用・参考文献

- 小高春雄 1986 「第1章 原始・古代」『大網白里町史』大網白里町
- (財)山武郡市文化財センター 2000 『小野山田遺跡群Ⅰ -鉢ヶ谷遺跡-』
- (財)山武郡市文化財センター 2001 『小野山田遺跡群Ⅱ -羽戸遺跡-』
- (財)千葉県文化財センター 2001 『茂原市川代遺跡 -河川激甚災害対策阿久川調節池埋蔵文化財調査報告書-』
- (財)千葉県教育振興財団 2012 『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書16 -東金市羽戸遺跡第1地点・第2地点-』

写 真 图 版



羽戸遺跡

鉢ヶ谷遺跡

養安寺遺跡

小西城跡

鉢ヶ谷遺跡周辺空中写真



1. (2) 地区完了全景 北側



2. (2) 地区完了全景 中央部







1. SI004



2. SI004遺物出土状況



3. SI006



4. SI006 (1)



5. SI006 (2)



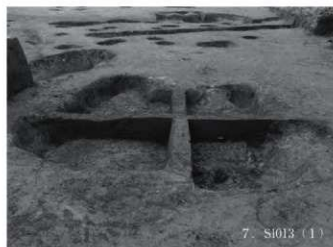
6. SI006録出土状況



7. SI007 (1)



8. SI007 (2)





1. SI013遺物出土状況



2. SI011



3. SI015 (1)



4. SI015 (2)



5. SI015遺物出土状況



6. SI015カマド



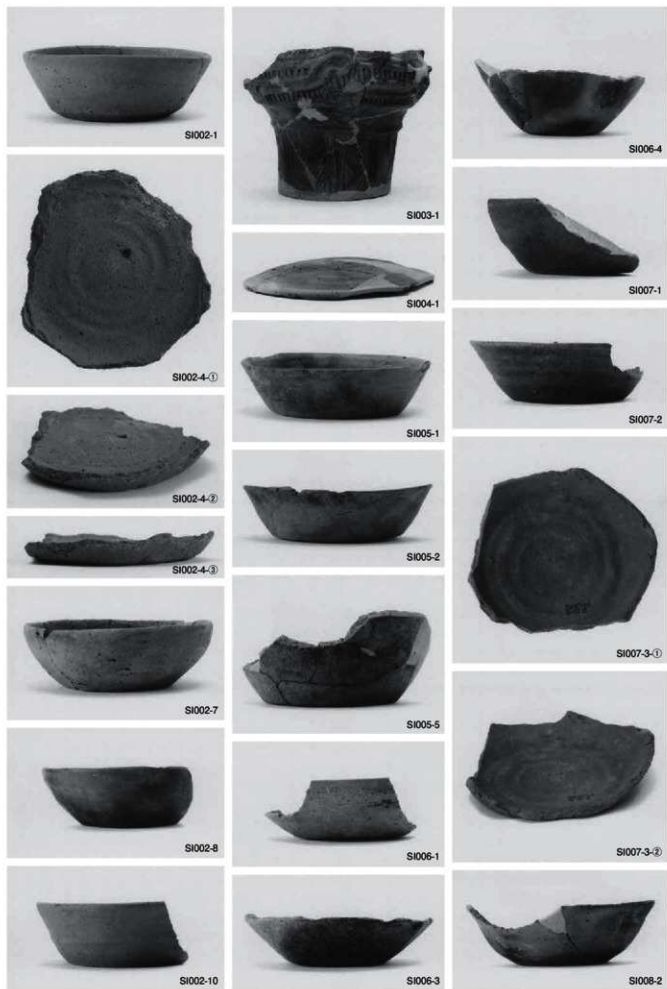
7. SI017



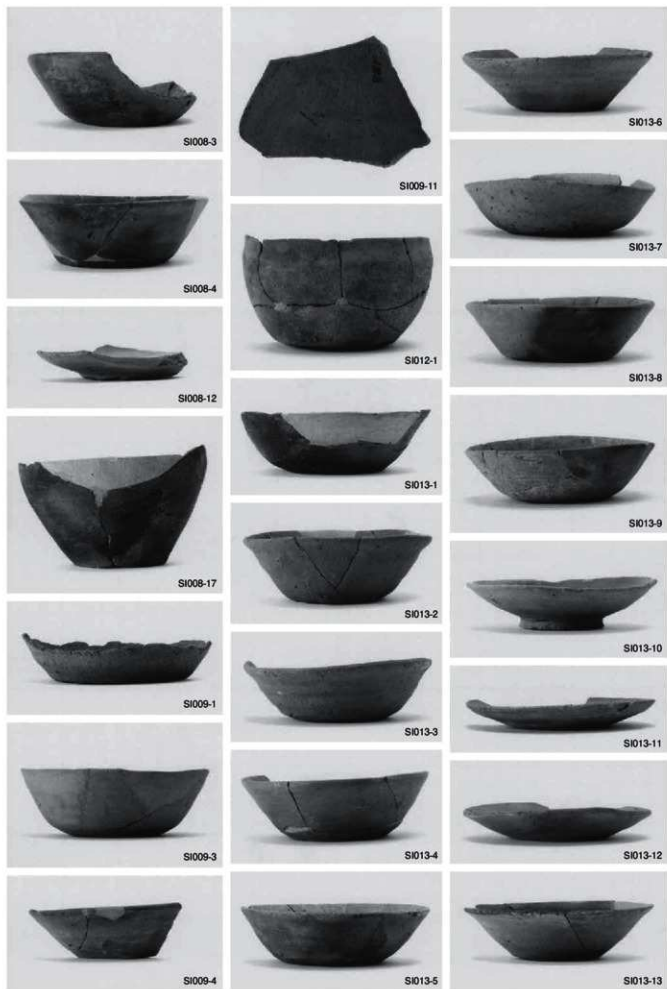
8. SI018



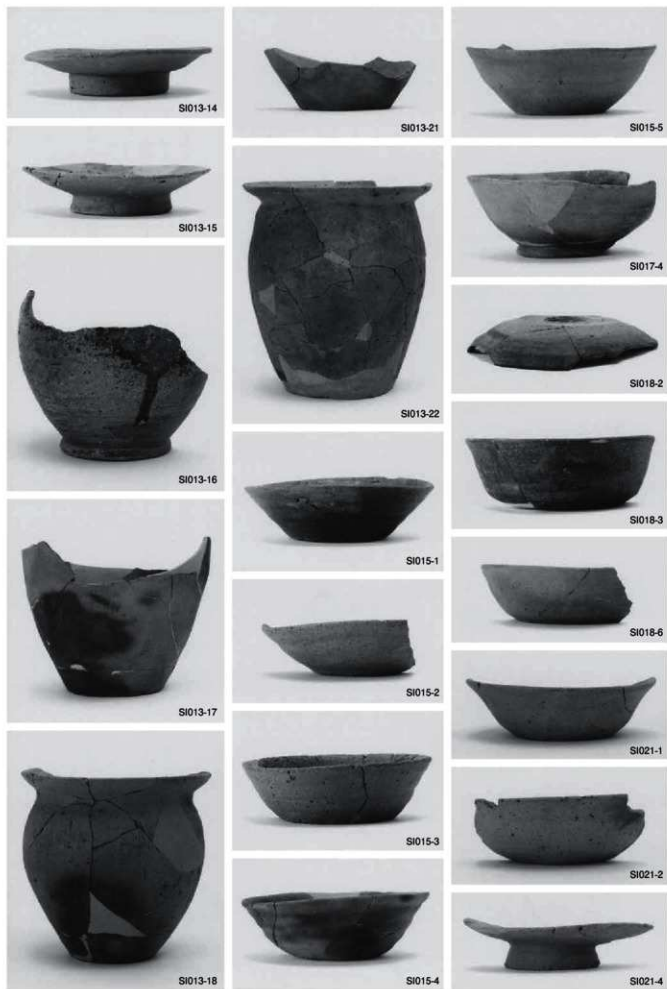




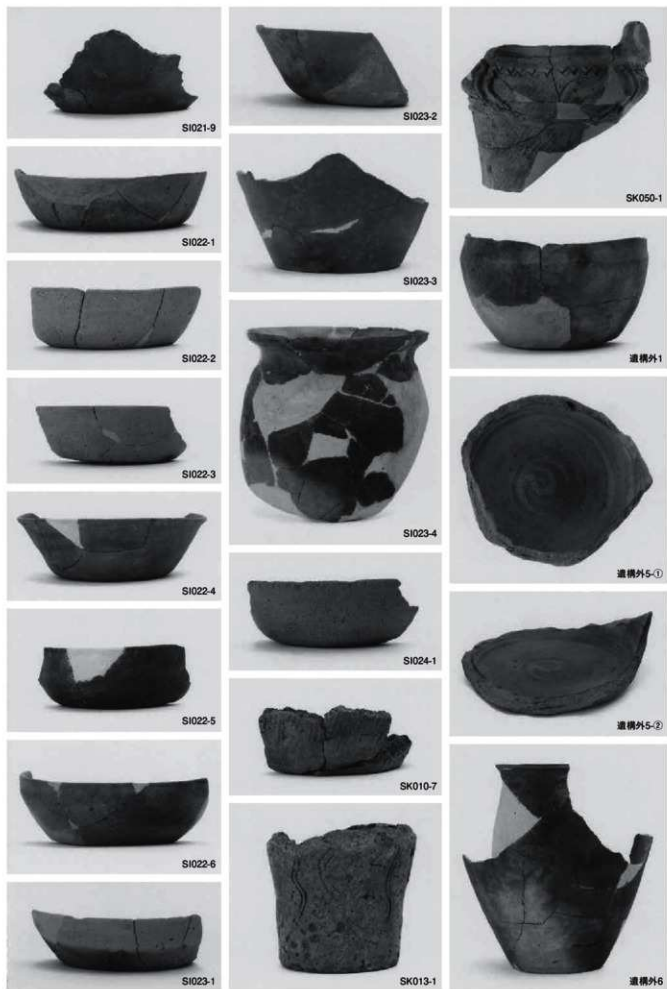
出土土器(1)



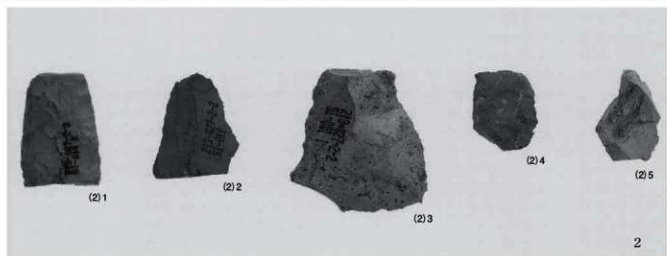
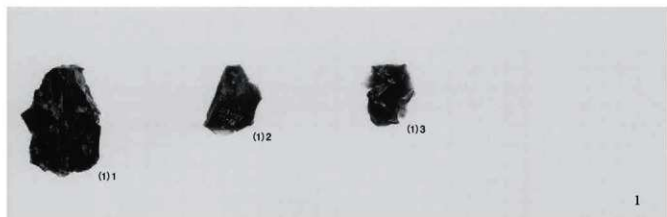
出土土器(2)



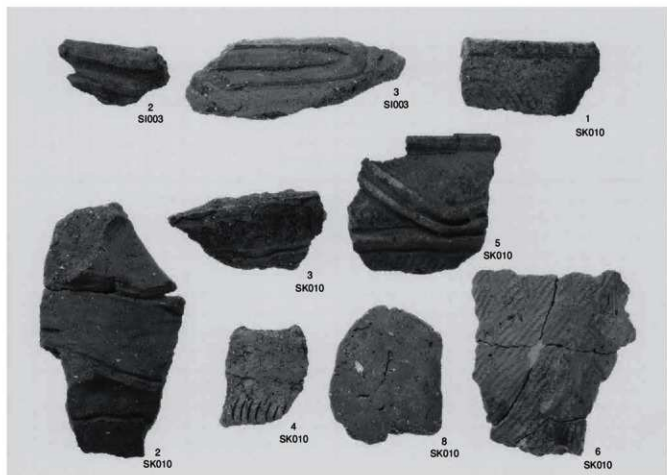
出土土器 (3)



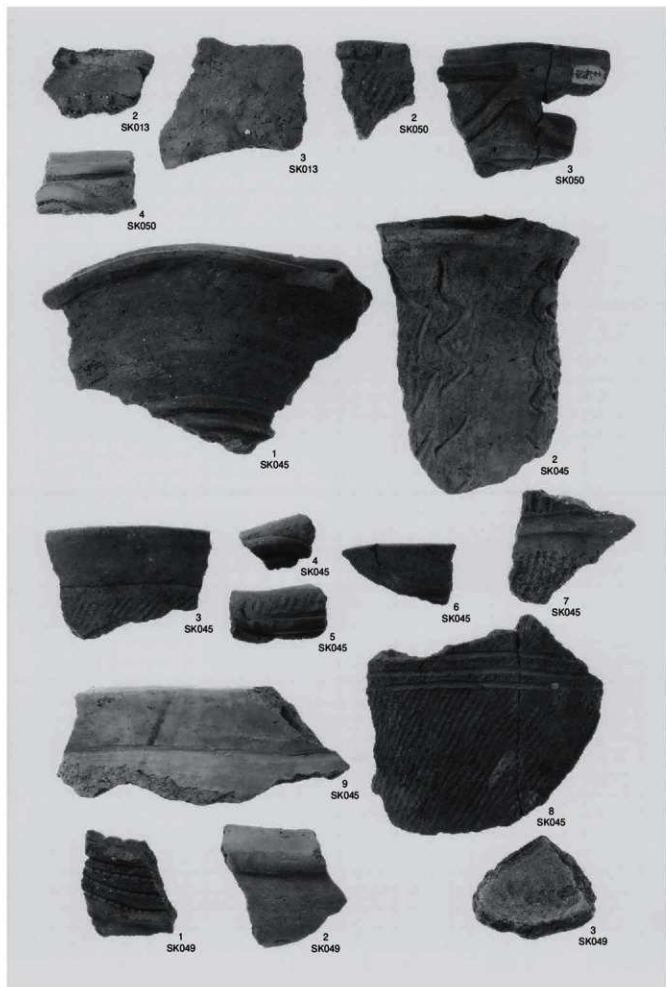
出土土器 (4)



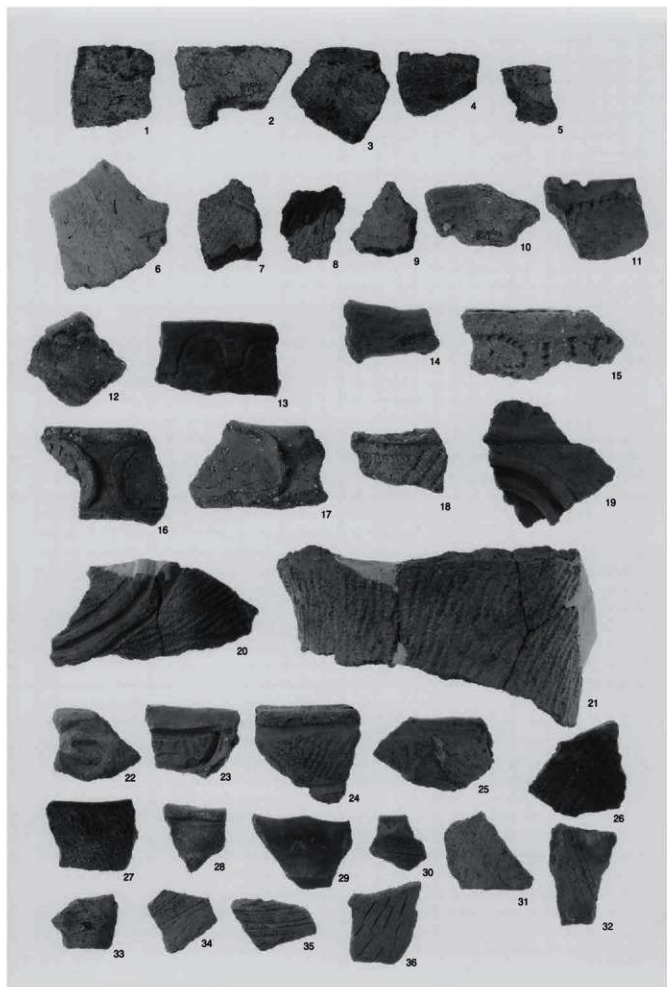
1. (1) 区旧石器 2. (2) 区旧石器



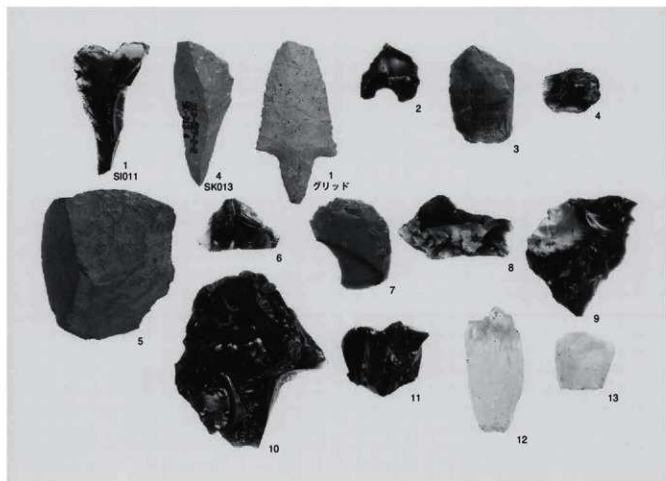
3. 縄文土器 (1)



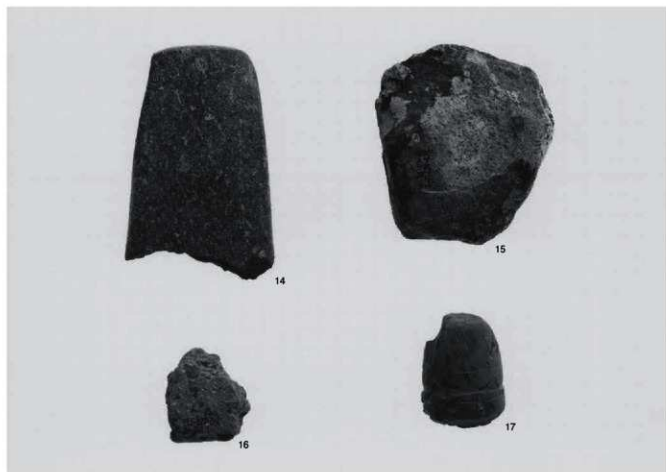
縄文土器 (2)



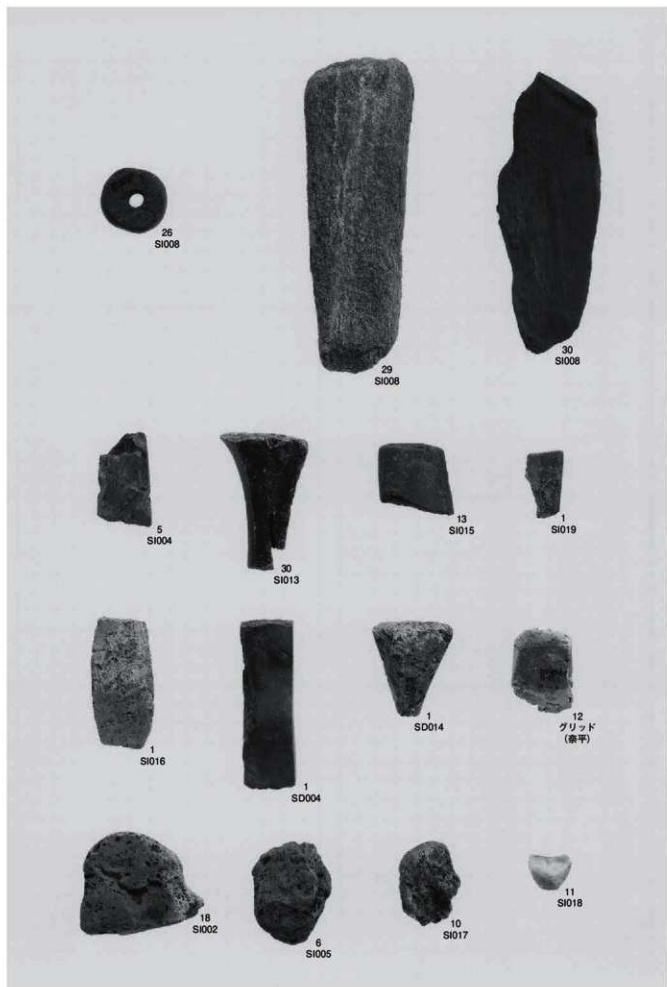
遺構外出土縄文土器



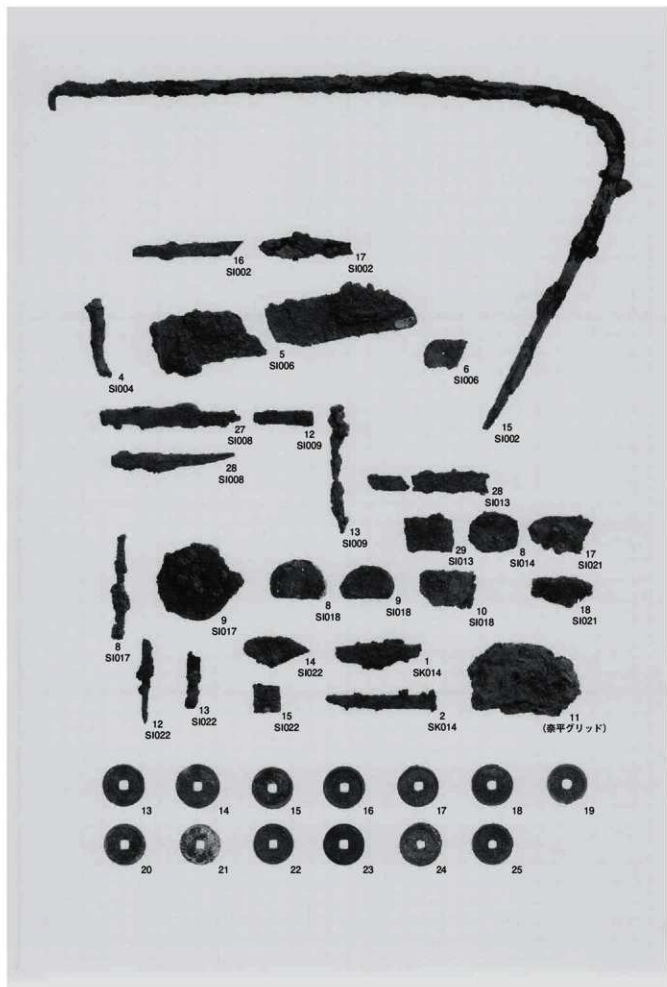
1. 石器 (1)



2. 石器 (2)



石製品



金蔵製品・銭貨



SK045「標準貝類相」



若可谷遺跡

若可谷遺跡周辺空中写真





1. 調査区近景①



2. 調査区近景②



3. 調査状況①



4. 調査状況②



5. 第1トレンチ



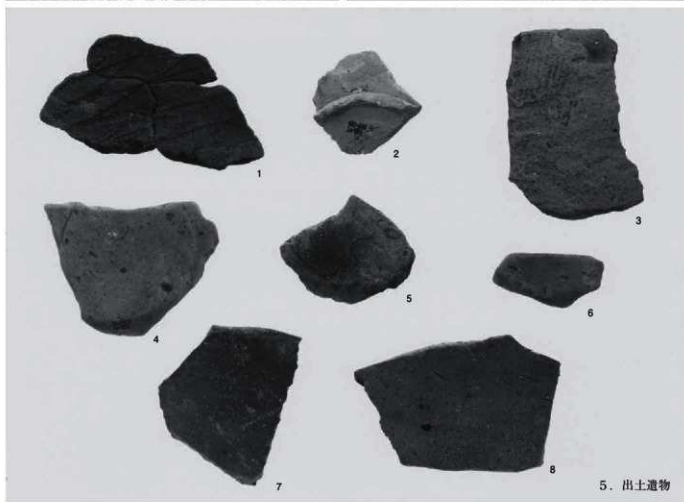
6. 第3トレンチ



7. 第4トレンチ



8. 第5トレンチ



報 告 書 抄 録

ふりがな	しゅとけんちゆうおううれんらくじどうしゃどうまいぞうぶんかさいちようさほうこくしよ							
書名	首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書							
副書名	東金市鉢ヶ谷遺跡(1)・(2)、大網白里市若司谷遺跡							
巻次	33							
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告							
シリーズ番号	第760集							
編著者名	麻生正信 小林清隆							
編集機関	公益財団法人千葉県教育振興財団 文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2 TEL.043-424-4848							
発行年月日	西暦2016年12月22日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
鉢ヶ谷遺跡 (1)	東金市小野字岡ノ 谷1195-1ほか	12213	027(1)	35度 33分 43秒	140度 19分 20秒	20081117 ～ 20081128	870㎡	道路建設に伴う埋蔵文化財調査
鉢ヶ谷遺跡 (2)	東金市小野1182-1 ほか	12213	027(2)	35度 33分 43秒	140度 19分 13秒	20100301 ～ 20100330 20100407 ～ 20100729	6,606.4 ㎡	
若司谷遺跡	大網白里市金谷郷 字殿谷962-1ほか	12402	010	35度 31分 18秒	140度 18分 50秒	20090216 ～ 20090227	2,632.7 ㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
鉢ヶ谷遺跡 (1)	包蔵地	旧石器時代	なし		剥片			
鉢ヶ谷遺跡 (2)	包蔵地 集落跡	縄文時代	竪穴住居3軒(中期1軒、 後期3軒) 陥穴1基 小竪穴8基		縄文土器(早期、中期、後期) 石器(有舌尖頭器、石鏃、 磨製石斧、楔形石器、剥片、 磨石) 石製品(石棒) 貝類		加曾利E1式期の竪穴住居 と、前後する時期の小竪穴 8基を検出。小竪穴の1基 から貝層を検出。	
	包蔵地 集落跡	奈良・ 平安時代	竪穴住居21軒 掘立柱建物1棟 土坑28基 溝19条		土師器、須恵器 鉄製品(刀子、紡錘具、曲 刃鎌、穂摘鎌、クルル鉤) 銅帯 石器・石製品(紡錘車、砥石)		大規模な集落の北東部地区 の調査。8世紀～9世紀後 葉に比定される竪穴住居を 検出。ほぼ完存するクルル 鉤が出土。	
若司谷遺跡	包蔵地 塚	中世	なし		カワラケ 陶器		円形の塚は自然地形を整形 した可能性がある。	
要 約	<p>鉢ヶ谷遺跡(1)では、上層遺構は検出されず、下層の確認調査で剥片が出土した。</p> <p>鉢ヶ谷遺跡(2)では、縄文時代中期後半の竪穴住居と小竪穴を検出した。竪穴住居は加曾利E1式期に比定され、小竪穴は中韓式期から構築されている。近隣に所在する羽戸遺跡や養安寺遺跡の大規模な中期集落と同時期の小規模集落として注目される。奈良・平安時代については、遺跡の北東端部の状況を明らかにした点大きい。竪穴住居は9世紀が主体になり、分布状況はやや分散としている。また、掘立柱建物が僅か1棟で、中心的な地域と大きな違いが認められた。</p> <p>若司谷遺跡からは遺構が検出されず、塚についても地山整形の可能性をもつものの、積極的に人為的に改変した痕跡は見だし難い状況であった。</p>							

千葉県教育振興財団調査報告第760集

首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書 33

- 東金市鉢ヶ谷遺跡（1）・（2）、大網白里市若司谷遺跡 -

平成28年12月22日発行

編 集 公益財団法人 千葉県教育振興財団
文化財センター

発 行 国土交通省関東地方整備局
千葉県国道事務所
千葉県稲毛区天台5丁目27番1号

公益財団法人 千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡809番地の2

印 刷 株式会社 正文社
千葉市中央区都町1丁目10番6号
